

新しい家庭科

自立した男と女を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す



家庭科—いま新しい地平に立つ



国立婦人教育会館図書

和

104183

1986

10

季節のうた



逐次刊行物

昭和 61.9.19 和

国立婦人教育会館
図書室

巴里に十月に着いた。

私のホテルはモンパルナスにある。

近くにリュクサンブール公園があり、プラタナスの大きな枯葉がかさこそと秋の音をたてて落ちていた。

巴里は先輩の画家たちが勉強した所だ、特に佐伯祐三の巴里の絵はあこがれた。

初めての外国は、見るものきくものすべてが新鮮で珍しかった。

巴里の街並はどこをとつても絵になる。

ホテルの室は四階にあつた、窓から見た巴里の空の下の屋根と煙突は、特に私の興味をひいた。なんとなくユーモラスなかたち、今でも私のモチーフになつている。

街は冬が近づくと音がしていた。(田沢 茂)

新しい皮袋に新しい酒を

やっそここまで来ましたね。おめでとうございます。でも、古い抑圧的な風がモーイをふるう現場では、これからが勝負です。新しい皮袋にもらるべき新しい酒をかもすのは皆様です。

女子差別撤廃条約の本旨

①すべての学科に対するすべての子どもの権利（性によるいかなる制約も、うけない）

②男女の役割の変革（とくに育児に対する男女の共同責任）にそってご健斗を！

香り高い新しい酒は、未来をひらく鍵になるでしょう。そして、だれがなんといおうと現場で心血をそそぐ者こそ、その鍵をにぎる者であるという言葉を、贈りたいと思います。

（参議院議員）



家庭科—いま新しい地平に立つ

○レポート○

もり上がった集會、東で 西で

〈東京では〉 「共修へ向けて、さあスタートノ」……………馬場 洋子 44

〈兵庫では〉 こんな家庭科やってます……………入江 一恵 49

〈京都では〉 「家庭科共修を考える会」発足……………圓尾 豊子 51

○発言○

学習の主人公たち

家庭科について……………横浜市立上郷中学一年生 40

男女で家庭科を学んだって……………東京都立松が谷高校一年生 42

染色体検査を受けた者の立場から……………脇 麻理子 54

学校給食を全廃せよ……………小寺 平治 56

○特集○

〈座談会〉 家庭科はいま、新しい地平に立つ I……………4

梶谷典子 上丸洋一 中嶋里美

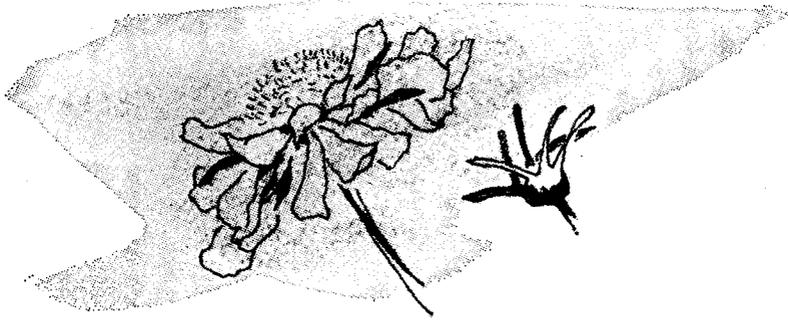
森 幸枝 和田典子 (司会) 半田たつ子

〈提言〉 家庭科はいま、新しい地平に立つ II……………22

家庭科に、家庭科教師に贈る言葉

すてきな女性、すてきな男性八十二名

〈巻頭言〉 新しい皮袋に新しい酒を……………久保田真苗 1



新しい家庭科を
創るために

小学校では 展覧会パートI 五年生作品「海の中」 村田 尚子 58
 中学校では 家庭科の今日と明日を紡ぐ…………… 磯部 幸江 63
 高等学校では 小麦を食べる…………… 立山ちづ子 68

季節のうた…………… 田沢 茂 74
 研究ノート「性」…………… 性差—女と男の違いはどこにあるのか? (3)
 ……………… 女と男の関係を考える会…………… 村上 昌子 78

教育のなかの心理学…………… 登校拒否 (3)…………… 小沢 牧子 80
 教室の窓…………… センセーをヒョーカする…………… 植垣 一彦 82
 いま中学校で…………… 和平ちゃんはおへそだ…………… 仲野 暢子 86

読書つれづれ草…………… 地下室…………… 武田 秀夫 88
 刺冠の中に輝く星…………… いのちは宝、子は宝…………… 吉田 和子 89
 ワンポイント…………… 女教師の養成…………… 秋枝 薫子 90

詩…………… 歌…………… さつまいもごはん…………… 小林カツ代 92
 季節のおべんとう…………… 急増する男性版じゃぱゆきさん…………… 酒井 和子 93
 赤かぶだより…………… 世界企業番付を見て考える…………… 福島 澄香 94

経済の目…………… タバコ事件…………… 結婚II(主婦)ではないはず…………… 鈴木みち子 95
 いろいろな十代人…………… CMの中の女と男…………… 吉田 清彦 95

○情報 中学・高校の家庭科はどうなる? 教育課程審議会の考え方 53
 ○資料1 大阪府立高校における女性差別撤廃に関する要求書、実態調査
 家庭科の男女共修をすすめる会関西グループ

○資料2 要望書 家庭科の男女共修をすすめる会全国交流集会参加者一同 46
 ○ひと 仲野暢子さん 67

表紙デザイン 加藤由美子
 目次イラスト 馬場洋子
 本文イラスト 編集部

アンテナ 102 ○十字路 100
 ○泉 98 ○"We" EDITOR'S NOTE 104

〈座談会〉

男女共修運動の

これまでとこれから



〈出席者〉

- 梶谷 典子 NHKディレクター
上丸 洋一 朝日新聞記者
中嶋 里美 埼玉県立所沢高校教諭
森 幸枝 前京都府立田辺高校教諭
和田 典子 家庭科教育研究者連盟会長
半田たつ子 ウイ書房(司会)

教育課程審議会は、教育課程改訂の基本的方向を決定しました。七月二十日、「家庭科の男女共修をすすめる会」の発起人の有志が、男女共修の家庭科をすでに十三年前、京都府立高校で一斉にスタートさせた森幸枝さん、朝日新聞で「いまこそ家庭科」を担当した上丸洋一さんに加わっていただき、楽しく語り合いました。

〈教課審の基本的方向を
どう受けとめるか〉

半田 教課審の基本的な方向ができました。これをどう受けとめるか、まず一言ずつお願ひしたいと思います。

和田 そうですね。一山越えたっていうかな、そんな感じですか。たいへん長かったけれどもね。山の頂きまではまだ行っていな

いけどー「一山越えた」、そんな感じですよ。

森 まあ、やれやれというかな、残る課題も多いので、まだこれからがたいへんだなあと思うんですけど、まずは文句なしにうれしかったです。

中嶋 差別撤廃条約やそのほかの情勢のもり上がりがあったわけですから、こういう結果は予想してましたが、はつきりこうなったことによつて、私たちも、地に足がついた形でやれる感じがあつてよかつたと思つています。梶谷 同じようですけどね。「やつとね、でもまだね」という。これから、本当にいままでよりもよく考えてやつていかななくてはいけないと思つたね。

半田 タイミングよく、朝日の連載がどれだけみなさんにはげましを贈つたかわからないと思うんですけど、上丸さんご取材なさつていらして……

上丸 限られた経験と、限られた資料の範囲内での感想になるわけなんですけど、やつぱりよかつたなという気がしますね。枠組は、とにかくも確保されたわけですから。しかし、そこに何をもち込むかが問題。そういう意味では、運動としてはこれらがむずかしいんじゃないかという感じがします。

半田 差別撤廃条約の批准ということをめがけて猛運動したときは、焦点がはつきりあつたし、次に、批准したんだから、こうしなけばいけないということがあったわけだし、いでも、もうこれで終わったんでしょ、いいでしよつていうムードになつちやうと、とても、やりにくい。だからそれを持続させ、常に関心を引きつけながら、家庭科の先生自身に、がんばつていただくとするのは、これからたいへんだと思つたね。でもここまです来たということ、まず、市川房枝さんに、ご報告したいなあという思いを持ちますね。



〈共修運動が

始まったころのこと〉

中嶋 梶谷さんから、七月九日にお電話いだいて、「おめでとうございます」って言われました。それから、この間、和田さんと半



田さんから梶谷さんのマンションでお会いして、Vサインをいただいたとき、すごくうれしかったんですけれども、なに

しろずっと、ものすごくいそがしくて、実感がわかなかつたんです。でも、今日、この座談会に臨むにあつて、昔のことをふりかえつてみた時、思わず涙が出てきましたね。

いろいろ具体的な場面がありますが、最初女子だけの家庭科は憲法違反じゃないかって私、思ったもんですから、梶谷さんとごいっしよに、憲法違反として訴える運動はどうだろうか、中島通子さんを東横劇場にお尋ねしたんです。たしか「女の一生」を上演して、劇の始まる前の時間をねらつて、下の喫茶店で会つていただきました。すると、裁判は、非常にお金と時間がかかるんで、運動にしたらどうかと、おっしゃいました。

半田 たつ子さんとは目白の田中屋というケーキ屋で初めてお会いしました。ちょうど雨

の日で、茶色のレインコートを着て、おごっていたことなどはっきり覚えています。森さんについては、婦人問題懇話会で、京都の「家庭一般資料」を参考にさせていただいて、みなさんにお話し、まるで自分が書いたかのように吹聴しました。

「教育評論」で和田さんのお名前は、前から知っていたんですけど、実際にお会いしたのは、この運動でした。朝日新聞にその頃、月曜寸評などという欄があったんですよ。和田さんが書かれて、そして和田さんのお知りあいの林陽子さんが書き、私がそれに呼応したりしました。私が出るにあたっては市川さんが、朝日新聞の佐藤洋子さんに電話して下さったりしました。みなさんとの出会いが目にかんで、すばらしい人と出会えて、すばらしい運動ができてきたということ、私は、今、よかつたなあと思っています。

半田 この運動は、私たち家庭科の中にいたものが一生懸命にするのは当たり前ですけれど、梶谷さんが、マンシオンを提供して下さって実に大きな力になって下さったんですね。もの静かな方だから、表面に立ってというよりは、あまりなさらなかったけれども、すごい力になっていただいたと思うんです

が、梶谷さん運動をかえりみて感慨深いことは？

梶谷 今運動が成功したことで（まだ成功したと言いつけてはいけ



ないんですけど）国際婦人年や、差別撤廃条約があったおかげだといふ言い方もあります

が、私たちの運動はその世界の大きな流れの中の一つであったと自負しているわけです。こちら流れをつくっていったということですね。

〈市川房枝さんの思い出〉

梶谷 始まった頃の思い出といいますと、私にはやっぱり市川先生の教えをうけたということだと思います。私は中嶋さんから、家庭科が今、女だけだということを教えていただいて、何人かでこの問題をしばらくの間勉強しました。何かやろうということになり、市川先生もこの問題に関心がおありだというので面会にいったわけですね。それは、秋の深まる頃で、来春運動をスタートさせれば、という気持ちでした。ところが、じゃあ、すぐなん

かやりましょう。暮れに集会をやりましょうと、パツパツパツパツと、あちこちに電話をかけて、ああ、これではなければ運動はいけないと。私も、それほどのろい方だとは思っていませんでしたが、これは、かなわないと思いました。

それから印象的だったのは、運動を始めてすぐの76年の暮れに教課審の答申があったわけですね。私はその時はもう少し前進があると思っていたので、ほんとうにガツカリしました。すると、市川先生がおっしゃいました。「まだ運動をはじめて十年にもならないんだよ」と。なるほど、これではなくては運動はできないんだと。この時、市川先生の「はやく」、しかも「ねばり強く」に打たれました。

半田 私は、お墓まいりにみんなで行こうなんて言ったんですけど、市川先生が一番喜んでいて下さるかもしれないですね。

中嶋 今日の座談会でも、これに市川先生が加わったらもう最高ですね。

一同 そうですね。

半田 時期を同じくして京都が、73年から共修にふみきったことが、京都でやれることが、どうして東京でできないのかという思い

にもなったし、私たちにとっては、非常にはげましになったんですよね。もしかしたら、京都の方にとっても共修の会が発足したことが支えになったという点もあったと思います。

森 今、言われた家庭科に直接関係のない人たちが、それだけの熱意で、市民運動を始められたということは、大変力になりました。



京都府立高校でいっせいに男女共修の家庭一般に踏みきるのことは、とにかく初めてのことだし、失敗は許されない。やり始めたからには後にはひけないという、歩き始めた時でしたから、共修運動はたい

へんな力になったと思います。ただ、家庭科の担当のものとしては、その後の家庭科の関係者たちの運動が全国的にもう一つなかなか、思うに進まないといういらだちはありました。

私も市川先生が、ほんとうにやさしいおぼさまという思い出があります。共修の会の集会にうかがった時、先生自らコートをかけて

下さいましたが、あの手のぬくもりが、いつでも忘れられないんですよ。

中嶋 73年の十二月八日の、家庭科教育検討会のと、市川さんのお部屋で、準備会をしたわけですよ。その時いろいろ意見がでたんですけれどね。私の印象に残っているのは、

一人若い方で、やや共修に反対の方が意見を述べてちよっと時間をとっていたら、市川さんが、「そういう人もいるだろうけども、先にすすめて」なんて言ってる。いろんな人がいるわけですが、そのさばき方なんかもじょうずですね。運動というのは、ある程度進めなくちゃならないので、あんまり議論だけ時間を使えませんから。

また、私たちが、集まっていますと市川さんはまえかけにおみかんなんか包んでもってきてくださったり、お茶なんかもハイなんて入られてくださって、やさしい方でした。

半田 私の二十一になった下の娘が、まだちっちゃくってね。一度冬休みに婦人会館に行ってきたことがあるんですね。娘が私のうしろについてきましたら、市川さんが部屋から出ていらして、「ヤア」ってね。なんのお世辞もないんだけど、あったかい方でしたね。

和田さんは、本当に長い間、家庭科のためにがんばっていらっしやって、家庭科教育研究者連盟を育てていらっしやった方として、感慨ひとしおのものがあつたらうと思うんですけれども、今、森さんがおっしゃった、「そのわりに家庭科のほうに火がつかなかった」ということ、どう思ひになりますか。

和田 私は、それも思わぬんですよ。この運動ってかなり高度で、そんなにわかりやすい運動じゃないと思うんです。



現場の家庭科教師は、今日の授業をどうしようかと、それに毎日毎日おいまくられているという状況がありますからね。

それをどう運動化していくかとか、どうみんなにアピールしていくかとか、そういうことにはなかなか開かれぬ。当事者の場合はね。そういうことを、私は現場の教師をみていて思うんですよ。

市川先生はやっぱり婦人運動で生涯貫いた人ですよ。だからね。運動家の目ってどうか、着眼点が鋭かつたんだなって。この問題

ね、ビックリ仰天してしまったの。NHKで、まったく家庭科と関係のない方がね、私のところにおざわざいらして、そして家庭科の男女共修運動をやるから、いっしょにやらないかって、むこうから言われちゃってね、まったく恐縮しちゃって。

私は家庭科の共修の主張というのは、今から三〇年前からやりましたでしょ。でも、それはいつでも現場の教師に向かってでした。現場が賛成しないのね、周りを説得なんて考えもしなかったし、まだまだ山ほど問題あったでしょ、そういう時点でしたからね。まあ同志はいたけれどもね。これは、ガンバラなくっちゃというんでね。

その後、梶谷さんは、一番ねばり強く私たちを支えて下さいましたね。「すずめる会」の会報を飽きずにといおうか、ザーっと作って下さってたんですよ。あの会報の威力ってすごい。あれは会員をつないだんですけど、その骨おりを一言もおっしゃらないでしょ。ちよっと、なかなかできないことですよ。敬服しているんですよ。功労者です。市川先生は元祖だけでも。

梶谷 もう少しか、たぎの仕事をしたいね。もっと時間さいて、ジツクリできるんで

しょうけれども、アタフタ、アタフタ、世話人會も出られなかったこともあったり……。和田 そんなこと、なかったですよ。

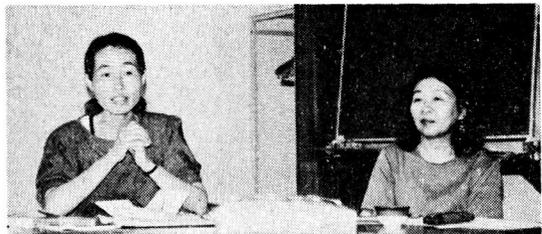
〈共修運動はなぜ成功したか〉

中嶋 他に大勢の方々がやって下さったんですけど、この方だけに限っていいますよね、森さん、和田さん、半田さんが、馬だしますとね。梶谷さんが御者でね、うしろから「共修！ 共修！」なんて言ったりしている感じだね。馬車なんかにはたえては、失礼ですけど。

和田 いや、まったくチームワークがよかったですね。

中嶋 人間関係としても、すばらしい人がいて、運動も、いい運動で、運動の方向と、人間関係がこれほど調和したのは他にないと言っているくらい。しかも日本だけじゃなくてコペンハーゲンやケニアの会議など、世界中の人々とも話し合ってきました。運動のすばらしいサンプルではないかと思うんです。

梶谷 いろんな立場の方がね、よく、よその会にありがちな分裂とかなく、必ずしも利害が一致する立場ではないと思うんですが、よ



くここまで来たと思いますね。

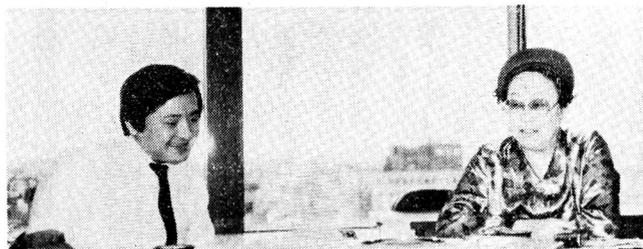
和田 思想信条は必ずしも、ひとつじゃないんだけど、共修をすすめるということだけは一貫してね。その一点を中心にしてみんながね、絶対ゆるがぬ原則としてとり組めたということね。私は、どっちかといえば、現場の家庭科の先生向けの運動を引き受けたかね。半田さんは、Weを通して外野の人たちに広くアピールするとかね、それぞれやってき

ましたよね。

梶谷 これから、意識が非常に多様になる中で、多様の連帯がなければいい運動はできない、というふうに私は思っていて、この運動を始める段階で、多様の連帯を願ってということもあったんですけど、運動をやってきて、できるということが証明できたということも思います。

半田 今、運動をふりかえってみると、まあたいへんなこともあったけれども、とても楽しくやれてきたし、たしかに運動をして自分が豊かになり、多様な人間関係がもてましたね。何かのためにひたすらに自分を犠牲にしてということでは息切れがすると思うんですけど、もらうものの方が多かったから、だからその意味で、みんなが喜んでくれたと思うんですよ。

中嶋 私は半田さんにすごく感謝しているんですけど、今でこそ、雑誌なんかに書いていたりしますが、それを最初にさせて下さったのが半田さんでした。婦人問題懇話会の会報に書いたのを見て下さって「家庭科教育」にも、そういうチャンスを下さって、それから外に向って書くチャンスが出来ましたんでね。



〈共修運動とマスコミの力〉

和田 もう一つね、マスコミの力。ことに婦人記者……。上丸さんは男性性だけど、朝日の特集は、たいへん立派で、最後の仕上げみただったと思いますけれども、初めの頃は、だいたい婦人記者でしたよね。佐藤洋子さんが学校にいらしてくださったあたりから、私たちがまださわれなかったような人たちに問題を広げて下さって、それがまた好意的でした。どの新聞社の方も、婦人記者が多かったですけど、同じ悩みをかかえていたということもあって、すぐわかってもらえたということ。その人たちの牽引力で世論を引っばってもらった。教育問題というのはいっぱいあるんだけど、ここまで正確に、共感をもつて、参加してもらえたっていうことはね、私は、たいへん特徴的なことだったと思いますよね。

上丸 佐藤記者が書いた『女の子はつくられる』という本がありますが、あれが新聞に連載された当時は、「専業主婦をバカにしている」「専業主婦がなぜわるいか」といった反応が強かったようです。けして専業主婦を悪

いと言っているのではなくて、それが女性の生き方であると、固定的に見るのはよくないということを書いてあるんですが、そういう時代から、始まっているんですよ。だから、私が今回やった仕事は、そうした仕事があつて初めて出来たと思つています。家庭科について、一般に理解を広めるという役割を果たしたとすれば、非常にうれしい。

一同 果たしましたよ。

半田 森さんは本(『男女で学ぶ新しい家庭科』)の中に、朝日の京都版ですか、「未来のパパにも教えなくちゃ」という見出しをつけてくれたときに、さすが記者はうまいことを書くわいと、思わず顔がほころんだと書いていらつしやいますが、マスコミの方の確な視点はさすがでしたね。やはりアンテナが鋭いというか。

中嶋 私は新聞の切り抜き担当でしたから、すごい量を持っているんですよ。松井やよりさんが取材に来て「家庭科の男女共修をすすめるのすすめるは進ですか、それともひらがなですか」「ひらがなになりました」なんてやりとりがあつたことを思い出します。一人一人の記者がいろんな形で協力して下さいね。

上丸 そして、最初に気付いたのはやっぱり女性記者だったんですね。(笑)

和田 女性記者でもお子さんかかえて、女の苦しみをいつぱいかかえている方がピツと反応してくれたということは、ありましたね。信濃毎日なんか、連載で、ていねいに、やってみましたよね。地方紙も、あちこちでね、それれどりと上げてくれましたからね。

〈共修運動と

全国組織の婦人団体〉

和田 それと、私は国際婦人年でできた婦人組織の四十八団体が応援してくれたということですね。この組織は市川先生が作られたということもあつて、私たちの運動を、非常にひいきして下さつたんですね。はじめからすべての団体が応援していたわけじゃないんですよ。ところがだんだんとね、みんな変わつていくわけですね。中間年までにはね、家庭科の問題だけはだれも反対するとか、疑問をもつとかいうことがなくなつちやいましたからね。中央官庁に対しては、民間婦人四十八団

体が一致して、この問題をもつていったということが、成功の一つ、かぎだったという気がします。

中嶋 それと、国会議員の方が積極的に国会でとり上げてくれたりしたことですね。

和田 この運動はほんとうにお手本だね。

中嶋 自画自賛じゃなくてね。客観的にみても、思うんですよ。

和田 これは現場の人間だけじゃだめなんですよ。

半田 私もそう思います。

梶谷 さらに特徴の一つは、決定する方たち一人一人をつかまえて、かなりしつこく要点を説明してきました。大勢でとり囲んでワアワア攻めたてるのではなくて、説得するという形でやってきたということが、よかつたんじゃないかと思えますね。

和田 とにかく敵をつくらなかつたね。

梶谷 文部省に対して、あるいは校長会に対して、言いすぎたかなというところがなかつたわけではないのですが、いっしょにできるところは、いっしょにやるんだと。

上丸 そこがすごいところですね。

梶谷 敵だと思われても、こちらは敵にはしないつもりでしたね。

まあ、世の中を動かそうと思ったら、自分が世の中を動かせる立場に立つか、でなければ、今、世の中を動かしている人を動かす

か、ですものね。

〈運動の中で〉

私たちも変わった

半田 手紙出してみて時間を調整して、会ってみれば同じ人間だっていうことですね。財界の錚々たる人といえども、人間としていくらでも共感のもてる人だし。そういう意味では、ほんとうの民主主義というのが膚でわかりましたね。

中嶋 私もだいたい同じなんですけど、たとえば、国会議員の方や社長さんなんかは電話をかけるのは、こちらもちよつと緊張するんですけど、でもそういう方とも、どういふふうにコンタクトをとったらいのかっていうことを、この運動で知りました。文部大臣とも話しましたから、自分たちの力でやればなんとかできるんだなあという実感ですね。



半田 中嶋さんが婦人問題懇話会会報に書いていらっしゃる文章を読んでいる時は、ずいぶん先鋭な人だなあと感じていたんですけど、今だってそういうところはあるけれど、運動やっている間にやさしくなりましたね。

やわらかくやさしくなれたと思うの。(笑)

和田 確信がもてたということじゃないのかしら。非常に気負いたって、つっぱって、がんばっちゃってのがゆるんだっていうのかしら、私もほんと、そう感じました。

中嶋 私、学生達や若い人達と反戦運動をしたりして、デモに行ったり、議論したりはよくやっていました。でも一番やりたかったのは、男女平等運動でした。

半田 家庭科の問題は、婦人問題・婦人運動として、教育運動として、生活という面でもいうように、いろいろな側面があると思います。梶谷さんはよく生活を大切にとか、生活のことを学ぶとか、お書きになりますけど……。

梶谷 ほんとに自身が生活を大切にしているかというところがあるんですけど、困っちゃうところがあるんですけどね、生活のことを考えていたから家庭科の運動を始めたというのではなくて、出発点は男女平等だけだったんです。家庭科で差別があるということを知って家庭科の問題を

考えていくうちに、いろいろわかってきたところがありますね。

半田 それを中嶋さんにも感じますね。はじめ中嶋さんは女性解放を勇ましく論じていらつしやった。そのうち共修の会で合宿をする時に枝豆ゆでてきて下さったり。

中嶋 とうもろこしも持っていましたよ。(笑)

半田 Weの読者会でお家にうかがった時に、皆で肉まん作って食べるようなことを考えて下さったり、すぐおしゃれにもなられたし。

中嶋 観念や理念も大事ですが、どんなに教師がすばらしいことを言っているけど、その教師自身が幸福でなければ。眉をつりあげて男女平等、憲法は守られているかと言っているも、その人自身がほんとうに豊かで幸せである方向をめざしているかを生徒が感じとってくれなければと、今は思います。自分の幸せと理念を結びつけていくということが大事です。

家庭科共修運動で自分が変わったことといえますと、自分の教科の中で家庭的な領域を扱いたいということ。たとえば朝日新聞の「女と男」という欄に、59歳ぐらいの男



の人で失業して、はじめて家事をやってみて、いかに自分が妻に対して横暴であったとか、という投書があったんですね。失業しなければわからなかった、よかったということが大きく出ていたんです。それを切抜いて、あなたの家では家事分担はどうなっていますか、これを読んだの感想と将来あなたは家事分担をどのようにしたいかを英語で書くと、期末試験に出したんです。50分のうちの20分ぐらいしか使えないんですが、生徒はすごくよく書いているんです。家のお父さんは少しもやらないで前々からおかしいと思っていたと。

私も、これをみせてぜひ家でも話し合ってくださいと書いたんですけれど。そんなふうに分身の教科の中に、家庭的領域をいれています。今度は「衣」を入れていこうと、今、イギリスのファッションの雑誌なんかを読んでいます。一橋出版の家庭科の資料集も時々授業で使います。

梶谷 衣食住の問題というのに私がかかわったというのは、実はこの運動の前に一つあったんです。ラジオで婦人実用番組をやったことがあるんですね。あなたがやっているんじゃないNHKの料理はまずいでしょうねと言わ

れたんですね。(笑)ほんとに担当していてもピンとこないことがたくさんあって、今のほうが、家庭科の運動のおかげで生活のことがわかってきたという感じがあります。

和田 はじめて聞きますね。

半田 上丸さんは、たくさんの学校をお回りになって家庭科の授業をごらんになったわけですが、全部で五十校とか？

上丸 それほどは見えていませんがね。取材した学校数でいえば、それくらいあるかもしれませんね。電話取材もありますので。

半田 家庭科とは無縁の方でいらしたと思うんですけども、その方が実際に家庭科をご覧になって感じられたことをぜひうかがいたい。記事に書けないことも含めて。

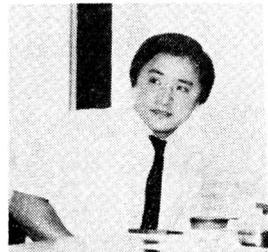
上丸 私自身は小学校でしか家庭科やってません。中学は技術と家庭、全然別でした。高校は男子校だったので家庭科をやっている女子の姿も見えていません。実は野球少年で、およそ家庭的なものから最も遠いところで学校生活をすごしたわけです。

もちろん家庭科が社会的な問題になっているというところは、記者として承知していましたが、家庭科でどんなことをやっているかについては、まず白紙に近い状態でした。四月

に実践編といえますか、各地の様子を紹介したんですけれども、私たちは専門家ではないので、なにがあるべき家庭科の姿かという点とは全然わからないわけです。記者の目で見ても、おもしろそうなところへ行くわけですが、結果的に、そうはずれてなかったかなあ、という気はしています。高知大学教育学部附属の養護学校に取材に行きまして、そこで、手先に力を集中できないために、ガスレンジに火をつけられない子供たち——もう十七、高校三年生の年齢ですが——に先生が、食事だけはとにかく自分で作れるようにしたい。自分でごはんだけは整える力をつけて卒業させたいと、家庭科は全部調理実習をやっているんです。それこそ神経を集中させて庖丁を使っている。

もちろん技術検定できゅうりを何秒間に何枚切るといふのは全然違うわけですね。生活していく力、生活をつくっていく力、をつけていくというのは、ああこういうことだったのかと、そしてそうした力をつけていくのに男女の別はないと、ほんとに腹がわかったと言いますかね、了解したという気がしましたね。

ただ、連載中の自分の生活は、原稿書きな



がら二時三時まで会社にいるわけで。(笑)

夜中に家に帰って行って、又次の日取材に行つて、という生活をくり返していきまして、生活を大事に、ということを書きながら、自分の家庭と自分の生活はむちゃくちゃであったということはありませんけれども、これを書いて、家庭科を教わらなかったために、自分の認識、体験に何が欠落していたか、やつと気づけたと、そういうことがありましたね。

〈家庭科の内容を知らせる〉

上丸 たとえば、性の領域というのはほくは習ったことがないんですね。小学校でいのかの大切さという観点から教えている授業を見

て、うらやましく思ったものです。

半田 今のうらやましかったというのは、大きく書きたいですね。(笑)

上丸 ほんとにそう感じました。考えてみたら、女性の体とか、広い意味での生理とか、だれに教わったということが全然ない。家庭科の教科書や資料を見ながら、ああ、こういうことだったのかと。ほんとにおそまつな話なんですけれど。

こういうことをなぜ学校できちんとやらなにかと、自分の経験からいっても感じましたね。

中嶋 家庭科でやっていることを男子にみせる。そのあたりが今後の家庭科の先生たちに必要になると思うんです。ともすると、女であるとか、家庭科であるとかで、縮こまっているところを、もっとオープンに、これこそ重要なんだという形で、皆の前に提示していくということが、今、上丸さんがおっしゃった「うらやましい」に結びつくわけですね、ぜひご自分を出していただきたいですね。

上丸 ある高校の家庭科教師は一年間の生徒のプリントをまとめて、それをクラスの男子に読ませて、感想を書いてもらうことをして

います。すると男子の感想文は、こんなすごいことをやっているのかということなんです。

別の、都立高校を取材に行った時、男子生徒もそこにいて、最初に男子生徒に「家庭科どう思う」って言ったら、別にどうでもいいんじゃないか、みたいなこと言ったんです。ところがどんな授業を受けたかということを生徒に聞いたら、男子生徒は、「へえ！そんな大事なことやっているのか」って、言うんですね。

家庭科は男子もやったほうがいいんじゃないか、と、言葉としては同じでも、単身赴任もあるからといったレベルの理解がまだ多いんじゃないか。皆さんがつくってこういうとす家庭科の前身をもっともっと広めたいですね。

一同 そうですね。

半田 もう一つ入れておきたいと思うのは、市民運動をやっていく中で、男の人が関心を持つようになった。それも、昔の「ゴキブリ亭主」ってイメージじゃなくて、カッコいい男の人。考え方が柔軟で、絶えず新しいことにチャレンジしていこうというようなタイプの男の人たちに、共感をもってもらうように

広げたということもあると思うんですね。

だから、男性との出会いの中でのエピソードとかをぜひ話し合いませんか。

和田 はい、私、亭主が変わったんです、共修運動はじめてからね。

半田 それは一番大切なことです。(笑)

上丸 あるいは社会を変えるより大変かも。(笑)

和田 明治生まれの亭主ですからね、男子厨房に入らずでしょ。そういう男ですからね。

ただ私が十年間あきずあきずこれをやっているでしょ、なんでそう夢中になってるのかということは、ボツボツでも言わなきゃならないわけですよ。ボツボツ一口ぐらいつづつ言っているうちに、だんだん積極的に家事をやるようになったんです。(笑・拍手)

それから私が家庭科の問題で出かけることもはや一言も文句を言うことはなくなりました。(笑)

中嶋 あら、文句言っていました？

和田 文句言っていましたよ。もちろん。勤めることだって反対だった人ですから。おれはお前が勝手なことをするのに被害をうけるのはゴメンだ。こういうふうな態度でしたからね。仕事だってそうでしょ。まして仕事以

外のことで。それから。それにめげずに私はやってきましたけれど、そういう中で、この運動が一番効果があった。組合運動だけじゃやっぱりダメね。家庭科だったから変わったんだと思うんです。これが私の運動の成果。

梶谷 いつも夜遅く電話しておつれあい様に出てくださいませんか。(笑)

和田 お互い様で。(笑)

半田 私は、嵐の前にした集会の時、前田武彦さんがいいことを言われたのが記憶に残っているんです。ほんとの意味でステキな人間というのは、両性的なものだ、ということね。「今日のように天気が不安定な時に、前だったら明日の日曜日ゴルフができるだろうか、ということしか思わなかった。加山雄三さんのヨットに乗って、加山さんがちっちゃなキャンピングで料理を作るのを見ながら作るのを覚えていくうちに、だんだん生活のことや家事に興味関心を持つようになった。不安定なお天気の日には洗濯物を入れたり出したりする、女の人の気持ちに気付くようになった」と、それは自分がすごく豊かになったことと、そういう意味でいわゆる男性的・女性的両方のものをもつ両性的なのが人間としての豊かさだとおっしゃった人です。とてもいい

言葉だと思っています。

中嶋 私のパートナーなんかも私に近ごろも
っと家事をやれ家事をやれって言うぐらい。
相手にどうしても負担が多いんですね。(笑)
職場があつて、運動しているから、家の中で
は彼のほうが家事が多いんですけど、まあ、
それは歴史的にいいと思ってるんです。

私のつれあいが雨の日、授業中に「洗濯物
が気になるなあ」って言ったらしいんです。
そしたら野球部の子が「なッさけないなあ」
って言ったんですって。彼が次の言葉言えな
かったというんで、そういう時「情けないと
は情けない」と切り返さなくちゃダメよと言
ったんですけど。

半田 森さんの本にも書いて下さっています
けど、最初のうち、「なにがかなして男が米
とがんならん。あほくさ」とか言った時に、
男の沽券とは何かをとりあげて授業になさつ
たりしていましたね。

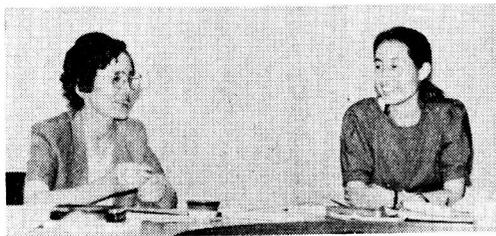
森 でもそれは最初の一、二年で今はあたり
前になってしまっています。とにかく男性
は、理念的にはよくわかっていても実害を蒙
ることはいやなのですからね。

男性といえは荻昌弘さんなどが家庭科のこ
とをマスコミで度々語られました、説得力

がありましたね。

和田 あの人を見直しましたね。ステキな人
なんだなあつて。

梶谷 ほんとに男性も少しずつ変わってきた
したね。この会に限らず女の問題の集りに、
昔からチラホラと男性は参加していたんです
けれど、残念なことに、昔は、どうもずれて
いるという方が多かったですね。(笑)せ
つかく参加していただいているんだけれど。
最近的確な発言をなさる方が多い。講師と



かパネリストよりも集会の席に並ぶ男の方が
うんとよくなってきたという感じがあるん
ですね。



〈これからどう運動するか〉

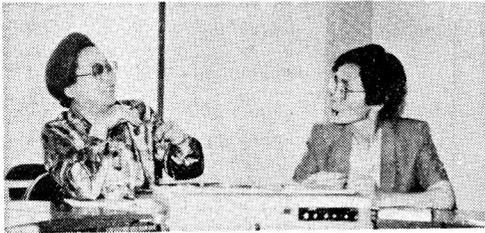
半田 これからどうしていくかということ、家庭科の教師に贈りたい言葉、望むことで、思う存分どうぞ。

中嶋 さつき森さんの発言を聞いていて思ったのですが、生徒はわかりやすい言葉で言わないと理解できない。もしあなたたち結婚することを望むならばね、京都とか長野とか、家庭科の必修をやっている高校を出た人と結婚したほうがいいのよ、って具体的に言わなければ。まずは家庭科の先生が自信を持って、いろいろな所で発言することです。家庭科の先生は学校の中で一人とか、少数なんですから、意識を持ってらっしゃる教師と一緒に立ち立っていくという運動が必要だと思います。

森 はじめにもこれからのほうが難しいと言いましたが、幅広い運動の力があってこまで来たけれど、今後も運動体からの支援はもちろんだきな力になります。中身を作り実践するのは家庭科の教師だから、うんとがんばらなければならぬですね。

男女差別の解消ということの他に教科の科

学性の追究、つまり教科論を京都では非常に重視してきたわけです。というのは、男の子が入ってくるなら中身を変えなくちゃならない、っていうのは、そもそも教科ではないんじゃないか。科学ではないんじゃないか、そんな教科は、おかしいうことでした。そして実際に男女共修で教えていこうとすると、まずは教師自らの生活観なり家庭観なり、世界観なりを変えていかなければ、できないわけです。また、さつき現場の先生に對



してもう一つ立ちを感じたと言ったのは、自分の教科に責任を持つというのみで、もっと教科の中身についてきっちり考え、教科論を自分の問題として考えていたできたかたということを言いたかったのです。

これからの問題としては、一番中身作りになるんでしようけれど、さつきも自信を持つてといわれましたが、文部省のおスミ付きをもらえたからとか、どんな指導要領がおりてくるかとかいうことではなく、現場の家庭科の先生が、必修の中身を創っていくことが大切だと思っております。

ほんとに男女の生活的自立を通して、民主的な人間関係を育てる家庭科を、私たちが創るという自信というか自覚が必要ですね。

現場にはかなりドロドロしたものがまだまだあります。なぜ家庭科の先生がなかなか発言できないかという点、受験体制が厳然とあるんですね。それを乗り越えるためには、連帯、教師の中での集団学習が一番大事になってくるんじゃないか。一人対学校ではとてもとてもたちうちできないという状況が、あるということなんです。また教える中身についても、生徒に対して集団で学ぶことを求めると同様に教師も集団で学ぶことが必要です。そ

れには先生方は忙しすぎる。そんないろんな条件があるわけですけど、とにかくによりもこれからは現場の先生ががんばらなければね。

上丸 取材させてもらった先生は、皆さん意欲的に取り組んでいらつしやる方ばかりなんだけど、やっぱり点であって、必ずしも面となっていない。それが一点。また、読者からの投書に、共学になるのは非常に結構なことだが、これは上からきた制度の改革ではないか、というのがありました。こういううけとめ方をしている人もいますね。

半田 家庭科の教師が、点から面になっていくためには、個人として誠実な努力をするということ以外に、プラスαがこれから望まれるわけですね。そういうところで和田さん、いかがですか。

和田 でもね。まあなんてのかな、国民一般はね。西風が吹けば西風になびくとかいう側面もあるんですよ。だからいいよ、つき出されてね。東風が吹いてきたらね。やっぱり矢面にたたざるをえないわけでしょ。だから私は、この矢面に立つというその中でね。少しずつは変わっていくという期待持ってるんです。自己変革を否応なく迫られるし、そ

れからさらに広い批判の対象になるわけですよ。そういう中で、家庭科の先生が変わる転機になるっていう期待を持っている。途中でつぶれないようにするためには、どうしたらいいかといえね。家庭科の教師、あなただけじゃないのよと、いっぱいいるのよと、それが見えてきた時ね。私はそんなに心配してない。その中できつと仲間もつくっていくだろうし、勉強もしていってくれるんじゃない



いかっていう楽観的、期待。
森 それは、京都でもね。始めた時は必ずしも京都の家庭科教師が全部問題なく取り組みたというわけではありません。実際やってみて、教師自身変わっていくわけだから……。
和田 やる中で変わっていく、それ以外になり。

半田 そうですね。

上丸 それと、いろんな学校の先生に話聞いときましたが、いまや女子のための教科であるとは公けにはもう誰もいけませんね。技術検定で「三冠王」をいっぱい出している学校の先生も「男女共学をどう思いますか」ってきくと男子もやっつらいんじゃないんですか、と答えます。その人は女子には女子の特性があるとは言いません。けれども、例えば老人の介護のところとかは男子もやっつ方がいいという言い方で、あからさまには男子が学ぶことを否定はしないんですね。ただ、本心からそう思っているかどうか。これから制度として実施されるまでの何年かの間に心の準備というか、研鑽というか、充分準備していくことが大事なんじゃないでしょうかね。

半田 今一人ひとりが自覚を持てとか、自信

を持ってとか、一人ではないんだ連帯でやれとか、これを転機に生かせとか、いろいろ出ました。そういうこと以外に梶谷さんいかがですか？

梶谷 これからの運動ということでお話ししていくとですね。今までは世論を盛り上げるということもあつたけれど、主として制度を変える力を持つ、ある限られた数の人たちに一番強く働きかけていたと思うんです。けれども、これからはずっと数の多いところを目標にすすめなければなりません。今まで言ってきたのはある程度「べき」論でした。これを具体的にこうなるというところまで持つていくのが大変です。

それから世の中の動きをみると、男女平等は確かにずっと進んできた、家庭科の教師について理解が進んできた、だけどその底に古い意識も決してなくなっていない。私はもうちょっとそれが弱いかと、運動始めた時には思っていたんですけど、本当に強くて、それがびよこっ、びよこっ頭をもたげるんですね。男女共学さえ考え直そうという団体がありますから。これから先、そういうものがむしろたくさん出てくるんじゃないか。それに向かって何をしていくかという、そこが難し



いとこらだなど思っています。
半田 そうですね。

中嶋 選挙が終わったばかりですけれども、結局もつと政策決定の場に、女の人が入らなくてはいけません。家庭科の教師の歴史と女の歴史は、全く並ぶものだと思うんですね。ですからそういう意味で自分たちで考えて決定して行動していく力を持つしかないんじゃないかと思うんです。自分たちが主体者であるという自覚のもとにね。私はそういう意味で

家庭科の教師と共に、新しい女の歴史を築いていきたい、それは男性の歴史でもあるわけですけど、そんなふうには思っています。

和田 一言付け加えます。私ね、やっぱりこの運動のことをみんなにうんとね、わかってもらいたいって思うの。

半田 そうですね。

和田 それにはね。具体的に言った方がいいと思うんだけど、差別撤廃条約の学習運動を起こしたい。家庭科の教師は前文だけでもよく読んであれこれ言われたら、それを職員会議でも言いなさいと。

中嶋 賛成。

和田 「世の中どう動いているのか、先生知っているんですか。差別撤廃条約にはこう書いてあるんです」ということをいつでも持ち出してね。自分の言葉で説得できなきゃ。あれは国際的なものだからね。世界中の女たちの、共通の願ひなんだと、家庭科の共修はその一環としてやるんだというのをね、うんとうんと宣伝したい。

中嶋 そうですね。私たちの武器ですね。教育基本法・憲法・差別撤廃条約と、それで道をひらいていくことはできますからね。この差別撤廃条約ができるまでもね。世

界中の女たちがすごく苦労したわけでしょ。つくるだけでも、国連レベルで。ですから、それを最大限に生かすということが、やって下さった方たちへのご恩返しだと思いますから。

上丸 本当に、日本政府がよく署名・批准する気になったものです。

和田 すごいものですね、すごいものです。

半田 中嶋さんのお話じゃないけれど、こんどの運動の成果は女の人たちが懸命に頑張った一つひとつ築いてきた世界的な展望が背景にあるわけですよね。その流れの中で、今度の運動が実ったんだからまさにいい時代に生まれて、いいことに関わりながら充実した運動だったと思います。

これからに生かそうとする時に心配材料はいろいろあります。生活の便利さということ、コンピュータが家庭の中に入ってくることだと思ってしまう、いち早くその勉強を始めようというような人達がいけないとは言えないわけだし、産業界が家庭科を利用しようと目を光らせているし、いっぱい不安材料はありますけれども、歴史的な意義の認識をどれだけ持って、そこに立脚して、どれだけ切り拓いていくかということですね。



中嶋 一つの文明を変えていく、物質文明とか、弱肉強食文明を変えていくという視点を充分持っていると思うんですね。家庭科っていうのは、ですから一番重要な教科・科目であるという認識をすべての人が持つことですね。

上丸 そうそう。指導要領は、そうなるとは思えないから、学校の中にいらっしゃる先生に孤立感を感じさせないように。

半田 そうですね。

上丸 つまり理念としてはこうやって着々と前の方に進んだとしても、学校の中のどろどろしたものは、抜き難くありますものね。

和田 そういう現場の教師を励ますようなセンターがほしい。「すすめる会」はそういう役割をこれからは果たしていく必要があるんじゃないでしょうかね。

上丸 市民運動と学校の先生との回路をね、設けておいた方がいい。

和田 ええ、そう思います。

上丸 つまり一人じゃないんだということ。

和田 ええ、そうなんです。

半田 「回路」ということ、一番の課題ですね。

森 今後、制度的に実施されるまでに七、八

年ありますが、その間特に教育委員会がどう
いう姿勢で臨むかということが非常に問題だ
と思います。各都道府県、教育委員会に対す
る運動、実施できる学校から実施するのか、
それとも制度を待つてというのか。もうすで
に、まだ先の話なんだからあわてる必要ない
っていう県教委の姿勢がそこらじゅうに見え
るのですから。そして「現在の指導要領は厳
として生きて、女子必修なんだから」など
と今ごろ言っているわけだから。だから今ま
では教育課程審議会に対して、これからは都
道府県教委に対して、現場の先生方一人や十
人の力ではどうにもならない問題をとり上げ
て迫っていく。

和田 攻撃目標を変えていくわけね。(笑)

中嶋 楽しみですね、これからが。

和田 数が多くなっちゃって。大変ね。

中嶋 やっぱり運動は息長く、楽しくやって
いく中でね、楽しい時代がくるでしょう。

半田 運動始めた74年に、中嶋さんからいた
だいた年賀状に「今年がどういう年になるか
楽しみです」って書いてあったの。憶えてい
らっしゃいますか？

中嶋 ええ。

上丸 家庭科の先生はやっぱり大変なことを



担ってるんですね。ある先生に聞いたんです
けど、家族の領域の話とかする時に、結局、
自分自身が問われるわけで、非常にいう緊張
感を覚えると。そんな大変なことを担ってい
るわけだから、私たちは「あなた方頑張って
下さい」じゃなくてね。やっぱり何らかの意
味で支え、支えられながらというか、そうい
う関係の中で、教育そのものを市民の側に取
りもどすというか。

半田 そうですね。

上丸 具体的な手だてはなかなか難しいです
ようけど、そんなことが必要なんじゃないか
という気がしますね。

森 本家に家庭科教育のあり方はこれからも
問われ続けねばならないし、マスコミも追い
続けてもらわなければならぬと思います。

その材料を提供していかなければ……。 (笑)

半田 これで終わったとしないでね。(笑)

上丸 いやが上にも詳しくなりましたから。

半田 どうもありがとうございます。

家庭科に、家庭科教師に贈る言葉



すてきな女性、すてきな男性62名
の方からのメッセージ

ブーケにして、家庭科に、
家庭科の先生方に 贈ります。
各ジャンルごと、いただいた順に
並べました。

お一人ごとの肩書きは、
はずさせていただきました。

〈高校生から〉

田中 美帆

私達高校生の多くは、「未来」を見つめる
術(すべ)を知らないのです。

その日、その日の授業を、定期試験が終わ
ったら、入学試験がすんでしまったら、もう
役に立てる方法がわからなくなる……それぞ
れの科目に対する知識は多くても、それらを
総合して、「現実」を認識し、「未来」に応
用させる場はほとんどありません。

しかし、「家庭科」なら、その場を高校生
に提供できるのではないのでしょうか。「家
庭科」は、まだまだ夢のある、改良の余地の
ある科目だと思っております。

〈家庭科、初の指導要領の編者から〉

山本 松代

家政科、家事(裁縫)科というような言葉
に代わって、家庭科という言葉が新しく出現
したのは、戦後間もなくのことでした。それ
は、所謂「家事裁縫」という言葉が示してい
たような「家の中の手仕事」を主に取り扱う
のではなく、家庭生活そのものを総合的に取
り扱うという意図からでした。従って、それ
は女子だけが学ぶ課題ではなく、男女ともど
も積極的に学び、考えあひ、またともどもに
手をかけて作業する、ということでした。

そもそも家庭生活というものは、男女によ
って成り立っているのに、その基本を女子だ
けが学ぶということは、理不尽なことです。
最初の家庭科の指導要領を編集した時の基本
は、「小学校五年から高校を終るまで男女共修
で」ということであつたのです。

この大切な基本線を見失つたのは、一体ど
ういうことなのでしょう？ どうして見失つ
たのでしょうか？

家庭科の新しい地平は、この基本線をしつ
かりと見つめ直すところから始めてほしいも
のです。

家庭科はいま、新しい地平に立つ II



〈家庭科の先輩から〉

押切 郁

「男女共修へ……」の報道に、思わず身をのり出してテレビに見入りました。

十年來の運動が大きなるうねりになって、とうとう国を動かしましたね。おめでとうございます。男女共修運動も、一つの節目を迎えたことでしょうか。これからは運用面の問題と、何よりも家庭科教師の力量が問われることになるでしょう。これからもまだまだ新しい道が続きますね。

今日、十日の「きょうのニュース」は、東浦めい解説委員が、このテーマをとりあげて解説していました。若いアナウンサーの質問は、とかくこのニュースのマイナス面をとらえたようでしたが、私と同年代と思われる東浦さんの解説は、まことに適切でした。

要は、男女平等と、固定観念をなくすこととし、これを表面だけでなく、実面で実現させてゆくこと、学校教育だけでなく、家庭生活がそうでなければならぬこと、そして家庭科教師の力量も問われるという点を強調していました。

審議会で出された案は、必ずしも望ましい

ものとは言えませんが、第一の大きな壁をつき破ったという事実は、高く評価されます。

一気に私たちの望む方向にいかなくとも、あかずその願いを持ち続けることで実現されるものと思います。この第一の関門が一番大変だったのですから。文部省より早く、社会の風潮は、その方向に流れつつあるように思います。しかし、このことがすぐ商業主義に利用されないようにしなければと思います。

舟越 立子

指導要領にはこだわらないで、自分で教材を決め、無理も無駄も気にしないで、時間と労力の許す限り教材研究をし、思い切った奇抜な方法で授業を進めてみてください。

反省は自分一人だけでなく、生徒の批判も受け、次の飛躍に備えてください。

横山 雅子

経緯を細かくたどれば、納得できない点も残りますが、家庭科を男女で学ぶ時代になったこと、うれしく思います。

とりわけ、受験科目中心の勉強に興味や意

欲を見出しがたい中学生、高校生たちに、家庭科を学ぶことは大きな救いになるのではないかと、その年ごろの子どもをもつ親として期待しています。

時代の幕があき、家庭科にスポーツライトがあてられています。新しい家庭科を創ってゆく演出家たるべき先生——あなたの役割は大きいと思います。変わることに、変えてゆくことを、どうぞおそれないでください。自らの生活を主体となつて、担つてゆく可能性をもつ、生徒たちが、そしてじつと見守る熱心な観衆が、あなたの前にいます。

持田 ナミ

「家庭科、高校は男女共修」という新聞の見出しに、目を疑いながら、内容を読みました。興奮気味で繰りかえし読むうちに「これからだ」という気持が湧いてきました。

情報基礎(中)技術一般(高)の科目という言葉に、内容によつては、家庭科が変質するか、拡散されるのではないかと、という心配も出てきました。民主的な家庭づくり、子どもの人間らしい発達をたすけるために家庭科は役立てるべきではないでしょうか。

家庭科の内容づくりは、直接子どもの教育に責任を持つ家庭科の先生です。

より多くの仲間と手をつなぎ、研究に、運動に力を出してください。ともかく「男女共修」の一つの山は越えることができたので、外野からも応援はおしきません。

平本 宣子

昭和二十一年より家庭科教師をして生きてきた私は、家庭科とは一体何なのか悩みました。模索する中で、女性が生きる哲学、即ち自立への力をつける教科なのだ、自分なりにいいきかせてきました。そして今、それは、男女が人間として生きるために必要な教科であり、その内容は、経済的・生活的・精神的・社会的に自立できるものを体系づけたものでなければなりません。

私達の生活をもう一度よくみつめなおし、そこから何が大切かを分析し、何を身につける必要があるかを、何を学ばせなければならぬかを、一日も早くつかんでほしいと思います。男女平等はかけ声だけでなく、本当のものを成長させてほしいと思います。

大森 和子

家庭科は、中・高校でも男女共に学ぶことになり、まずはその成果をよるこばなければなりません。

しかし、教育はこれからです。もしこれらの教育の方向に懸念すべきことがでてくるとすれば、それは教科の中でも、家庭科に端的にあらわれると思います。

家庭科の先生方の責任は重大です。家庭科は主要教科ではない、というような考えが絶対あつてはなりません。家庭科を指導できる先生は、理科・社会科を十二分に指導できる人で、その上、生活にかかわる技能の教育までできる人という自覚を持っていた方がいいと思います。

(大森和子氏は、八月十六日急性心不全のため死去されました。氏の遺言を胸に刻み、ご冥福を祈ります。編集部)

♡

楠崎ルリコ

終戦直後の昭和二十二年、新しい使命を担い誕生した家庭科。中学校の場合、男女共修の家庭科から、あつという間に、職業科選択、職業・家庭科、技術・家庭科と、目まぐる

るしい指導要領の変遷を重ねに重ねた。

そして、それは「家庭科とは何か」と疑問を抱かざるを得ないような、家庭科の主体性が全く見られない物づくりに終始していた。

家庭科は、人間の生活の原点にかかわり、自立した人間づくりの教科として、存在価値があるのではないだろうか？

家族・社会・大企業・国家のための個の存在ではなく、逆に個の確立のための家族・社会・大企業・国家のあるべき姿を求めたい。

そのための家庭科は、まず家族とのかかわりのなかで、自立した個の確立を目指す。

それは、個の可能性の最大限の開花をねがった自己実現の姿。そして、年齢・性・貧富・職業・学歴・民族・人種・国家等の別なく、対等な人格の持主として、個（人間）の尊重、衣・食・住はそのための手段的存在である。

家庭科の男女共学必修による新しい家庭科に、新しい人間づくり、家庭づくりの責任の重さを感じる。

男女共修が形なりにとも実現をみたことは、わが国教育の大きな流れからみて、当然の結

山田 泰子

果であろう。

新しい地平に立ったというものの、小学校においてすら、主要教科という名に押されて教科研究は一般に低調である。

まして中・高校においておやと思うにつけても、指導者の意識の改変が望まれる。高度成長がもたらした生活・福祉面のアンバランスに焦点をあて、自ら燃える厳しさがほしいものである。

なかでも、学習課題の設定を重視したい。勿論家庭科は物づくりの教科ではない。しかし、わが国の伝統を生かした近代的な物づくりも、決してなおざりにはできないものと感じている。男女が力をあわせての家庭生活。家族愛につながる家庭生活を大事にしたいものである。

保科 達子

50年、私が初めて中学校で家庭科を受持った時、調理実習は青空教室でした。鍋・釜・まな板・庖丁・七輪……材料はおろか、用具まで、男子も女子もそれぞれ都合のつく物を全部持ち寄って、運動場で調理をしました。喜々として協力して調理するクラス、それを

休み時間ごとに窓に鈴なりでのぞくクラス、午前中全部を使つての調理実習は「早く設備を」との一種のデモでもありました。

そして翌日、ある父親が「男の子は神の子だ。それにメシなど炊かせるなんて」とどなりこみ、「全くその通り」と同僚の男性教師のひとりが同調しました。

性による差別撤廃が国際的な広がりで見られる今、男の子を神の子などと差別しないで、同じヒトの子として豊かな人生を送れるよう教育できる時を迎えたのは、本当にうれしいことです。

新たな生活の貧しさの中で、ファッションに幻惑されてそれと気付かぬ子ども達に、本当の生活の豊かさを求める道を教える家庭科でありたいもの。生活の豊かさを求めるのに男女の区別があるわけがありません。

池田 悠子

明治以来の百年余に及んだ女子特性教育としての家庭科にピリオドを打ち、全国的レベルで「共修」という新しい出発点に立つ事になるのは、本当にうれしいことです。

「戦後教育総決算」などと、その評価が云々

されるような状態の中で、確実に一歩一歩成長して来た、私たち家庭科教師の熱い思いとそれを支援して下さった方々の力のたまものです。

教科が「新しい地平に立つ」時とは、どういう時でしょうか。例えば「日本史」が終戦で、今までの皇国史観から、学問としての歴史へ出発した時、又考古学が骨董集めの趣味屋の手から離れて、科学として体系化される時、のように、各学問は、それぞれその時を持っていくと思います。

家庭科も正にその出発点に立っているわけで、体系化・理論化が、今後の課題と見えます。先見性を持ちながらがんばりましょう。

〈他教科の立場から〉

岡 百合子
高校で歴史を教えていた時、歴史から離れて話をすることに「脱線」という罪悪感が強く、余り出来ませんでした。

しかし、この春辞める決意を生徒に伝えようとした時、どうしても自分のこれまでの生き方を話さなくてはならなくなりました。

その時の生徒達の異常な集中度を見て、私

は自分が今まで何を「教えて」来たのだろうという思いにとらわれました。

全ての知識の基礎には、人間が「生きる」ということがあります。そのことと学校での

「知育」が、余りにも切り離されている今、そのことを意識することが特に重要と思われます。どの教科でもやらなければならぬことです。やはり家庭科が、それを一番自然になえるのだと思います。

生きるということ、じっくり考える場をつくってほしい。その上に、色々の技術・知識が咲くように。



小川 真平

高校での家庭科男女必修化によって、家庭科の先生方は、新たな課題をになわれることになったのです。様々な問題はかかえながら、それなりに居心地のよかった各各の「巢穴」から外界にとび出して、新しい家庭科を共同して産み出してゆくという壮大な課題——個人にしろ集団にしろ、体制の変革に何らかの苦痛は伴わざるをえないでしょうが、教育にロマンをいだきにくいこの時代に、それは何とスリルと夢に満ちた冒険でしょう。その

ような魅力的な機会にめぐまれた方々の幸運を、私はうらやましく思っています。



粟飯原留里子

「どうせ私たちはパートのおばさんよ。自分の将来をこう決めつけて、問題行動をくり返す中学三年のF子。中学三年ともなると、ほとんどの男子生徒はおちついて、自分の進路に向けて前向きに動き出すのに。「まったく、女は扱いにくい」と、生徒指導の先生にもあいそをつかされている。彼女たちと話し合っていると、結局は、将来への明るい展望がもてないということにつきるようである。

こんな彼女たちに、女も一人の人間として尊重されて生きられる社会を志向させることこそ、これからの家庭科でなっていくことではないかと思う。女男共修がきまつたことで、女が男と同様の社会参加をしていくこと経済的に自立できるようになった女と、生活的に自立できるようになった男とで創り育てる家庭科教育を望みたいものです。

もちろん、あまりにもしつかり根づいてい性による役割分担の概念を変えていくことは、家庭科だけでなえることではありませ

ん。私たち教師全員が差別撤廃条約の精神を
確認しあいながら、これからの教育を考えて
いかなければと、少し見通しの明るくなった
家庭科教育への期待に胸ふくらませていると
ころです。

〈小学校の教師から〉

福田三津夫

不十分なながらも、高校での家庭科は男女共
修になるという。これを機に、小学校から高
校まで、必ず取り上げてもらいたい教材は、
「性別役割分業の歴史と将来」である。家庭
科教育全体のねらいが、性別役割分業を問う
ということから考えても当然のことである
う。また、楽しく、おもしろい授業を展開し
ていただきたい。「私の家庭科」といえるも
のを創ってほしい。家庭科を基点にして、学
校を風通しの良い所に！と願っています。



仁ノ平尚子

ファミコン一日六時間、ついに明るいとこ
ろで目をあけていられなくなったW君。小学
四年生。放課後の学習塾通い、急に遊べなく

なる四年生。キャバレー、ボイン、スケベ、
そんな言葉が飛びかいたす四年生。私も毎日
の生活の中、子供たちと考えていきたいいな。
将来彼らが習う家庭科、自分のくらし、命
友人のくらし、命を考えあう教科になってほ
しいな。

〈大学で研究と教育に携る中から〉

壽岳 章子

かつて、家庭的な世界は、役割分担で女
の追いこめられる場所であったため、私はプ
ルブルでした。しかし、現在私は、そういう
世界に進んでいてもよかったな、ときえ思っ
ています。

それほど、家庭科の教科内容は幅広く底深
くて、男であれ、女であれ、いかに生きるか
を考えるきわめて具体的な場であると、心か
ら信じております。

要するに人間の学問なのです。最もすばら
しい教科です。

家庭科の先生方に栄光あれ！



山住 正己

私は十数年前、文部省検定済の小学校家庭
科教科書を初めて読んだとき、このような教
科書によって授業が行われるのであれば、家
庭科は不必要であると考えました。

しかし、保育・家族の問題をふくめ、中学
校と高校の最終学年で、総合学習という方式
をとる男女共修としての家庭科は、必修にす
べきだと考えています。自主編成による前進
を期待しています。



木村 温美

家庭科を根本のところまで迫力のないもの
にする男女差別の教育制度の大枠がはずされ
た。やっと家庭科が、女子傾斜の特殊教科で
はなく、人間の基礎教養の地位を占めたので
ある。これは同時に、家庭科教師が、人間の
基礎教育の中身を創造し、自立する生活者育
成を行う責任を、制度の上からも直接背負っ
たことを意味する画期的なイベントである。
これからの本当のプロとしての実力が要請
されるし、創造力を発揮できる、やり甲斐の
ある時代となろう。否、どうしても、そうせ
ねばならない。

藤枝 恵子

一、家庭科で自分は何を学ばせ、何を育てようとするのかのフィロソフィーと自信をもつこと。学習指導要領もあるが、それを自分なりに、教育観の中に消化してほしい。

二、右の信念を、児童・生徒の実態をよく見すえ、教材や指導法を創意工夫して、興味ある家庭科学習であるように努力すること。そして、これは、家庭科の特質と独自性に立った実践であり、科学的な方法であつてほしい。

三、男女に学ばせるといっても、女教師に一体指導できるのか、といった批判がある。人間的に自覚し、困難なことは、同僚・父母・その他とも理解を求め、協力的体制をつくつて克服していただきたい。

四、新しい社会の動きや要請におくれないよう、常に勉強し、時代をリードしていただきたい。



広田 寿子

一人ひとりの家庭の構成員が、男も女も、老いも若きも、健康である限り、誰でも自身自身の生活を維持し、その上で家族や社会が協力しあわなければ、とても八十年の人生を

生きいきと生きぬくことのできない時代に、いままさに日本はさしかかりつつあります。「家庭科」は、そういう現代の人間が生きぬくための不可欠な条件を客観的に見すえ、未来を展望した上、広い視野にたつた生活自立の意義と方法をおしえ、つたえる重要な教科ではないでしょうか。

家庭科教員の創意にみちた努力の積みあげこそが、若ものを人間として育て、同時に自分自身も人間として育つエネルギーの源泉に必ずなるはずです。



朴木佳緒留

女子必修「家庭科」から、男女共学「家庭科」への変化は、「男女雇用機会均等法」などを成立させていった歴史の潮流のひとつといえます。

これらが「女子差別撤廃条約」の精神を真に生かすものとして育っていくかどうか。問題はこれから始まるといつてもよいと思えます。

私達は、あらゆる人々に開かれた権利としての「労働」と「生活」を教育の課題として受けとめねばなりません。

このように考えるとき、家庭科の内容づくりと教育課程論への検討が、なお重い課題として残されていることを自覚したいと考えています。



永島 利明

中学校の技術家庭科の共学が進むことについては評価できます。しかし、時間制限後、ゆとりをもつて教材を教えられないという声を聞きます。時間数を増やして両科を独立させるという案は、学校の週休二日制を実施するという観点からみれば、不可能なことです。

前述の時間減は必ずしもマイナスばかりではありません。それは家庭科の教師の授業時数が減つたという状況があるからです。一九七二年の調査と一九八五年の調査を比較しますと、家庭科で二〇時間以上の授業時数をもっている人は激減しています。その減つた分を、他教科や特別活動にまわさず、できる範囲で半数学級などを行い、授業を充実してほしいと思います。



長谷川公一

今度の高校家庭科の男女必修化という教育課程審議会の答申は、これまで共修のとりくみをすすめてこられた現場の先生方、「家庭科の男女共修をすすめる会」や本誌などの長年の努力が報われたものであり、日本の教育制度の改編の歴史のなかでも特筆すべきことだと思えます。しかし、それが公教育への国家統制が強まるなかで、道徳教育の強化と社会科の弱体化とともに答申された点、また文部省サイドでは、女子差別撤廃条約の批准の障害の克服という「外庄」主導でこの政策の変更が行われたと推定される点なども注意しなければなりません。今回の家庭科の男女必修化の答申を「歴史の流れ」や「時代の要請」として手放しで喜んでよいのでしょうか。教育課程の履修の形式だけ平等化し、教科の内容、教科書・学習指導要領等については「男女必修化による行きすぎ」がないように従来以上に文部省サイドが介入してこるとは十分に予想されます。

男女がともに学ぶ魅力ある家庭科をつくらうとする教師と「国家」とのつなひきは、むしろこれからが正念場です。履修の形式から教科の理念・内容へと争点は移動していきま

す。〈生活を大事にする思想〉や〈生活の主体としての力〉をいかに教科のなかに具体化し、生徒を育むことができるのか。それを押しつづぶそうとする国家の統制にいかにか抗していくのか。勝負はこれからです。



上柳富美子

「作物をつくりながら、それをどのように調理するかを知らないので教わりたい」。教育学部の調理実習を受講しに來た農学部男子学生のことばです。

「家庭科は面白い。大事な教科だ。教育実習の研究授業では家庭科をやらせてもらおう」。家庭科不要論となえていた教育学部の男子学生が、「家庭科を抹殺するためには敵を知らなければならぬ」と、家庭科研究に打ち込んだ結果、家庭科のとりことなって発言したことばです。

「家庭科は、本来の人間として当然身につけておく教養である」。四年前、家庭科の男女必修賛否についてのアンケート調査をした時、男子の高校生が答えたことばです。

これらのことばが、今私の中にキラキラ光っています。

七月二十七日、共修へ向かって、さあスタート！と大きく書かれた集会のタイトルを見つめ、遂にここまで来た、と、よるこびをかみしめながら、皆さまと共に、これからはがんばっていきたいと思っています。



宮崎 礼子

日々および世代の再生産機能を担う単位としての家庭におけるくらしが、より人間らしく生活できる基盤づくりをめざす家庭科が、男女生徒に「国民的基礎教養」の教科としての内実を浸透させるに当たって、いまこそ日本国憲法を確認するときです。

いま日本では、戦争のないことが平和なのだと思いがちですが、平和とは、たんに「戦争のないことだ」ではすまされません。

憲法前文にうたいあげられている平和の生存権は、戦争放棄、軍備を否認したうえで（九条）、国民の人権保障体系として生命の保全と幸福追求の権利（十三条）、さらには、すべての国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利（二十五条）をも包み込んだ、総合的平和を旨とするものです。

健康で文化的な最低限度の生活の内実を備

えたくらしが実現されるべく、家庭科の意義を共に耕してまいりましょう。

浪本 勝年

家庭生活・家族道徳における男女平等・民俗文化は、社会一般のそれと異なり、人間にとって最も根本的な意識革命・生活革命を要求されるがゆえに、きわめて困難なことを、戦後日本の歴史は教えています。

したがって、戦後の教育改革のなかで、社会科とともに、とりわけ重要なのが家庭科であった、といえるのだと思います。

高校でも家庭科を男女必修とする今回の教育課程審議会の改定方向は、男子に「生活一般」(四単位)のうち二単位を「体育」などで代替できるとする措置など、依然として不徹底な点もありますが、一歩前進といえます。

教科書検定問題と同様、日本国政府は、国民の声には耳を傾けず、「外庄」(女子差別撤廃条約)には弱いようですが、「高校の男女共学」をすすめることをも視野に入れながら、豊富な教育実践を背景にして、家庭科の真の男女共修をいっそう力強く推進する運動をもりあげていってください。なお、今後、男子

も家庭科教師への道をよるこんで歩むようにならなければなりませんね。

中島 邦

家庭科の男女共修が一歩前進したことは確かですが、むしろ今後、どのような家庭科教育を展開するかが大きな課題でありましょう。

近代日本の歩みは、生活への軽視に尽きます。生活があつてこそその人であるにも拘らず、生活を直視することなく、生活の外に価値をおいてきたといえましょう。それは生活を支えた女性への蔑視につながるものです。男女を問わず、一人一人が生活主体者として歴史も現実も見すえられる者の育成を期待します。

鈴木 敏子

第二次世界大戦直後、高度経済成長期、そして現在。戦後の四〇年間においても、政治・経済のあり方が大きく変動する時に、家庭科のあり方が問われてきました。家庭のありようが、いかに政治・経済と関わっている

かということの証です。

今、体制側においても、女子のみ必修の「家庭科」に矛盾が生じてきました。ざりとて、「日本型福祉社会」の基盤―基礎単位として「家庭」を位置づけ、重視するためには「家庭科」を潰すわけにはいきません。むしろ男子にも「家庭」の重要さを認識してもらいたいところです。

この時こそ、私たちは、新しい男女Ⅱ両性関係を、新しい生活様式の観点にたった「家庭建設」の能力を、男女ともに培うような家庭科を、名実ともうちたてていきたいものです。

牧野カツコ

高校の男女必修、中学校での共修領域の拡大など、新しい流れに向かって、確実に動きだしたことが、まずはうれしい。ここ数年、男女共修の家庭科に対する一般の人たちの期待が急速に高まってきている感じがある。問題はこれから。

中学生、高校生、男女が共に学んで、「本当に良かった」といってくれるような内容と授業を実現すること。家庭科教師の意欲的な

研究と実践が大いに必要となってきます。
がんばりましょう！



桑畑美沙子

昨日、地方紙の記者から熊本での技術・家庭科の共学について問合せの電話がありました。

「一年から三年まで三年間を通じて完全に男女一緒に家庭科を授業しているところは、'81年度で一校、'82年度で三校、'85年度で八校でした。さらに、今年は三校増えたと聞いています」

「二〇五校もある中でそんなものですか。少ないんですね」

「少ないといえば少ないですが……しかし、制度的に男子に家庭科を授業できるようにしたのは今の指導要領からということを考えるところでしょうか……0から出発したんですから……」

今、まさに、家庭科は男女共学の竜巻が起きようとしているんじゃないでしょうか。その竜巻が大きくなって日本史を襲うかどうかは、やはり家庭科の先生方の肩にかかっていると思いますか……」

小学二年の我が子が中学生・高校生になったとき、家庭科も女の子と一緒に、同じように学べるようになってほしい。そして、男も女も共に生活を愛しみ創造しながら生きていける力を培ってほしい。これは、親として、先に生きる一人の女としての切実なる願いです。と、同時に、私自身もそれが実現する方向で日々暮らさなくては……と痛感している昨今です。



安孫子 麟

本来、家庭科が男女共修でなければならなかった根拠は、それが単に女子差別教育であるからということだけではないと考えています。差別教育であるというのは、いわば形態上の問題であり（しかしその形態が内容までゆがめられがちであったのですが）、共修の真の必然性は、家庭科の内容が人間誰にでも必要であるからであり、当然男子もまた考えなければならぬ問題であるからです。

とするとこれからの問題は、現実の家庭科の授業が、真に男女共修にふさわしい内実をもてるかどうかに関わります。それも、表面的な生活技能に偏するのでなく、現代社会に

おける家庭の真の役割やあり方をとらえ切れる授業でなければ、共修運動の努力も画餅に帰すでしょう。

予想される教科内容への提言もさることながら、真の困難は、家庭科を担当する教師の力量が充分なものになっていくかどうかだと考えます。他教科の教師をまきこんだ学習・研究が望まれます。



浜田 滋子

高校家庭科の男女共修という、あたり前のことが認められるまで、長い道程でした。ねばり強く訴えつづけ、貴重な実績を積み重ねて来られた方々に、心から敬意を表したいと思います。教員養成大学で三十五年間、男子学生に家庭科を教えつづけて来た私も、家庭科の底辺を広めるという点では、いささかお役に立てたのでしょうか。

人間の生活に視点を据え、みんなで力を合わせて、それをよりよくしていこうとする家庭科が、今ほど重要な役割を果たす時代はないと思います。男子に家庭科を教えることを恐れる必要はありません。教師の熱意と努力さえあれば、家庭科はフレッシュな教科とし

て、彼らをぐいぐいと惹きつけるでしょう。

総合的なものを考えるという、家庭科で培われた力が、学部長職としての私を支えていくてくれることを御報告して、ほんとうの家庭科の発表を、お祝い申し上げます。

◇ ◇

小沢 有作

時間講師で行っている東大の私のゼミには法学部と教育学部の学生が半々の割合で出席していますが、この六月、そこで考えこむできごとに出会いました。

男子学生十数名、いずれも中・高校生時代に家庭科を学んだことなく、家事は女の仕事という性別適性論を守っているのです。この意識は、ラサール・灘・開成とかの男子進学校の出身者により強固です。これらの学校には、そもそも家庭科は設けられていません。東大にもありません。男子エリート(?)にあって、家庭科は学ぶ対象として認知されていないのです。ただ、自炊している学生は、小学生の時に習ったボタンつけとかが役立ったと言って家庭科をふり返ります。が、これは実用教科としての家庭科のイメージにほかなりません。ボタンつけやるより算数したほ

うがいいという考えが、裏側にはりついている。たとえば、ラサール↓東大法学部を通じてこのように貧しくゆがんだ家庭科のイメージを内包したままの若者が、文部省のお役人になったら、どういう家庭科論が(建前でなく本音の所では)打ちだされるのでしょうか。寒さむしくなります。こういうふうに思うと

高校家庭科男子必修は、私立男子進学校(高)にこそ、真先に適用されなければいけません。でも、共修の実行にかんして言えば、これが保守反動の牙城になるにちがいありません。冒頭のように書き出したら、右のようなスジ、結末になってしまいました。このようにいわゆる知識教科だけを詰めこんで(頭で歩く人間)になってしまいう教育を止めて、食べる、着る、住む、子を産み育てる、ものを作るという民衆の生活文化を豊かに身につけて(足で歩く人間)にする教育に向きを変え、そのターニングポイントとして、家庭科が位置づいています。学校文化再編成の基点としてあります。

私は家庭科の先生に、新しい教育と人間の未来をかけている者です(Weの84年増刊号の

私の小論を参照してください)。中・高における共修を、その節目に仕上げてほしいと願っています。

〈ジャーナリスト・作家・評論家から〉

東浦 ぬい

男の子も女の子も家庭科を共に学ぶようになれば、たちどころに教師の力量が問われるようになります。

若い人たを魅きつけるチャージングな教科にするために、一層の御努力を先生方に期待したいと思います。

◇ ◇

青木 悦

七月六日、同日選の結果を見ても、日本を守る国民会議が作った皇国・日本史の教科書を見ても、私たちは、生命とくらしを「守る」視点から、「創る」方向に歩み出さねばと痛感します。家庭科は、目に見えるところから、大きな社会をつかんでいくための基本。確かな目を持つ努力を、まわりの人とつながらる中で続けたいと思っています。

先生、ガンバレ!

▼「家庭科」という名称にこだわります。「人間関係」「社会と家族」「国家と大衆」「男と女」「子どもへの権力支配」「流通の仕組み」などを内容とするのにふさわしい名称を。

▼家庭科がようやく男女共修になった経過を、最初の教材としてほしいのです。近世・近代・現代の性差別の歴史、世界のなかの日本の状況を、子どもたち自身が討論のなかでたしかめ、理解するために。

▼このあと、社会科は狙い撃ちの状態に陥るでしょう。何も語れない社会科になっていく心配があります。

▼「家庭科」は、ようやく獲得した「人間の平等」をふかく認識するための学科として期待したいのです。

▼単なる実技に流れぬよう。女たちの歴史の上で、戦争準備の教育政策として女子を實用の学問に追いつむ方針がつねにとられしてきたことを、警戒したいとおもいます。

▼先生たち、親（ことに父親）たちに、これからの「家庭科」とは何か、を、つよくアピールすること。それもなるべく早く、いまの時期に。——子どもだけ共修にしても、それを崩す土壌が足もとに拡がって

るのですから。PTA、社会教育、市民運動の学習会とおして、地道に、共修の意味を語り、ひろげていくこと。とにかく建て前は確立したのです。



佐藤 洋子

小学校五年になった息子が、日曜日に野菜サラダを作った。家庭科で習って来たことのおぼおさらいだった。レモンのスライスの一番形の悪い所を自分の皿に入れていた。家でも手伝いはさせて来たが、学校で習うことの楽しみは、家族にも乗り移るようだった。

共修へやっこぎつけたが、現場での授業が実現する前に、息子は高校を終えてしまっそうだ。私立校、男女別学校への進学が、小生学生を持つ親の話題だ。男と女を、教室でも授業内容でも、共に育てたい。教師と共に、親も、新しい男女の在り方の時代を、待ち懂られている。



金子さとみ

「高校の家庭科、男女必修に」の新聞報道をみて「やった！」と本当にうれしくなりまし

た。

家庭科の先生に期待したいことは二つあります。一つは性教育。もう一つは食教育です。

「避妊してって言ったけど、そんなもんエエ（いらぬ）」と言われて……と、妊娠、中絶に追いこまれていく女子高生。性教育、とりわけ避妊教育は、男の子にこそ、しっかり行って欲しい。

食べ物もそうです。魚も、干物も焼いたことがないと言う青年。どうして、これで女たちが自由に、豊かになれるでしょうか。

共修の家庭科に、新しい「生活文化」の創造を期待します。



関 千枝子

とうとう（やっこ）というべきでしょうか。ここまで来ました。

そして、これからが正念場です。人間の心を動かす生活の教育が出来たら、現在の教育の現況という巨大な冷たい山も、ゆり動く日が来るのではないかと、私は思っております。

谷合 規子

元公立中学校の教師の私が、婦人民主新聞の記者として「家庭科の男女共修をすすめる会」に初めて参加したのは、ちょうど十年前。「目からウロコが落ちる」というのは、この時のためにあつた言葉でした。

家庭科の教師を含め、幅広い職業の女たちが、家庭科を模索する様子は、生きること・学ぶことを根源から問い直す作業のようでした。こんなに真剣に、こんなに熱心に、濃い内容を語り合う民間の教育の研修会が、この世にあることを知り、心底驚きました。

家庭科の共修を推進してきた女性たちのエネルギーは、家庭科ばかりでなく、混乱する教育界全体の質をも高めてきたし、これからもリードしていくと思います。実践者としてまかされている家庭科の先生方だけで孤立することなく、今後も共に幅広い人々と家庭科を語り合えたらと思います。幸い、Weのような格好なジャーナルもあるのですから。

樋口 恵子

高齢者の介護をめぐる事件を調べると、老夫婦で妻が倒れ、夫が介護しているときの無

理心中や殺人が一方的に多いのです。妻が介

護している場合のほうが圧倒的に多いはずなのに。男性が家事や人の世話に関して自立できていないことが原因ですが、同時に社会的な制度や資源についての情報を知らず、まっとうなSOSの出し方を知らないのも一因です。わが愛する男たちの晩節を汚させないためにも、社会と家庭をつなぐ家庭科の発展を心から願っています。

〈各界の女性から〉

中谷 君恵

。「新しい地平に立つ」までの長い苦難の歴史をふまえ、基本的な考え方をもち、かつそれを伝えられる家庭科教師であるように。そうすれば「赤ちゃんにはもっぱら紙おむつで、ゴミは無差別に出し放し、ひる日中もデンキをつけ放し、ほうれんそうの名も知らず、おからを作ったこともなく、ココアコーラを平気でのむ」という人たちは、少し減ると思います。

「やるっきゃない！」ですね。

中山 千夏

何事もそうなのかもしれません、ことに教育の問題と「男女同権」問題は、地味で粘り強い活動の積み重ねの上に、少しずつ少しずつ灯が益すように思います。

皆様のこれまでの御仕事に敬意を表すと共に、これからも、どうぞよろしく。そして、この成果を一瞬にして打ちくだくような「時代」が決して到来しませんように……と祈らずにはいられません。

岩崎 多鶴

昭和十八年、私の長女は女高師の家事科に入りました。理科志望でしたが、私の考えに同調しての変更でした。「人間に第一に必要なのは食、次に衣・住。理科はそのためにも必要なもの」と私は考えていました。

ところが入ってみたら「頭のいい人が理科、文才のある人が文科」とりえのない人が家事科」という空気がど申しました。私も友人に「あなたでも娘は家事科に入れるのね」といわれました。「家事は召使いや嫁にさせるのが本態ではない。自分のことは自分でするのがほんとうだ」と返事したことがありました。

戦後、学制が変わって大学に家政科がおかれました。やっと一人前ということですが、やっぱり女だけの場でした。そして誰もそれを愛だと思いませんでした。世の中全体が、男性主体であって、それに従い奉仕する課目みたいでもありません。

それから三十余年、ついに来ようとしています。男性も自分のことは自分でするのがほんとうだという考えの時が。ここまでの長い年月、ご苦労下さった先生方にありがたく御礼申し上げます。長生きしてよかったですしながら、ようやく顔を見せてくれた太陽に向かって、進まれる先生方に、よろしくとお願ひ申しております。



石川 由紀

今、私は、とにかくうれしい。家庭・仕事・勉学で寸暇の惜しい日々の時間をやりくりして共修運動にかかわって七年、その中で出逢った方々から受けたものと共に、この報は胸にこみ上げてくるものがある。

今後の問題は確かに山積している。完全実施まで七、八年も先というのに、なぜ移行措置が必要か(なしくずしにするつもりなのか)。

「技術」と「家庭」がなぜ同一の教科の中にあるのか(高校で産業教育を展開するための布石なのか)。家庭科教育が、生活の場に根を張った「生き抜くため」の教育ととらえられているならば、自ずと整理されていくことも多いであろう昨今の論議を憂慮している。

家庭科が真に家庭科であるためには、今のままではなく、新しい家庭科の構築が必要である。そのためにはまず、家庭科教師の出身学科の枠にとどまらない研修態勢と、新しい家庭科に対応しうる教師の養成を、早急の課題としてほしい。特に教員養成の男女比が同じになるように望んでいる。



飯田しづえ

親の立場から家庭科共修の運動にかかわってきて、家庭科の先生達とも親しくなり、色々学びました。

この頃やっと、男の自立の大切さが言われ、そのために家庭科が大事ということになってきました。しかし、一つの学校の中で家庭科の先生はたった一人か二人。それでなかなか運動が高まらなかったのです。今回の男女共修の実現が、女子差別撤廃条約のからみで

出てきたことを考えると、他教科の先生達(男性も含めて)が、生活とは何か、男女差別とは何か、役割分担意識とは何かを、家庭科の先生とともに考え、今後の運動をすすめてほしいと思います。今までむづかしい中で共修をしてきた学校は、他教科の先生の協力が大きかったのです。

すりかえるのが上手な文部省官僚のことを思うと、よっぽど私達がしっかりしていないと、とんでもないことを男女共修させられる心配があります。



井田 恵子

家庭科がようやく男女共学必修に踏みだすことになり、うれしいですね。今の世の中、管理と非人間化が進むばかりです。家庭は、人間らしい営みの温床。旧来の性別役割分業を打ち破って、平等で新しい男女と親子の関係づくりをすすめる教育をお願いします。

これからますます大変ですが、ネットワークをつくってがんばりましょう。



若竹キミイ

「当分の間、体育で代替も可」の名移行措置には、大笑いしてしまいました。寝技の国ニツポンの男は、教課審に生きていたのです。わたしたちの側の「当分」は、時代の動きに目をすえる焦点が、もうひとつで来たというものです。

ところで、私のまちの中学の現状、五校のうち二校が、中一の前後期を分け、食物と木工の相互のり入れで、共修実施四年目、あと二校が同じボタンで今年度から。残る一校は未定の由です。

当分は、市の婦人行動計画等の推進状況に注意を払い、わがまちの中学校での共修充実の応援をし、「わたしのまちで十五歳までを育てた子」をひきあげる高校教育行政に向けてしっかりと声をとどけられるよう、考えてゆくことになりそうです。

コトは、立派な立場のある方々を相手の寝技破りなのですが、立場のない「皆さん中の皆さん」というひとりであるわたしには、多分、疲れるやり方しかないでしょうね。

共修家庭科の問題は、親ならびの市民感覚としても「男の子の家庭科!」「レベル的印象が一般ですが、子育てをしだめ、家庭や地域

の課題にかかわる社会教育の各所で吐露される悩みによくよく心を傾けると、その解決に向けてねがわれている核心部分は、「新しい家庭科の目ざすもの」と深いところであつてながつています。すでに共有されていながら、潜在のままである「自立した男と女を、人間らしい生活を、差別のない社会を育み、創り出す」生き方に向かう意味を、顕在化させていく行動……というところですが、実は簡単。

先生とか会社員とか、わるいけど実はちょっととした立場のお互い、自分の領域だけがんばることにひと息入れて、ヒラの人間の時をつくってみませんか。ヒラ同士、新しい接点のとり方を見つめるだけで、あとはしっかりと手を携えようでも、改めてバラバラでも、またシコシコと、ささやかな立場を生きる延長線上に、時代を変える共同作業の実を持てるはずじゃないんでしょうか。

山口みつ子

一昔前の家庭科を学んだ人の胸中には、あれなら「選択の方がよい」という本音がひそんでいきます。それにもかかわらず、男女の役

割分担が、家庭科に明確にあることを知って共修を支持してきました。ことに家庭科の男女共修をすすめる会の発足から今日の方向が確定するまでの運動は確実な発展があり、目をみはるものがあります。家庭科の思想を構築したといつてよいでしょう。共修の実践校の例も感動的です。

これからは、文部省の実施に先だって、創造的な家庭科づくりをして下さい。それには先生方も一応は家庭科から出て、広く社会問題、婦人問題全般に理解と知識が必要です。このことが、昔の家庭科にこだわりを持つ人々の考えを改めさせるでしょうし、家庭科が教科として欠かせない「市民権」を確立することになりましょう。

針生 夏木

今回の家庭科男女共修の決定、何はともあれ、Weをはじめ、多くの前駆的な運動の実りの一つとしてよろこぶべきかと思えます。親の立場から、日頃感じていることを。

一、好奇心旺盛な家庭科へ——科学的な生活合理化と「おぼあちゃんのおちえ」は、日常の中ではじっくり調和します。なぜなら、

長くうけつがれてきた生活のちえには、必ず科学性があるから。

本来、基本的な生活技術は、男女を問わず、人間としての必要条件。いじいじと、ではなく、胸をはって教えてほしい。まして個々の家庭には欠けがちな広い視野で、社会と自分の生活とのかわりを考えようとするなら、試行錯誤をおそれず、社会科学とも連携し、もっとダイナミックな家庭科にしたいもの。それでこそ、子どもたちも魅きつけられるのでは……。

一、親たちとの話し合いを大切に——せっかくの先生方の問題意識も、クラスの親たちを忘れては、浸透していきません。生活者としての悩みやちえは、誰にでもありません。思いきってぶつかるところから、また新しい可能性も開けるのではないでしょう。私の子育て中、家庭科の先生と話し合う機会はないなく、もうやりなおしはききません、子ども、教師、親、三者が現状の家庭のあり方を論じたり、必要に応じて学び合う図って、ちよっと楽しいと思いませんか？

富岡恵美子

いま、家庭科は、女を家庭にとじこめるのではなく、男女で家庭を担うものに変わろうとしている。男女とも生活者として自立する力をつけることこそ、男女が平等に働き続けることになろう。

教師は、自らの家庭や職場を見直し、生徒に性別役割分担の変更を問いかけて欲しい。自らの実践や苦勞をさらけ出して欲しい。家庭科教師のかかえている問題を通して、生徒は家庭をいとおしみ、家庭と仕事のあり方を考えてゆくだろうから。

安桑 いく

私たちのかながわ女性会議・教育部会では、昨年、家庭科男女共学推進のためのリーフレットをつくりました。その中に私たちが望む「新しい家庭科」を提唱しましたが、その内容は次のようなものです。この考えは、今も変わっておりません。

家庭科は、衣食住はもとより、社会と家庭の関係、家庭と個人のかかわりなどの人間関係を含めて、人が生きていくための基本的考えや知識・技術が学べる教科であってほし

い。そのためには、教科内容を広げ、改め、他の社会、理科、保健などで得られる科学的知識を基礎に、次のような能力が得られる内容であってほしい。

・自分の生活は自分の手でとのえられる能力を

・自分の健康や安全を守れる力を

・男も女も社会人として、家庭人として、ともに責任をもてる力を

・性・結婚・子育てなどへの正しい理解

・性による役割分業にとらわれない、民主的

家庭を創る能力を

右のような家庭科の男女共学が一日も早く実現することを望みます。そして、家庭科の

先生には、他の教科にもまして、人間性ゆたかな、性別役割分業観のない方であってほしいと思います。



奥山えみ子

戦後の民主教育推進の中で、家庭科は心ならずも、性別役割分業を継続・再生産する役割を果たしてしまいました。私は、常日頃家庭科こそ、人間の生き方にかかわる最も重要な基本教科であり、その意味で「生活科」と呼ぶにふさわしい教科とすべきだと考えています。

教課審が、女子のみ家庭科に終止符をうち曲がりなりにも男女共学の方向にうち出したいま、まずすべての家庭科教師の方々に、自信をもってその第一歩をふみ出してほしいと願っています。それには、改めて「家庭科とはどんな教科なのか」という教科理論を明確化し、それにもとづく教育内容の見直しや、整理を急ぐことが求められます。

自立と連帯を基礎とした生活主体者としての力量を、両性に得させるための教科となるよう、出来るだけ他教科教師を含む、多くの場で討論を重ねながら、小・中・高一貫した教育内容の構築をすすめていただきたいと思えます。

金森トシエ

いま評判の「痴呆性老人の世界」(山波映画・羽田澄子監督)を観た。とりわけ強く印象に残ったのは、老女たちの手の動きであった。男性老人はぼつんぼつんと離れて孤独に見える。しかし老女たちは二人むきあい、数人寄りそって、その手はたえずふれあい、なので、さすり、つなぎあうのである。

女は赤ん坊に乳をふくませることに始まって、何百回わが子の身をなでさすり、何千回米をとぎ、野菜をきざみ、針を持ち、してきたことだろうか。

手わざ手仕事に心をこめ頭をつかって、女たちは家ごとに生活文化を育て伝えてきた。痴呆症の老女たちの無限のやさしさをこめた手の動きには、暮らしの歴史が滲んでいた。

昨今のサービス経済の進展は、家庭機能をつぎつぎに商品化している。生活文化の伝承は断たれようとし、同時に手と心と頭―生活技術と愛情と科学性をむすぶ新しい生活文化と、ひいては新しい家族や地域の人びとの関係を、男女で創り育てる困難は増すばかりである。

その道を拓くために、家庭とあわせて学校の、そして家庭科教師の役割がいまほど重

く、かつ期待されるときはない。教師としての力量、自立した生活者としての教師一人一人の意識、そして社会観……教科内容や教員養成などの問題も山積している。

しかし、心ある教師と「We」をはじめとする関係者のたゆまぬひたむきな努力と連帯は、新しい地平を拓いたのである。その地平は二一世紀の、平和な、男女共同社会に続くものであることを思い、さらなる前進を心から期待し、心からの声援をおくらせていただきたいと思う。

〈各界の男性から〉

江田 五月

「良妻賢母」から「生活者」へ大変身の新生「家庭科」さん、おめでとー!

親や教師も「何が大切なのか」を考え直さなければならぬ時です。「家庭科」が、全ての教科の中で大きな顔ができるようになって初めて、わが国の教育が改革されたことになるのです。

責任重大。頑張りましょう。

毛利 子来

なるべく医者にかからないで、自分で、また家族や友人とで、からだのことが判断でき、病氣も治したり、耐えたりできる、そうした知恵をつけて、学校を出てきてほしいと思います。

荒木 敦

他教科で、たとえば男女がせり合う様相を示しても、家庭科では男女が、理解と協力と信頼を深める学習でありますように。
家庭科教師は、授業の他に、職場生活で新しい人間像(教師像)を示してほしい!

田中 正彦

公教育が始まって以来、單元ごとに分断され、教えられることになった人間の知恵を、もう一度まとめ直し、それが生まれ来た場所へ、より豊かな姿で帰してあげること。「家庭科」は、そんな顔も持っている。

いわば、「学校」と、子供達が今暮らしている。そして彼らがこれから築く「社会・家庭」を緩やかにつなぐ場。だからそれはとて

もシンドイ場やけど、シンドイからこそ、肩に力を入れんと、気楽な心持ちでやって欲しいな。

綿谷 和弘

「家庭科」が「男女共修」になるというのを聞いて、素晴らしいことだと思いました。この社会において、例えば私のような障害者の多くが、結婚の対象として排除されているのは、「男は仕事」といった性差別も大きく関わっています。「共修」が、そういった意識を変え、結婚や性からの障害者の排除をなくし、抑圧の解放に一步でも近付けることが出来ればと期待しています。

丹原 恒則

誰しも、思春期を経て、具体的な自分自身の生き方、実生活をどのように営んでいくのか悩み考え、実践していくことになると思います。

私の場合、子どものいる共働きの暮らしを送りながら、「男も育児時間を♡」と実力行使すること三年八ヶ月、職場慣行として生活

を、男女共に半々で担う人創りがされてきていないことを痛感してきました。

中学・高校の真剣に自分の人生をどう生きていこうかと懊悩、懷疑し焦燥にかられる時、例えば「性」「労働」「衣食住」「育児」といった実生活を素材費、男女大人もまじえて直視し考え調べ学びつくり出し実践していく、そのような「新しい家庭科」が内職の時間であるはずがなく、五教科以上に重要で汲めども尽きぬ興味や関心が湧くことうけあいです。

Weが望んでいる時代を確実に到来させるため、不安や戸惑いがつきまとい、ともすれば力みがかもかもしれませんが、できるだけ自然体で愉快におもしろく関係者がやっていくべきです。



学習の主人公たち

家庭科について



〈横浜市立上郷中学一年生〉

次のことを書いてもらいました。
一、小学校の家庭科は男女共学だった
が、その時の感想

二、中学は別学だが、どう思うか

三、高校の女子のみ必修をどう思うか
四、ほんとうの家庭科とは、どんなこ
とを勉強するのか

家庭科を男女一緒に学習することを
どう思うか
(青山禎子)

林 妙子

一。私は、家庭科が大好きです。だから授業
はまじめに受けました。調理実習、裁ほうの
時も私は得意だったので、男子などにたよら
れて教えてあげたりして、楽しく学習できま
した。今までは班などで男女に分かれてしま
い、ケンカなどをしていましたけど、その時
は、みんなで、仲間割れなどをせずにとても

楽しかったです。

家庭科の時は男女共に楽しくしゃべり合っ
たり教え合ったりしていたので、先生もすご
くうれしかったのでしよう。いつもニコニコ
していました。男の先生だったので、家庭
科は全々、できなかったので私達女子が教え
て、それを男子につたえる。なんて感じにな
りました。家で一生けん命練習してきたらし
く、きゅうりなどの切り方などをみんなの前
で見せて、いばつたりしてすごく楽しかつ
た。先生をみんなでからかったりして、それ
を、全部の班の前でやらせました。あまり上
手ではないけど、男子に一生けん命教えたの
で、男子は、味見とさら洗い、女子に全部ぬわ
せるなんてことは、全々ありませんでした。
男女でやったのでとても楽しかったです。
二。私はこのことは、少しおかしいと思いま
した。昔の考え方は(男そんな女ひなど)元々

男が考えたと思う。女ばかり家の仕事をやら
せて、男は外で働く、それで、「オレのおか
げで食べていってるんだゾ」こんな感じのこ
とを言って男子中心の世界を作っている。男
子と女子は、体の作りがちがうだけ、それな
のに男子ばかり、イパツター。男子より、女
子の方が力を持っていることもある。たとえ
ばサッチャー首しようなんか、イギリスのど
んな人よりも、しっかりしているから、あんな
ふうになれたんだと思う。そうゆう考え
は、日本よりも、ずっとすずんでいると思
う。先生の話を書いていると日本は、まるで
男子のつごうの良い様にできている。なんか
すごくおかしい。この考え方は、多分、男子
が広めたんだ。でも、それはさい近だと思
う。日本も昔は、ひみこなど、けん力を持つ
た女の人もいたのです。この考え方はどうに
かしてなおらないのでしょうか？

三。私は、高校では、女子しか家庭科をしな
くて、その分男子もちがうものをやるのでは
なく、保体をやる。ときいた時は、びっくり
した。せつたいにおかしい。日本は、文化が
すすんでいる。それなのにまだ、変な考えが
のこっている。なぜだろう。まずこれから考
えたい。私には分からない。でもこうじやな

いかな? と思う。今までの女子は、少し弱すぎた。中には、強い力を持った人もいたと思う。その人は、がんばりぬいて、ここまできたので、どうしても、男子の様に、重要な立場に立ちたいと思う。もしなれたら、その人の生きがいの様に、一生けん命にやっただと思う。だけどそれをまわりの人が、みとめてくれなかったのだらう。きつとそうだと思う。多分だけど、こうゆうことが、実さいにあつたんだと思う。だから、みんなは、まわりの目がこわくて、そうゆうふうに、しなかつたんだと思う。弱い人たちは、強い人を、

でしゃばりだとか言つてバカにするんだ。私は、自分の頭に思いついたことを、そつちよくに書いています。

四。私達は、気軽に、家庭科、家庭科つて言つてその意味は、料理や、裁ほうをする教科だと思つている。でもそれだけではない。名前がそのまま、ほん当の家庭科の意味を語つていふと思う。家庭科―家庭生活で、必要なことを学ぶ教科、だと思ふ。よく考えると、家庭生活は、料理や裁ほう(食べる、着る)だけじゃ生きていけない、常識や教養など、考えの固まる前に、しっかり身につけておかないと、そうゆうことを、まとめて、ほん当

の家庭科だと、思います。これからのしょう来、みんなから、いい人だなんて言われるようになるためのことをかんせつ的に、気付かない様に自然に身に付つようにして教えてほしい。

私は、男女共学の方がいいと思う。なんか、同じ人間なのに差別しているようであまりいい感じがしない。同じ教室で、同じ勉強をした方が、お互いに、分かり合えると思う。特に、他の勉強はダメでも、家庭科は特いだ、というような人は、男女両方の前で、それを見せつけて、両方から見なおさせたいと思つている。そんでクヤシイ思いをしている人も中にはいると思う。この学校も男女共学になってほしい。その方が、それぞれの人の子せいが出せると思う。そうすると授業も楽しくなつて、みんな一生けん命やると思う。それが不とくいな人も、とくいな人を見なおして、一人一人が、クラス全員のいい所を見つけて、それをほめ合つたり、教え合つたりして、みんなが分かり合い尊敬し合うんじゃないかと思う。全部の教科が、男女共学だつたら、その分そのクラスの人の一人一人がみんなの、良い所、悪い所、などが、分かり合つていて、楽しく生活ができると思う。

間山潤一郎

一。小学校の時は、男女同じで家庭科をしてきた。調理実習の時は、ケンカばかりして先生におこられていた。ぼくは、あまり家庭は、苦手なのでいつも失敗ばかりしてました。先生は、とてもおこりつぽくいつもどこかの班がおこられていた。

二。ぼくは、小学校のころとちがつてよかつたと思います。班の中でも男同士なのでケンカもないのでぼくは、中学校のほうがいいと思います。それに女は、男のけっ点を見つけてすぐないしよ話をするのでとてもいやです。だから別学のほうがいいです。

三。べつに高校だから女子だけでもいいと思います。女子は、これから家庭科のすべてのことが、必要だけど男子は、働きに行つたりするので、べつに家庭科のことは、あまり関係ないからぼくはそれでもいいと思います。四。家庭科は、自分が一人になつても料理などを作つてくらせるための一つなので家庭科は、一人一人が少しでもおぼえていたほうが良いと思う。

男女一緒に学ぶことはいいが少しでも仲良くやつたほうがよいと思う。

学習の主人公たち

男女で家庭科を学んだって



〈東京都立松が谷高校一年生〉

「高校家庭科 男女必修に」の見出しを掲げた毎日新聞（7・10付）をコピーし、なぜ家庭科が男女必修になるのかを説明した上で、「皆には間に合わないのですが、将来後輩達が男女とも家庭科を必修として学ぶことについて書いて下さい」と頼みました。三年の男、女にも尋ねましたが、紙幅の関係で、一年生の声をここに――（芦谷 薫）

永井 浩

家庭科というものが、何を育てるのか、今の高校生活の中で一番必要なことなのか。将来的に見て、家庭科は必要だと思う。しかし少しぐらいいちしきがあったとしても、それがただのちしきにすぎなければ意味がないと思う。

オレは、やっぱり今の時代、リンゴの皮も

むけない子供達がいる、ということとは、社会的な、深いそして最もじゅうような問題の一つではないかと思えます。家庭科の授業だって、必ずふざけたり、授業をほうきしたりする人は、大半がそうだと思う。

一番最初にもいったように「何のための家庭科」かということを取り入れる、学校ごと、しんげんに考え、最も「生徒にとつてよい」「生徒のためになる」ような答えを出し合ってもらいたい。

佐藤 愛

私は男性も家庭科をやった方がいい。男性の大半は、成人になれば結婚することでしょう。そうすると女性（奥さん）がすべての家事をやります。ということは、男性はつまり家事は女性まかせになる。でも、その女性が一生男性についていてくれるとは、絶対限ら

ないのです。将来、何がおこるのかわからない。離婚もするでしょうし、もしかすれば、その女性が死んでしまうかもしれません。また再婚したって、以前と同じことをくり返すかもしれない。

とにかく、男性は「女がいるから家事はどうでもいい」なんて言っている場合じゃありません。学校の方でしっかり、男女同じように、家庭科をやるべきだと思う。

加藤 茂

もし今、「来年から男子も家庭科を必修として学びます」と言われたら、はっきり言ってやだ！

家庭科をたいせつだとは思いますが、家庭科をやるとなると、やっぱり体育の時間がへるから。体育と家庭科をくらべたら、やっぱり体育のほうがいい。

杉浦 直子

家庭科を男女必修にするのは賛成です。家庭にいるのは女性ばかりではないし、女性も働きにでる時代なのです！

もう今は少ないようですが「校内暴力」や「家庭内暴力」なんてのも、どうしても母

親にふりかかってしまっていたと思います。
(よくわかんないけど)

「いじめ」っていうのだった、男の人が知っておく必要があると思います。女性だけが親ってわけじゃないんだから。

それに最近、男の人の方がお料理がうまいっていうぐらいですから。

家庭科の男女必修はいいと思います。(でも私は技術科をやってみたかった)

粟原 良

いまさら、男子にも家庭科をやれといわれなくても。男女差別からというのなら、女子にも男子と同じ数の体育の授業をやらせろということになる。

いくら平等にしたとしても、結局男子と女子とは、ちがうところがあるので、いまさら男子にも家庭科をやらせるというより、いままでどおり、男子と女子のそれぞれがった機能をのぼした方がいいと思う。

白川久美子

これは、学校教育にとって、輝かしい一歩であると思う。やっぱり女子が家庭科をやっているとき、男子が体育をやっているという

のは、へんだと思うから、必修になったのは良いことであると思う。

根岸(男子)

家庭科を男女共に学ぶことについては、別にかまわないと思いますが、いきなり男子に四単位の必修はどうかと思います。男子にとってみれば、今まで「技術・家庭」と、7:3ぐらいでしかやらなかったものを、国語や理科などと同じあつかいになるのは、やはり最初のうちはかなり抵抗があると思います。

関谷 幸子

人間が自立して、一人で生活していくのに男・女という区別はないのだから、家庭科を男女必修にすることは良いと思う。女だけが家庭について知っていて、男は知らないというのでは、当然家庭内でくい違いができてしまうと思うから、両方共に、家庭の基礎知識は知っておくべきだ。

森 松平

家庭科というと女子がやることというイメージがあるが、男子だって一人で暮らす日がいつか来るのだから、一応のことは全部出来

るようになるべきである。

難波佐知子

最近離婚などが多く、父子家庭とかも増えている。本当なら、離婚を減らすべきなんだけど、そういう家庭の場合、父も家庭のことなどよくわからないことが多いみたいなので、男の人に家庭科をやらせるのはいいい考えだと思ふ。それに男女平等なのだから、女は家庭、男は仕事というのではないのだから、男の人も家庭科をやるべきだと思います。

太田 恭子

「男女平等」というわりに、学校には「女」家庭科がある。これでは、どこも「平等」じゃない。でも、これは表向きで、男も家庭の仕事をして、女も仕事をしていたら、何かがこわれると思う。今は現実にならないから言いたいこと言えるけど、もし実現したら、今日本で日本の社会を影でささえていたものがこわれると思う。やはり外と中に入らないといけないと思う。古い考えと思うかもしれないけど……。しかし、基礎的な知識はいると思うから、女子の半分の時間を学んだらいいと思う。

「共修へ向けて、さあスタート！」

馬場 洋子



「共修へ向かって、さあスタート！」をテーマに七月二十七日、家庭科の男女共修をすすめる会全国交流集会在、東京都婦人情報センターで開催された。東京はこの日遅い梅雨あけ、夏の強い陽ざしの中、全国から約九十名の参加者が集まった。

午前中は一七道府県からの報告があった。「先進県」長野から、48改訂にむけての取り組みを佐藤美枝子さんが報告。佐藤さんは、全国でも珍しい家庭一般四単位完全共修を実践してきた方である。現在の状況は若い長谷川美子さんからなされた。五校で始まった共修校も今は二一校、選択校は四十数校で県内半数以上の高校がなんらかの形で家庭科の共修をとりいれている。

二人並んでの報告は、先覚者の若い人へのバトンタッチの心遣いが感じられ、長野の共修の強さを感じた。

一二年前から共修を実施している京都から

は竹森培子さんが報告。共修で教えた生徒がたくさん家庭科教師として赴任してきている。家庭科が存在するだけで子供たちが変わっていくのがはつきりわかる、と。

京都は昨年教育制度が変わって様々な学校ができ、新設校では女子のみ必修の学校もある。今後、四単位に向けてどんな取り組みをしていかなければならないかと考えている。

文書で熊本の立山ちづ子さん。二十数年前から女子のみ必修に対し疑問の声をあげ、始めは組合で、すぐに官制研で話し合われた。県下十地区に分かれ、地区ごとの研究テーマにそって実際の活動をすすめている。現在家庭一般共修校は県立六三校中一七校、家庭に

関する科目の選択校が一五校。最近開かれた県高教組の検討委員会でいろいろな意見が出た。家庭科の男女共修のねらいは、男女平等を最終目標にするのか、男女とも必要ということなのか。又、外からみていると技術の取得を目標とみられるが、何を目標としていくのか。教課審の「方向」で高校は三科目並んでいるが、その中からの選択必修でよいのか。これだけはぜひ学ばせたいというものはないのか、などと。

共修をすすめる会関西グループ宮崎美代子

さん。『方向』が出た今、各自自治体段階で実施時期を早めることが問題だ。大阪府教委は、共修に対し、学校がよければどうぞという姿勢で、学校に任せ何もしようとしなないため、学校現場の女性差別の実態を把握しようとアンケート実施（47頁参照）を要望しているところ。

愛知の宮崎世津子さんは、つい先日開かれた名古屋市の家庭科教師一六名の研究会の反応を報告。共修は当然が三名、反対が一名。が実際に動くのは？が二名、反対が一名。文部省が変われば教育委員会はコロツと変わるが、現場の先生はなかなか変わりきれないところがある。しかしやらねばならない、どうしよう、教師をやめようかしらとなってしまう。家庭科教師も勉強する中で男女共学をやる自信をつけていく必要があると。

上の人の変わり身の早さを静岡の武田恭子さんも指摘。その変わり身の内容が、地道に研究してきたものの中身や運動を排除した上で突然『世の動向を見定めて、皆に指示される教育内容を』と打ち出してくる。サークルで共修の研究をやってきた先生の中に何か無力感を感じる。『共修に向かつて、さあスタート！』というテーマも、私たちにとって明

るすぎ、実感とズレがあると感じた。

共修がすすまない原因に県民性をあげる新潟、宮城、鳥取、鹿児島。鳥取の本橋靖子さんは、男と女分けて自立するように勉強していけばいいと、共修の必要を感じていない地域、教師の意識の問題をあげ、『流れ』が変わったからでなく、なぜ共修かという原点にもどりながら勉強する必要があると。

男女共修を検討する会発足にあたって校長部の校長がきっかけを作ったという島根の例を大利良枝さん。指導主事を無視した形になつていて、なかなか道は険しい、今年のうちには男女共修への道をすすめなければと。

神奈川の中沢美智代さん、共学を進める上での障害に、中学二年で全県下一斉に行われるア・テストをあげる。教科書にそつた内容で進路の資料にもなるため、自主編成していてもア・テストの平均点を気にせざるをえないと。

最後に朝日新聞で『いまこそ家庭科』を連載した上丸洋一さん。やり終えたら、やっぱり『今こそ家庭科だ』と。文部省の記者発表の時、女子が家庭一般、男子が生活一般というやり方もありうるかという質問に対し、文部省は「それは差別です」とはつきり言っ

た。生活一般の代替の体育については「家庭科と体育はくされ縁ですから」と。大いに新聞を利用してほしいと。

午後は、家教連で実施した中学・高校の共学実態調査報告に続き、教課審委員への働きかけと経過報告、教課審の考え方の説明の後、今後どう運動を進めるかをめぐって話し合いをした。

「家庭科教師は戸惑っている。勇気づけられるものがほしい」「今、自分は何をしたらいのか、なぜ『家庭一般』だけではいけないのか」「共修と喜んでばかりはいられない。文部省の真意を検討していかなければ」「中学の技術・家庭の矛盾が高校に持ち込まれている」など意見が出された。

今後の運動として①内容についての研究や情報交換を促進する②教員養成について、文部省、大学等へ働きかける③男女別指導や代替措置が行われないように、文部省、各教委、校長等に働きかける④現場教師の積極的な取り組みを促すなどを決めた。又、教育課程審議会への要望書（48頁参照）を集会参加者一同で提出することを決めた。

資料1 大阪府立高校における女性差別撤廃に関する要求書

1986年7月23日

大阪府教育委員会殿

家庭科の男女共修をすすめる会
開西グループ

昨年、日本政府もようやく女子差別撤廃条約に批准し、女性差別撤廃は国の重要な課題となりました。大阪府においても婦人行動計画が作られ、行政各分野におけるその推進方に府民の注目と期待が寄せられているところです。中でも第10条の教育、特に学校教育における教育課程、時間その他についての両性同一条件による教育の平等保障は、教育委員会の責任分野であると思うのですが、私たちには、それがどのように進められているのか全く不明です。抽象的な言辞ではなく、差別撤廃にむけた具体的方針に基づく施策および行政指導を求めます。現在、教育課程をはじめ、普通高校で容認されている女性差別教育を改めることは、府行動計画の具体化、差別撤廃をめざす行政の緊急課題であることをふまえ、以下の要求をします。貴委会におかれましては万難を排し、誠意あるとりくみをされるようお願いいたします。

記

1. 差別撤廃は、差別の実態把握から始められるべきですが、貴委員会では、府立高校の実態を如何様に把握されているのでしょうか。府立の全普通高校について別紙に例示する調査を行い、普通高校の実態を把握すること。
なお、各校から報告を受けるにあたり、その回答が管理職や、一部の記者以外には関知されなかったということにならぬように、全教職員に公開するようご指示ください。
2. 普通高校における教育課程上の女性差別を早急に改め、その他女性差別教育を改めるために本会と話し合う場を設定すること。

府立高校における女性差別撤廃に関する実態調査

1. 女性差別撤廃のために '85年度に何を
したか(具体的に)
2. 今年度の予定
3. 女性差別撤廃の推進機関(分掌)とその
構成
4. 各教科における指導状況
5. 教科外活動における指導
 - ① LHR
 - ② 生徒自治会
 - ③ その他の教科外活動
6. 進路指導
 - ① 4年制大学、短大進学('85年度
卒業生)について、各性別人数
 - ② 女子の進路指導で、特に力を注い
でいること
7. 名列表の順序
 - (イ) 女子から
 - (ロ) 男子から
 - (ハ) 両性混合

8. クラス役員について、正は男子、副は女子が占める傾向はないか
 イ ある ロ ない
- (イ) の場合の指導
 イ する ロ しない
9. 各種行事等で、接待係に生徒を割り当てる場合は
 イ 女子 ロ 男子
 ハ 両性混合
10. 男子体育系クラブの女子マネージャーについて
 ① クラブ名と女子マネージャーの活動内容
 ② それに対する顧問の指導
11. 制服または標準服について（ある学校のみ）入学時に新調せねばならないのは
 イ 女子 ロ 両性とも
12. 卒業時、企業の宣伝などによる化粧、着つけ等、女子を対象とする特別講習の有無
 イ 一切しない
 ロ 希望者にさせる
13. 最近5年間における性問題を原因とする退学
 ① 学校から退学指導を受けた生徒
 女子 名 男子 名
 どのような内容か
 ② 自主退学した生徒
 女子 名 男子 名
 その内容と学校の指導
14. PTA協議会発行パンフ「いま、親たちの課題」
 イ 内容の差別性を指導、説明した上で配布した
 ロ 内容の差別性を指導、説明せずに配布した
 ハ 内容に問題ありとわかったので配布していない
 ニ 配布の予定
 ホ 配布依頼されていない
15. 教職員の間で「父兄、子女、子弟」等の差別用語が使われていないか
16. 生徒を指導する際、「男やろ、しっかりしろ」「女がそんなことしていいのか」等の差別的指導が行われていないか
17. 教育課程上の差別
 ① 家庭一般の必修は、
 イ 女子のみ ロ 両性
 ② 体育の単位数は
 イ 両性同じ
 ロ 女子 単位、
 男子 単位で差あり
 ③ 改善について
 イ 府教委の指示がないから改善しない
 ロ 府教委の指示があっても改善しない
 ハ 府教委の指示がなくても改善の準備中
 （その内容）
 ニ すでに差別をなくしている
18. その他、差別撤廃のためにとりくんでいること
19. 差別撤廃のために府教委に望むこと
20. 管理職は差別撤廃の意志をどう表明し、指導しているか（具体的に）

-
- ◎ 府教委として各高校に対して行った指示、指導
 ◎ その他府教委としてのとりくみ（具体的に）

資料2 要望書

私たち「家庭科の男女共修をすすめる会 全国交流集會」参加者一同は、貴會が教育課程改訂の方向として、中学校技術・家庭、高等学校家庭科の男女共修を決定されたことを歓迎いたします。

戦後、民主的な家庭建設のための教科として、男女共に学ぶ家庭科が誕生しながら、女子用教科に塗り変えられてきたその悲劇的な歴史をふり返る時、感慨深いものがあります。今回の成果は、女子差別撤廃条約批准という好機を得たとはいえ、男女平等を、人間らしい生活を、子どもの目を輝かせる教育を切望する人々の、運動の広がりによるものだからです。

すでに、男女共修の技術・家庭、家庭一般の実践者が全国に輩出しています。このたびの決定は、力量を持ちながら、制度の壁に妨げられ、実現できずにきた人々を含めて、男女で学ぶ新しい家庭科を志す教師に、大きな励ましを与えました。男女差別を温存し、再生産する教育が改められることを祝福したいと思います。

しかし、幾つかの問題点も見出されますので、今後の答申には、ぜひ次の点を盛り込んで下さいますよう、ここに要望いたします。

1. 中学校技術・家庭は、性格や目標を異にする2つの教科を便宜的に合体させたものです。本会では技術と家庭に分離し、双方を男女共修にするよう要望を重ねてきました。しかるに、技術・家庭の持つ矛盾が改善されないばかりでなく、高等学校の家庭科にそれを広げる形になっていることは納得できません。
2. 高等学校に新設した「生活技術」「生活一般」のうち、「生活一般」を選択した場合、2単位を「技術一般」「情報処理」さらに「体育」で代替できるという措置は、理解できません。新教育課程の実施は、7、8年先で、この間に現実的な対応は可能です。代替措置の記述を削除するか、止むをえない場合は、代替措置を認める条件を明確にし、期間を限定するよう、要望します。
3. 中学校の「家庭生活」高等学校の「生活技術」「生活一般」については、家庭や生活の本質的な問題をとらえ、生活の主権者を育てる内容にして下さい。固定的な家庭像を押しつけ、もの作りに終始し、産業界の要請を優先するような家庭科からは、脱皮しなければなりません。
4. 男女で学ぶ新しい家庭科が、望ましい姿で実現できるよう、国・地方自治体の教育行政機関に対して、教員の研修や定員確保、施設・設備の充実など、条件整備に取り組むよう要望して下さい。また、すでに条件を整えている学校では、7、8年先を待たず、できるだけ早く実施に踏み切るよう、奨励して下さいを望みます。

1986年7月27日

「家庭科の男女共修をすすめる会 全国交流集會」
「共修に向かって、さあスタート！」。参加者一同

教育課程審議会
会長 福井謙一殿

こんな家庭科やっています

入江 一 恵 (We兵庫の会)

この会をはじめて呼びかけたのが三年前の七月、いつのまにやら年五回の例会が定着し、去る七月二十七日、神戸市立勤労会館で第十四回例会を標題のようなテーマで開いた。We兵庫といいながら、当初から新聞で小さな記事や催し欄に紹介され、新聞で知ったのですが、電話を受けること毎回、島根、岡山、奈良、滋賀といった遠隔の地からの参加者もあり、こんなささやかな会でも「いま求められている」を支えにこの三年間歩んできたように思う。

共学家庭科を模索している現場家庭科教師をはじめとして、娘が先生の授業を受けた○○ですが、とかつての教え子の母親、地域の消費者学級で活動している高校生をもつTさん、夫につくす妻として生きてきたが夫婦関係の破綻からあらためて今、女の問題を考えているといわれるMさんなど、毎回男性も

含めて参加者の顔ぶれは多彩である。

共学家庭科のベースになる問題と当初の一年は手さぐりで話し合い、いよいよ今年になって「その内容をどう作っていくか」を検討している。

授業録画と消費者教育教材のビデオ視聴から

今回は開会を前にビデオの視聴という計画を組んだ。会場の狭さが気になる三十五名の参加、あわてて隣の部屋から椅子を十脚ほど借りるなど汗ダク。炭谷英一さん(神戸商業高・商業科担当)が消費者教育用スライド「きみはリッチ?」ークレジット幻想曲第一楽章(消費者教育副読本刊行会 十八分)を紹介、続いて北川金秀さん(神戸大学附属住吉小家庭科専科)の「家族の役割」箸の上げ下ろし「をめぐって」五年生の授業ビデオを五十分視聴した。

島根からの銘菓を味わいながら自己紹介

続いて岡本雅子さん(神戸市立赤塚山高)の司会で簡単な自己紹介とここに何故参加したかを語っていた。時間があれば、問題をいっぱいもって参加していらっしやる方々、この所に時間をかけた。今までもここで切実な本音が聞け触発され、討議が深まっていった。しかし、今日は心を鬼にして次へ進める。大学四回生の方々(男子学生もまじえて四人)の出席が目をはひく。昨年五月初参加の岡山の福岡さん(中学校教師)——「あの時は独身でしたが、今結婚しています。今日ここにくるにはかなり夫と話し合いました」。その奮闘のあとが表情に感じられ、おおらかに会場の雰囲気も和む。京都の共学家庭科の草分け牧さんが遠く福知山から資料を携えての参加。県内高校家庭科の初参加の先生とはお互いに目で挨拶——よくきてくれたと胸がじんとする。前回出席された島根の中野さんからは二十六日必着で土地の銘菓が届けられ、「島根でもやっと会が持てそうです」の言葉を披露しながら、お菓子にこめられた思いを味わった。

家族の役割—箸の上げ下ろしをめぐって



神大附属吉小 北川金秀さん

「ある男の人と女の人がお見合いをした。女の人が『箸の上げ下ろし』も知らない人だということまで男の人からことわられる」——というどこかで聞いたようなお話。これを小学生に提示し、①この男の人は箸の上げ下ろしを通して何を見、何を願っていたと思うか。②この男の人の考えや判断についてどう思うかを問いかける。日頃、子供がどう教育されているか（どう教育しているか）にもっと意識や関心を持ち合いたい。家庭科の内容を開発したり、創造したりする時に、何のために、何を、何で、どのように、……をいつも考えておられるとのこと。ビデオの画面の子供たちはさまざまな発言をする。「その男の人は心が狭い」「男の人が教えてあげればよい」「母親になって子供を躾けなければならぬからそれくらいできなくては」「親が教えていないのでは」「自分で本などを見て習えばよい」など……北川さんはこの授業に入る前に「生いたちの記」を各々の子供に作らせた。

——子供の食事、なぜひとりで食べるの。NHK番組の訴えるもの、家庭の教育力、家族の人間関係、子供の自立——北川さんの思いも広がる。子供を迷わせ、その中から考えさせたい。このねらいはずっしりとこたえた。

食物Ⅰのはじめに

—春の野に出て、よもぎ餅をつくる—

加古川市立浜の宮中 乾早百合さん

「よもぎ餅をつくる」これは食物Ⅰの米飯を炊く——でんぶんの糊化老化という学習事項につながるものであるが、「単なる物づくりの教材としてはなくそこに到達し、定着するまでに私なりの道程があった」と言われる。

新入生を迎え、学年初めオリエンテーションの一環として学校内をH・R担任が生徒を連れ説明して歩く。こんな時、乾さんはどのクラスも押しかけている校舎内設備は後に回し、思いきって校舎外に足をのびし春の野に出た。青々としたよもぎ「よもぎ餅食べたことある?」「ピンク」「いや緑色のお餅」「あれ作ろうか」「この草であの緑色のお餅ができるのよ」から出発。自然にハツとする子供たちの目を大切に、そしてクラスの仲間作りから男女共学の家庭科の授業に位置づけるまでの道を淡々と語られる。共学家庭科は技術の教師との呼吸の合わせ方が大切と報告。

家庭科における消費者教育

京都府立洛西高 和田洋子さん

消費者問題を生徒自身の問題として意識さ

せるための試みの一つとして消費者被害の問題をとり入れた実践報告——実態調査をもとに、たまたまホームルームの生徒に起こった被害から話を進め、班別学習を通してお互いに話し合い、そのバックにある社会的機構に気づかせ考えさせる学習を目ざされたとのこと。その他、小・高学習指導要領にみる消費者教育は？（中学校はふれられていない）また、各教科書はどのようにとりあげられているか。その一覽と問題点の指摘などきっちりまとめた資料も用意され、「さすが」と共学が定着した京都の指導内容の重厚さに頭が下がった。十四年前制度化されたとはいえ、それを守り発展させ、地域、父母、生徒、教師の共感を呼ぶにはこのような研究の積み重ねがあったればこそと、その原点を眼のあたりに見るようであった。

このあと報告に対する質問、話し合いに入り、「何故あの箸の上げ下ろしの型でなければならぬのか」「画面に出た子供達の中にもすでに男女の役割意識が見られた」「これからは男は……女は……ではなく各々の個としての考え方、見方でなくては」「共学だからということでもつかしいものではなく、身近な問題をとりあげていく。例えば昨日食べ

たものをあげさせ誰と食べたかを思い出させる中で食生活を考える」「〇か×ではなく、〇でも×でもないものをとりあげていく」「お金の役割とこわさを知らせるため、お金の価値を自分で気づくような体験をさせる」など出たが意見のかみ合いが十分でなく、レポーター自身が提案した問題の焦点をはっきりさせることができずに積み残したまま時間ぎれとなった。参加者の胸の中にくすぶる課題をこれからの会で更に究めていきたい。終わりに初参加のお若い方達の感想を紹介して神戸からの報告とする。

教育学部学生・福田明人さん
初めてWeの会のことを聞いた時、先生以外の人も参加しているということに興味を

持ちました。僕自身、教育学部に学んではいますので、今まで先生方の集まりにはは出かけましたが、今日は一般の人がどう考えているか少し分りおもしろ味を感じました。ただ三人のレポートというのは多すぎて話されなかったのではないのでしょうか。

家政学部学生・北田京子さん
私自身、女子ばかりの私学の高校を出て大学も女子ばかり、家政学原論を勉強するようになり家庭科の問題について関心を持つようになりました。今度の教課審の発表そしてこの会のことを新聞で知り参加しました。実践報告を聞き、将来、教師を希望している私としては大いに考えさせられました。これからも参加したいと思えます。

「家庭科共修を考える会」発足

圓尾 豊子

教育課程審議会が家庭科教育についての基本的な方向を決めたのが七月九日。地域の中で、それぞれのグループ活動をしている仲間やWeの読者が声をかけあい、京都府立西

乙訓高校で一年生に、男女共修を実践しておられる林祥子先生を囲んで七月二十日話し合いの場をもちました。

働く女の会として昨年八月に発足した「八月の会」では、職場での「性差別」や「男女雇用機会均等法」について勉強を続けています。

昨年度の公民館主催婦人学級のメンバーは、「主婦の自立」について学びあい、今年二月には森幸枝先生を招いて、「家庭科共修の歴史と京都の実践、高校生の実情」について話を聞きました。

読書会「そやけど」は、主婦、母、女としての私達の身近な問題についての本音を語り、流されることに「そやけど」とこたわる集い。

「使い捨て時代を考える会」も、私達の生活に直接関わる食物・環境問題に意識をおいて集まる仲間達です。そして幼い子供を育てる若い母親達も、地域の中で共に育ち、育てる仲間と手をつないでいます。

そんなメンバーが、私達自身と次の時代を担う子供達の共通の問題として、「家庭科共修」の意義を知り、共に考えたいと願うての集いです。林先生とメンバーのSさんの準備

して下さった資料、高校生が授業の中で作ったレポート、教科書、資料集、新聞の切抜き、朝日新聞連載の「今こそ家庭科」等をまわしながら林先生のお話を聞き、意見の交換をしました。

教科書や資料集の選択は、生徒に家庭科を大切な教科としてとらえさせる第一歩であること、私達が今「家庭」で「職場」で「地域」で生きる上に一番大切な基礎になることを学ぶ教科であることを再認識しました。

男の子にも料理や、ボタンつけ位はできるように……と言うことでなく、男女共に自立し理解しあってこそ、共に生きる社会を創るといふことであり、家庭科こそ「平等」を日常生活に生かす教科なのではないか……その一方で現在の受験体制、一握りのエリート人間を求める企業(社会)、そして家庭。あらゆる面に自分の中にも矛盾を感じながらの三時間余りは、もうひとつ深められないもどかしさが残りました。

参加者の一人で女子高で家庭科を教える方から——四単位の「家庭一般」では不十分です。六単位あれば卒業前の三年生に婦人問題、老人問題等教えられる、と言われたことも印象的でした。

京都では85年度から高校普通科の中で類、類型別授業が行われています。学校内での格差の問題も含めて、家庭科共修の意義を先生方と共に親も考えていかなくてはいけいではないか……そんな思いを大切に「家庭科共修を考える会」を発足させました。

〈附記〉

西乙訓高校は、長岡京市と大山崎町にまたがる丘陵地にできた開校三年目の新設校。⁸⁵年に京都府立高校の制度が変わり、通学圏、類、類型別授業が行われるようになる過程で、西乙訓高は新制度のモデル校と位置づけられ、開校時より「家庭一般」は女子のみ四単位必修となっていた。しかし、共修「家庭一般」の実践者である林祥子先生は、女子のみの家庭科に強い異議を唱え、教職員の理解を得て、今年度新一年生より「家庭一般」二単位の男女共修を実現させられた。





情報

中学・高校の

家庭科はどうなる？

教育課程審議会の

考え方

七月九日、教育課程審議会総会で
 中学校技術・家庭、高等学校家庭
 科改訂の基本的方向が決定した。
 新教育課程決定まであと一年。こ
 の間に、私たちの願う像にするた
 めに、声を挙げ力を集めよう。

〈中学校技術・家庭〉

(1)履修領域

木材加工、金属加工、機械、電気、栽培、
 情報基礎、被服、食物、住居、保育、家庭
 生活（仮称）

(2)履修形態

学校において、右記の中から、原則として
 七領域以上履修させるものとする
 木材加工、電気、食物、家庭生活はすべて
 の生徒に履修させる

〈高等学校家庭科〉

(1)履修科目

家庭一般

衣・食・住・保育などに関する知識と技術
 を家庭経営の立場から総合的に習得させる

生活技術（仮称）

家庭生活に関する基礎的な知識とともに、
 電気、機械、情報処理など家庭生活に必要な
 技術のいづれかに重点をおいて習得させる

生活一般（仮称）

前半―家庭生活に関する基礎的な知識と技
 術を共通に習得させる。内容はおおむね次
 のとおり

・家庭と社会

・健康と食生活 ・消費と経済生活
 ・健康と食生活 ・結婚と育児

後半―興味・関心等に応じ、家庭生活に関
 する次のような内容からいくつかを選択履
 修させ、知識と技術を更に深めて習得する

・調理と食卓作法 ・服飾デザインと被
 服製作 ・住居の設計と室内装飾 ・児
 童心理と保育 ・消費生活と情報 ・家
 族関係と生活設計 ・家庭看護と社会福
 祉

(2)履修形態

右記のうち一科目を選択履修させる

「生活一般」の場合。学校の実態に応じ、
 後半について「技術一般」「情報処理」又
 は「体育」の履修をもって替えることがで
 きることとする

。これは家庭科教育検討会議報告(1)案と(2)
 案の折衷的な履修形態である
 。やむを得ない場合、上記の家庭科目を、
 当分の間「体育」等の科目で代替履修の
 余地を認める

〈今後のスケジュール〉

'86年	九月	中間まとめ
'86年	十二月	中間答申
'87年	十二月	本答申―新教育課程決定
'88年	四月	幼稚園～中学の新指導要領告示
'89年	四月	高校新指導要領告示 小・中移行措置開始
'90年	四月	高校移行措置開始
'92年	四月	小学校で新教育課程完全実施
'93年	四月	中学校で完全実施
'94年	四月	高等学校で完全実施

発言 染色体検査を受けた者の立場から

脇 麻理子



夫の単身赴任も終わり、ようやく元の生活にもどった昨秋のある日、

「そろそろ二人目が欲しいなあ」

と、夫が思い切ったように口を開きました。実は、私たち夫婦の間にはダウン症の愛息、知之がおります。そのころ、知之は二歳の誕生日を迎えようとしており、ようやくひとり歩きのめどもできていました。私は彼が歩いてくれることを一つの成長の目標にしておりましたので、日々の生活の中に少しずつではありますが、心のゆとりが感じられるようになっていました。ですから、その夫のことに心が揺れ、しだいに次の子が欲しいという気持は強くなっていったのです。

しかし、私には第二子を考えるにあたり、必ず通らねばならないと思っていた道がありました。そして、その道を通らねば次の大きな道へと進めないと信じていました。それは母親である私自身の染色体検査を受けることです。夫に相談したところ、

「検査なんかする必要ない。またダウン症の子どもが生まれ

たつてええやないか。知之だって生まれた時、死んでしまいかもしれないとまで医者に言われながら、あんなに元気で楽しそうに暮らしてる」

と言われてしまいました。

しかしながら、私は夫ほど割り切ることもできず、染色体検査の予約をしてきたのです。この段階まで私は、この「検査をする」ことを少し軽く考えていたような気がします。というよりは、この二年間、元気な子どもを産むことのむずかしさを感じ続け、もう二度と子どもなど産むまいと決心していた私にとっては、検査をしてでも次の子を産みたい、知之に弟妹をつくってやりたいという気持の方が強くなっていた。知之もずっと成長したんだと自分に言いきかせていたのです。

その後、検査の予約日まで二週間ぐらいあったのですが、この間にいろんな方とお話ができました。そして、お話するうちに、私はだんだん自分が何か罪深いことをしようとしているような気持に駆り立てられていったのです。それと同時に

に、私の中に潜んでいたいくつかの矛盾が表面化したように思いました。

この矛盾というのは、一つには、以前から万一、第二子を考えることがあれば、そのときは、またその子が障害児であってもやっつけていけるというぐらゐ強い気持が持てるようになっていなければならないと思っていたことと、もし、本当にそういう気持であれば、染色体検査など必要なのではないだろうかということ。そして、もう一つは、「検査する」というのは、平たくいえば「子どもは欲しいが、障害児はいらない」という気持から発しているのではないかということ。そして、これは愛する知之の存在そのものまで否定することになるのではないだろうか……。

私の場合、今後、新しい生命が宿ったとしても、その命についての羊水検査は絶対したくないと思つています。いや、必要ないと思つています。それは、こんな検査で生命の尊さは本来計れないのですし、もし検査の結果、障害児とわかったとしても、きつと宿った命は大切に思うからです。だから母親である私の段階で問題があるならば、その時点で解決したいと思うのです。これも矛盾なんだと思います……。

しかし、ここで、私にとってこの「検査を受ける」ことは、私だつて健常児が産めるといふ太鼓判が欲しいわけでは

なく、ましてや、ダウン症児を産んだ母親の義務としてするわけでは全くない、ということだけは声を大にしていきたいと思ひます。

こんなことをいろいろ考えるうちに頭の中で矛盾がうずまき、混乱して、どのように自分の気持を整理したらいいのかわからなくなつてしまいました。でも私は、ともかく検査を受けようと思つたのです。この時点では、私は人間としてのたてまえよりも、女または母親としての気持の方を大切にしたいと考えたのです。

検査後一ヵ月ほどして結果がでました。若干の但し書はつきましたが、異常なしとのことでした。やつと一件落着きたいところなのですが、今一つ、晴れやかな気分になれませんでした。一ヵ月前には結果さえよければ、きつと何もかもふつきれ、明るい未来が拓がるはずだと思つていたのに。

それからしばらくして、思いがけず、知之が毎日通っている施設のある先生とお話する機会を得たのです。そして、しばらく私が忘れていた大切なことに気づかせていただき、もやもやしていた私の心の中にさわやかな風が吹いたような気がしました。それは「子どもつていうのは、授かりもの」だ」ということです。私はこの二年ほどの間にそのことをすっかり忘れてしまつて、高慢にも「子どもは、つくるもの」だ」と勘違いしていたような気がします。授かりものだと考

えるなら、どんな子どもだって、すんなり受け入れられませう。私の第二子の件にしても、別に知之のめんどろを見させるための弟妹を産むわけではないのですから……。

私の染色体検査から端を発し、多くの先生方やおかあさん

発言 学校給食を全廃せよ

小寺 平治

食物は個人のもの

管理主義教育が、いま大きな社会問題になっている。服装や髪型までが細かく校則で規定されている。しかし、人間の服装や髪型は、それなりの伝統文化の中にあっても、本来個人の問題である。人間の食物もまた同様である。

もともと児童の命を作る食物は、その両親など保護者の手によるべきものである。

貧困による欠食児童のために始められた給食を、現在でも学校は既得権として存続させている。この明白な越権行為は、戦後紙不足を理由に教科書検定権を入手し現在に至っている文部省のやり方とよく似ている。

方とお話しでき、私自身いろいろ悩んだりしましたが、最終的にはいい方向に持っていけたように思います。ひと一人世に送り出すのは、こんなにも大変なことだったんですね。



こうして、学校は教科書による頭脳の管理に加えて、給食による精神と肉体の管理をも、まんまと手に入れてしまったのである。

かつて公教育が家庭の台所にまで踏み込んだことがあっただろうか。一九五一年（昭和26年）ガリオア資金打ち切りと同時に学校給食は廃止されるべきものであったのである。

センター方式も自校方式も五十歩百歩

いま、センター方式には反対だが、自校方式の給食なら大賛成（というより、給食は当然あるべきもの）という運動が盛り上がりつつある。この運動は「子どもの弁当を作るのが面倒だ」「給食なら安上りで手抜きができる」という横着で

無責任きわまる人たちのおかげで、大きな運動になりそうである。

未来を背負う子どもたちの心や体よりも、自分の「票」が欲しく、「中学にも給食を！」を政見にかかげる市長候補まで現れた。

しかし、子どもたちの肉体と精神を破壊するという点にかけては、センター方式も自校方式も五十歩百歩なのだ。弁当にしたら、スナック菓子やホカホカ弁当の子が大部分になる、だから子どもたちにいい給食を！と本気で考えている人がいたとしたら、なんと僭越なことだろう。世に使命感にもえた教育者ほどやっかいな存在はない。善意の管理ほど恐ろしいものはないのだ。

いい給食ならば、あった方がよい、というのは、いい教科書ならば、あった方がよい、というのと同じで、給食や教科書の本質をカモフラージュするやっかいな学説である。ハト派ほどこわいものはないのだ。

給食問題を定めるのは

給食は福祉か。給食は教育の一環か。冗談じゃあない。伝統的な食文化の崩壊とファミリレストランの隆盛の一翼を荷ってきたのが、まさに学校給食そのものではなかったのか。学校給食を反面教師というには、あまりに強烈すぎる。

教科書を与えられるのは教師の恥。給食を与えられるのは

親の恥ではないのか。

農薬・添加物・ニセ物食品という物騒なものが街に氾濫しているこの現在こそ、親たちが子どもをしっかり守ってやるべき時代ではないのか。いまこそ親本来の存在が要求されるときではないのか。自分たちの子どもの食事まで学校に預けてしまってはなるまいぞ。

給食問題を定めるのは、学校でも、教育委員会でも、文部省でもないのだ。それは、私であり、あなたなのだ。

給食教科書	センター方式 定検	自校方式 定	弁当 自由発行 自由採択	持参 全廃
大学入試 (大学問題)	共通一次方式 (放送大学)	大学独自の入試 (現行の大学)	入試 卒業証書廃止 大学家元制度 廃止	全廃
軍事費	軍事	大國	1%以内	平和憲法遵守

新しい家庭科を創るために

——小学校では——

村田 尚子

展覧会 パートⅠ

五年生作品「海の中」

秋——学校は文化祭の季節。わが校は学芸会と展覧会を一年ごと交互に行っています。85年度は展覧会。展覧会への出品は図工科。家庭科の作品で、主役は図工科。家庭科は、さしみのつま程度とは言うものの、新米家庭科教師の私は、四月当初から、秋の展覧会に何を出すことにするかなアと気にしていました。

今まで、いろいろな学校で展覧会を経験してきましたが、家庭科の作品はつまらないものが多かったというのが私の印象。五年生は手さげ袋がワーツと並んでいるだけだったなア。六年生はほとんどがエプロンだったなア。それも材料はたいてい教材屋さんからの一括購入なので、百枚以上のエプロンのどれもこれもが似たりよったり。その子らしさを発揮する部分はほとんどない。しかも、広い展示場所を必要とするわりには、見る側にとってあまり心に残らない、つまらないというわけ。

図工科の担任にとっても、家庭科があんまり場所を取らない方がいいだろうなアという思いもあって、場所を取らず、見た目もよく、しかも作っていて楽しい、そんな物はないかしらと、夏休み中あれこれと考えました。

大きな柱としては、共同作品でいこうということをも、まず決めました。ひとりひとりが自分らしさを表現し、なおかつクラスや学年でひとつのまとまりのある、大きな作品に仕上げるということです。前任校の展覧会で、十年余り共同作品に取り組んできた私は、そうしたやり方の魅力を忘れることができませんでした。

前任校では、学年ごとにひとつの共同作品に取り組みました。ひとりひとりの作品を持ち寄って、大きな街や森の中の様子を表す方法もあれば、大きな版画やレリーフを全員が少

しずつ分担して仕上げる本格的なものもありました。会場も多くの小学校で見られるような体育館ではなく、全教室を開放して行いましたから、例えば一つの教室全体をひとつの作品にしたこともありましたが、教室の窓いっぱい、切り絵とセロファンによる「ステンドグラス」を飾ったこともありました。教室に入ったとたん、天井に頭が届く恐竜が出現したり、小さい子が背中に乗って遊べる、ダンボールのゾウさんがいたり、とにかく楽しい作品が多かったと思います。

誰でも得手不得手があるのは当然のことで、子どもの中にはいなアと思える子もいます。日頃には努力をしていますが、展覧会というとき、自分でも見劣りするなアと認めないわけにはいかない作品が、名札をはられて展示されてしまう。それがいやではずかしくて、作品製作そのものに初めから意欲をなくしてしまうという子もいるのです。私も、そうでした。特に私の子どもの頃は、絵や工作に金・銀・銅賞などの紙きれがはられたりしたものですから、自分としてはよくできたなアと思える作品が入賞せず、ひそかにライバルと思っていた子が金賞をもらっていたりすると、それだけでイヤになり、展覧会という気が重くなったりもありました。今は、賞という「レットテルはり」こそなくなりはしたものの、それでも見る側はやっぱ、アレが上手、コレは下手といった見方を

することが少なくありませんから、子どもの中には、展覧会はキラリという子も多いのです。

ところが共同作品の場合、ダレが上手、ダレが下手という見方からは解放されます。個人の作品を持ち寄って大きな物を作ったり、一つの場面設定の中に個々の作品をちりばめる方法では、個々の作品を比較する見方をされなくても限りません。しかし、その場合でも、一つの大きな作品を形づくっている大切な一部分として存在しているのですから、上手・下手といった単純なふりわけの対象にはなり得ません。共同作品はまた、ひとりでは決してできない大きな物を作ることができません。みんなで相談しながら作ることができません。

子どもたちは共同作品が大好きでした。完成した作品を見て、例外なく驚き喜んだものです。百人以上の同じ年頃の子どもたちが、ワアワア言いながら、手や服をノリだらけにしたり絵具だらけにしたりして、ひとつの物を作り上げる、そんな経験は学校ではできないことです。それこそ、塾やおけいこごとの中には見出せない喜びです。学校ではかきかいた喜びの創造です。だからこそ、子どもたちの意欲もかきたてられ、完成の喜びも大きかったです（それなのに最近の学校からは、このような喜びの創造の場がどんどん失われてきています。楽しいことのない学校なんて学校じゃない。学校とは名ばかりの収容所まがいの学校が増えているおそろ

しき!。)

子どもたちにとつてのみならず、教師自身にとつても、すばらしい経験でした。子どもといっしょに大きな作品に取り組めるのは、二年に一度の展覧会くらいのもの。学年によっては教師の方が大はりきりで、この時ばかりは勤務時間も何のその、夜遅くまで教室に灯がついていることもありました。

共同作品づくりの強烈的な印象と楽しい思い出を持つ私は、本校での前回(83年度)の展覧会が、個人作品だけだったことがとても物足りなく感じられ、できれば図工作品も共同作品があればいいのと思っていました。図工科担任に話しますと、彼女も賛成してくれて、四年の工作、五年の版画、六年の工作は、共同作品にすることにしました。家庭科でも五年でひとつ六年でひとつ、合計ふたつの共同作品を出品することになりました。

柱は決まった。では、なかみをどうするか。またまたあれこれ悩みました。家庭科の共同作品というのは全く経験ありません。子どもの声も聞かねばと思いつつも、予算その他の関係で、多様でせいたく子どもへの要求を無条件に取り上げるのは無理なようでした。それで、こちらで案を示して子どもの意見も聞くことにしようと思いました。

五年生の場合、一学期にやったことと言ったら、ボタンつけと基礎的な手ぬいのしかたくらいのもの。それだけで何ができるかなア。ボタンつけ応用のプレスレットを作った話を半田先生にうかがったけれど、共同作品には向かないし、などと考えていくうちに、ボタンを魚の目玉にすることを思いつきました。フェルトで魚の形を切り抜いて、ボタンを目玉にして、ヒレやウロコは別のフェルトをぬいつけたり、返しぬいや簡単なししゅうをほどこしたり。糸はししゅう糸を使えば見栄えがする——。ひとりひとりが作った魚を大きな布にはりつける幸い(手芸用ボンドという便利な物もある)。「海の中」という題の大きな壁掛にする。共同作品の理想からは少しはずれるけれど、持ち寄り共同作品だって、同じような袋のベタ並べよりはずっとマシだ。これで、子どもたちが楽しんでくれたら言うことなしなんだけどな。我ながら、いわゆるひとつの「思いつきカンピューターひらめき教育」だなアと半分苦笑いしながらも、何だかウマくいきそうな気がしないでもありませんでした(動物的カンというヤツ)。

二学期早々、五年生にこの話をしました。前号に書いた、例の△組とは、一学期末からの冷たい関係の最中で、例によって「メンドクセーヨ」「ツマンネーヨナー」なんて声も聞かれたのですが、「そんなこと言ったって、他にやれることないじゃない」「じゃあ、何かいい考えあったら言ってよ」

「ソナナモンアルワケネーヨ」「シシニューナテシラネー」「なら、ガタガタ言わずに私の言う通りにしなさい」というようなやりとりの末、とにかくにも私の案を押しつけてしまいました。他の二クラスは、スナナリ賛成してくれたのでした

が。
未経験のことですから、私の話す共同作品のすばらしさや楽しさが、すぐには理解できなくても仕方ないことかもしれません。でも、図工でも大きな版画に取り組むことになったことだし、ひとりひとりの上手下手は問題じゃなく、自分が楽しんで作ることに意味があり、みんなの力を合わせて一つの物を作り上げることに意味があるんだということは、だんだんとわかってもらえたようでした。

フェルトは二十センチの正方形、色は十色ある中から好きな色を選び、目玉はボタン、どこかに自分の名前のぬいとりをすること以外は全く制約なし。どんなものでもけっこうとにかく自分で気に入るものにしてしよう。海の中にいそうなものなら魚でなくたっていいからというので始めました。私

が共同作品のなかみで思い悩んだように、子どもたちは、どんな形にするか考えるのにずいぶんと時間がかかりました。「ひとまね」はよそうよと言ったので、「考えつかない」「先生教えてよ」「○ちゃんと同じじゃダメ？」などと弱音を吐

く子も出てきます。でも本当は、何とかして友達とちがうもの、自分だけの形を創り出したいという気持ちだが、どの子にもあるのです。少しずつその子らしさの見られる形や色が決まっていきました。仕事を進めていくうちに、最初のデザイン画とは似ても似つかぬものになっていく子もいましたけれど、それこそ工夫やヒラメキの結果であって、ちよっと糸の色を変えるだけで、全く違った感じになるなどの発見もありました。私の頭の中には、大まかなイメージはあったものの、どんな魚ができるやら、壁掛にしたらどうなるやら、心配でしたが、子どもたちの仕事が進むにつれて、心配は消えていきました。

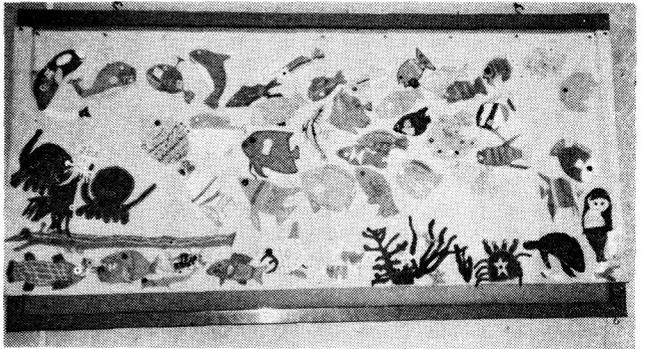
十月末の展覧会までのほぼ二ヶ月間、五年生の家庭科の間は魚作りひとすじ。針に糸を通すだけで何分もかかる子もいるのですから、急がせるわけにはいきません。せいては事を仕損じる、ユックリズムでいきましょう。

この間の子どもの様子をを見ていて、私は、モノを創り出すことは、やっぱり楽しいことなんだ、子どもたちは少々メンドウなことだって楽しければ熱心に取り組むんだということを確認しました。最初ブーブー言っていた△組の子どもたちでさえ、仕事が進んでいく中で、楽しんで仕事をするようになっていったのです。どちらが頭でどちらが尾なのかわからない細長いフェルトをいくつもつないだものを持って

きて、「これは深海魚だから、下の方にはりつけてよ」と要求する子。ボクたちのは二ひきでケンカしてるんだと、歯をむき出した魚を見せる仲よし二人組。黒いボタンでパッチリお目々の人魚姫。ウロコにビーズをちりばめた美魚？白いフェルトで背中如潮吹きをつけたクジラ。手よりも口の方がよく動いているような騒ぎの中で、自分だけの魚作りに熱中していく様子が感じられました。

三クラスとも、ひとり残らずでき上がり、厚手木綿の台布の上にみんなの魚を並べた時は、いっせいに「ワーイ！」という歓声が上がりました。ひとつひとつを見ていても、それぞれに楽しく個性的な魚たちが、四十数ひき群をなして泳ぐさまは、私が見ても壮観で、心の中で思わず「ヤッターネ！」と叫んだほどでした。個人の仕事で全体の中で新しく特別な意味をもっていく、そうした喜びを、子どもたちが実感していることがよくわかりました。

クラスごとに子どもたち全員の意見を聞きながら、魚の並べ方を決めたのですが、三クラスそれぞれに全く違うムードになったから不思議でした。何よりも意外だったのは、例の△組の作品が、他の教師たちからいちばん「オモシロイ」



と言われたことでした。今回の仕事の上でも、他の二クラスに比べて私が大声をはりあげる場面が多かった△組の作品が、「生き生きしていてオモシロイ」ものになったことは、たいへんなことです。今にして思えば、そのあたりにも△組との冷たい関係からぬけ出す「くもの糸」は見出せただけですけれど、当時の私には、気のつくゆりはありませんでした。

展覧会当日は、三枚の壁掛けをパネルに並べ、子どもたち自身の書いた解説文をつけて展示しました。幸い、保護者をはじめ参観の方々にも好評でホッとしましたが、何よりも私がうれしかったのは、作った子どもたち自身が大いに満足してくれたことと、低学年の子の感想文の中に、「はやく五年生になってわたしもあんなの作りたいな」という文章があったことでした。

八六年三月、杉並ユネスコ協会の催しで、朝鮮初等学校との「国際子ども交歓会」が行われた時、この作品も出品しました。朝鮮の子どもたちにも先生方にもたいへん好評でした。三枚の壁掛けは、今も家庭科室にかけてあります。

(東京都杉並区立高井戸小学校)

新しい家庭科を創るために

—中学校では—

磯部 幸江

家庭科の今日と明日 を紡ぐ

—今、私にできる事—

六月七日。NHK七時のニュースが、朝食の支度などで忙しい私の耳に入ってくる。

「えっなに！ 中三まで男女いっしょ。領域まで指定してあるよ。高校も必修だ。やったね!!」私の大騒ぎに夫も口を出す。「いいことだ。あたりまえだよ」。

教育課程審議会の答申がどう出るか、これからの家庭科の行方に

大きく影響するし、私の教師生活にだってかかわりのあること。中学校が全面必修になることをとでもうれしく思った。今の受験体制の中で、家庭科は、周辺教科として軽く見られている。女子のみの教科であるからさらにである。生徒たちの意識を変えようとあれこれやっけていても、女子のみでは限界があった。家庭科が、女子教育としての、また物づくりの教科、から脱却して、Weの掲げる「男と女の自立を、人間らしい生活を、差別のない社会を育み創り出す教科」へと生まれ変わるならば、市民権を持った教科となるだろう。私は、教師としてその真只中において、その役目を担う一人となった。今までサークル等で学びつつ、細々と自主編成をしてきた事を教科の目標や独自性系統性を考えて、再編成していかなければならない。うれしい反面、とてもこわい。いま新しい地平に立った時に、私にその力があるのだろうか。

五十二年の指導要領の改訂を振り返って

昭和五十二年の指導要領の告示。今まで男子向き・女子向きと分かれていた中学校の技術・家庭科が、技術分野と家庭分野の一部相互乗り入れとなった時である。私は、技術科・家庭科教師各一名という前任校で、指導要領の完全実施になる三年前の移行措置開始の時から、男女必修の授業を始めた。教師になり五年目。女子のみの授業に息づまりを感じて

いた時であつたから、渡りに船であつた。相棒の技術科教師も、男女共に広くいろいろな知識や技術を得ることが必要と話が決まり、教科の決定が最優先であつたから、学校でも問題なく始められた。一年生で食物と木材加工を一週間交替で学習した。教科書は、男子向きと女子向きに分かれていたので、プリントを作り、教材もあれこれくふうして取り組み、気負いこんだ日々であつた。この一年間、男女で学んでよかつたことを揚げてみると次のようになる。

(1) 騒々しかったが、私も生徒も楽しく授業ができ、生命を守るための食物について男女共によく学習できた

(2) クラス単位で授業ができ（女子のみだと、二クラスの女子が合併となる）生徒それぞれのクラスでの役割や存在がわかる。同時に男女で協力して取り組むことができ

(3) 生徒たちにもそれぞれ得意不得意があり、他の教科と違つて活躍できた生徒がいた。今でも記憶に残っているのは、講義の時は学習意欲がなく、趣味の本などを机の下に隠していた男の子が、実習の鮮やかな手つきをクラスメイトから称賛され、私との対話もよくなつていったことである。彼は、家での食事作りを責任もつて分担していたのであつた。

「案ずるより産むが易し」とつくづく思った。男女じゃでき

ないと、思い込みが強いのは教師の方である。つたない授業をカバーしてくれたのは生徒であつたし、同僚たちも、「男の子もがんばっているんだね」「きょうは、家庭科、みんなはりきっているよ」と声をかけ、支援してくれた。私も授業が終わるたびに、「○○がこうだった」「今、こういうことをやつたよ」と、雑談の中でしゃべりまくつたものである。

反省点をまとめてみると次のようになる。

(1) 指導法・内容に関して。集中させ、興味を持続させながら授業をしていくこと。目標を達成させるための教材を吟味すること

(2) 同僚や親たちにも訴えていく。日常生活の中に、実践できる場をどんどん作っていくこと

その翌年、指導要領の伝達講習会（各校の技術家庭科の先生方が四十名ほど参加）で、相互乗り入れ一年間の成果を発表する機会があつた。よい点悪い点を含めて、ありのまま発表したのが、男女共修の目標や理念などそつちのわけで、方法論の問題点だけを指摘された。女子がいると男子の足をひっぱると述べられた技術教師もおられたし、おたくの学校ではりっぱにやっておられるがうちではできない（学校が荒れているとか、まとまっていなからとか）という意見も多かった。

以前より市全体でまとまって共修に取り組んでいる上尾市の先生からは、示唆に富む意見があり、大いに参考になつた

が、全体的に現場教師の悪い体質を感じさせられた。それは、すべて例年通りですませる。つまり、新しい事に一步踏み出すには、時間がかかるなあということであった。

それ以後、第二子の出産で現場を離れた事などあり、こういう場での発言はしていないが、校内では、相互乗り入れを一年生だけで終わりにさせず、二年三年生へとつなげていく実践をすることができた。

教育実習生を担当して

教員免許を取得するには必修の教育実習。本校でも毎年、十数名の卵たちを迎える。今年も、家庭科一名を私が担当した。中学時代の直接の教え子ではないが、自分の一生の仕事を持ちたいという餅原祥子さん。古い考え方にとらわれず新しい感覚で、家庭科と真剣に対峙したいという熱意は好感もてる。実習はたったの二週間。その間に、指導法などの技術を身につけるのは容易ではないから、まず生徒をよく観察し、仲良くなる事から始めて「あらん」というアドバイスをする。

オムレツ作りの実習では、皆楽しそうにやっております、それこそ必死でとりくみ、観察していても気持ちよかったです。私が手伝うたびに失敗していくので、生徒に悪いと思つた。

給食の時、三班で食べたが、女子がいなくて気まずく自信がなくなってきた。掃除の時は、私の顔を見てわざと悪ふざけをする男子がいて、すっかりしよげてしまった。放課後、教頭先生の講話を思い出し、「皆がかわいくてたまらない」と意識して思つて、無防備に話しかけたら、生徒からも話しかけられ、その後はずっと調子よかつた。無意識のうちにたえず「にこっ」としている自分がうれしくてたまらなかつた。(実習記録より)

若いというのは本当にいいなと思う。生徒たちともすぐに打ち解ける。でも、先生としての態度をとらねばと強圧的に出ると、子供たちは、さつと離れていってしまう。自分が中学生だった時を振り返りながら、様々な生徒の姿を受け止めてくれたようである。

はじめての授業で緊張もしていたが、まちがいはかりやっていた。思つたより生徒の反応がよかつた。あつているが、予期しない答えが返ってきて、その場は非常に困つたが、後で考えてみると、おかしくって声を出して笑いたくなるような答えだつた。子供というのは、どんなでもない発想をするものだと思つた。(実習記録より)

ようやく慣れて生徒と気軽に話ができるようになり、これ

からという時に終わってしまった残念でならないと、述懐していたが、指導者としての私も、教師をめざす彼女に、私の想いをぶつけてばかりいたと思う。家庭科とは何かの本質論から、今、家庭科が問題になっていること、教師として仕事を続けていく上でのいろいろな事まで、経験や理想を話し合っただ。教育実習での生徒や先生との出会いは忘れがたい。お別れ会での生徒の激励の言葉を胸に励んでほしい。

朝日新聞の「いまこそ家庭科——課題と展望」の記事にも「教員養成の問題について、「裁縫から出発の名残、被服重視の教員選考。生活見つめる視点を」という見出しで載っていた。教師をめざす人たちに、男女共学の家庭科教育ができるような資質と感性をみがいてほしいと思う。私は教師として生徒の前に立った時、大学での座学は消え去り、まっ白な自分がスタート台に立ったのを自覚した。一人前になりたいという熱意だけで突っ走ったようなものである。

今、私にできる事

今年の教課審の中間まとめの後、指導要領の改訂、全面实施まで七年もある。その間も私たちは多勢の生徒たちを相手にしているのだから、今までの反省もふまえて、あらゆる事に取り組んでいきたいと思っている。

(1)実践から学んだ事、新しい家庭科の内容を、悩みや問題

点もあらゆる場で話していきたい。マスコミにも取り上げられているので、いろんな立場の人にも話しやすくなっている。生徒たちがどのように反応し、どう変わってきたかを具体的に話せる現場の教師の発言力は大きいと思う

(2)「どんな事でも、一人では何も出来ない。二人でもまだ力が足りない。まさに『三人寄れば文珠のちえ』の諺の通り、最低三人くらいがそろわないと、ブロックを動かす力にはならない。まして、研究会が動くということはその陰に、それなりの力量を持つ先生方の、地道な積み重ねがあったと思っている」(『男女で学ぶ新しい家庭科』森幸枝著より)。まず、足元から、一人でくよくよすることなく仲間を増やしていきたい

(3)ともすれば高校家庭科に注目が集まっているが、基礎を身につける中学校も重要。自覚したい

(4)実施は早ければ早いほどよい。移行期から実施できるように準備をしていく

(5)今、家庭科教師の力量が問われます。中学校では特になった一人とか、多くても二人で、まじめに熱心に家庭科に取り組んでいるのです。力を貸して下さい。声をかけて下さい。毎日の生活で感じた事、子供たちに身につけさせたい事は何か、多に家庭科の内容に干渉してほし

いと思います。新しい家庭科を共に創り出せたらいいな
と思うのです。私も教科の城に閉じ込めることなく、心
を広げていきたいのです

今年もまた、夏季フォーラムの家庭科の部屋や分科会を担

当し、それらをどう進めるかを意識しながら、この原稿を書
きました。みなさんのお手元に届くのは、フォーラムの成果
をじっくり反すうし、新たな実践に取りかかった頃でしょう
か。大きな山を動かす一員になった喜びをバネに前向きに取
り組んでいきましょう。
(大宮市立大砂土中学校)

* ひ と *

「いま中学校で」の

仲野暢子さん



池袋サンシャ

インビルを近く
に、ビルに囲ま
れた西巣鴨中学
校。夏休みのこ

の日は全校生徒

の $\frac{1}{3}$ が参加しての飯ごう炊さん。炎天下、木
陰を求め校庭の隅に五、六人のグループでか
まどを作り、メニューは焼肉、カレー。デザー
トにはかき氷も。生徒も先生も顔は真っ赤。
仲野さんは一つ一つのグループに声をかけ
ていく。「先生食べてよ」と声をかけら

れたり、火かげんをみてかまどを低くしてあ
げたり。

最初、家庭裁判所の調査官をやっていたけ
れど、地方配転を機にやめ、人に誘われて、
二五歳の時、教師になった。受け持ったのは
英語、持っていた免許は社会。その後、通信
教育で資格をとった。

私にできるのはかまどに火をつけるだけ。
いつも子供にめんどろをみてもらっている
と。

わからない子の気持になるには、自分がわ
からないことを習おうと、ルーマニア語に挑
戦。いろんな人とのつながりが広がった。

「大好きなショパンの家に行きたい」「あの
夕日を見たい」そんな一人旅が好き、そこで
の人との出会いが楽しくて仲野さん。

今はアメリカで仕事をし自立している娘さ
んがつつぱりグループへ参加したころ、未成

年の喫煙が問題になり始めたころ、そのころ
から仲野さんの禁煙教育が始まる。この時、
ほんとに苦しんでいる子のが少しづつわ
かるようになった。

前の学校が荒れていた時、手に包帯を巻い
ていたことがあった。相手を甘く見、ぶつか
つての傷だった。自分の心のおごりがつらか
ったと。生徒とのつき合いも自分をゼロにし
たら中にうまく入れた。タバコをやめてはく
れないけれど、学校ではやらない生徒、夜中
に電話をかけてくる。「今、吸っちゃった」。
さびしいのだろう。

子供がダメなのは、大人がダメにしてい
る。その痛みを感じなくては何もできない
のではと。

若い中学生のエネルギーに私は充電させて
もらった。この子たちをみつめさせている
仲野さんのあたたかい眼差しからも。(馬場)

新しい家庭科を創るために

— 高等学校では —

立山ちづ子

小麦を食べる

色ついた小麦を
ながめながら

五月下旬になると、本校の周りは黄金色に染まる。小麦の収穫時期なのだ。七〇年代後半には夏期の稲作は盛んでも冬期の田に作物はなかった。その後の自給率向上への農業政策の転換は、再びわが地域にも小麦の栽培を取りもどし

ている。農家は農政に敏感に反応し、田畑は移り変わる。が農作業にほとんどかわらなくなった子どもたちに、この光景はどのように映るであろうか。

この季節に「小麦」を題材にしようと思った初めの動機は、自然とのかかわりがうすくなっている子どもたちに、私たちがよく食べる小麦が、今私たちの周りで収穫されていることを意識させたいことであつた。

ところで、小麦を加工した食品は多種多様で、私たちは毎日食べている。だが、店頭に並べられた食品を買うとき、それが小麦製品であることに気付いていない子どもたちがほとんどである。原材料が小麦であることを意識させたい。その加工は自分たちの手でもできることを知らせたい。その過程で、商品への関心が高まり、よりよい品質や価格のものを選ぶ姿勢が育っていくのではないか。さらに欲張って、米は減反されているのになぜ多くを輸入に頼る小麦の消費量が伸びてきたのかも考えさせたい。米食民族の日本で政策的に食文化が変化させられてきた軌跡を学ぶことができるのがこの小麦である。私たちの食生活を主体的に築いていく一つの契機にできたらと願っている。

小麦粉の種類と性質を確かめる実験 (1・2限)
市販実習ノートにもよく記載されている、薄力粉と強力粉

のドウ、麩の比較である。水を加える前に、粉の手ざわり、色の違いも観察させた。粉に種類があることは知っているようであるが、ドウを水洗いし、残ったグルテンの量や焼いた場合の差異には驚く。しかし、ここでは疑問を抱かせ、そのまましておく。

膨化剤の種類と膨化の状態（前実験と並行して行う）

熊本県版実習ノートに添って、薄力粉50gにA重曹 B重曹十酢 Cベーキングパウダー D卵白と膨化剤の四種を加え蒸し、比較する。試食しやすいように砂糖も加える。

実験の整理（3・4限）

食品成分表で小麦粉の種類と成分を比較し、特に数値が違う栄養素名を選ばせる。たんぱく質である。男子は初めて学習するので、栄養素の働きが十分に理解されていないことを配慮して説明する。「私たちのこの腕、足、この身体はたんぱく質でできています。実はこの前最後に焼いたものはたんぱく質の塊です（焼いたものを見せながら）。これが私たちの身体と同じようにパンやまんじゅうの形を作ります。粉の状態ではグリアジン、グルテンというたんぱく質ですが、水を加え、こねると二つがくっついてグルテンという粘弾性をもったものになります」「では、ボールに白く濁って沈澱し

たものは何だろうか？」「かたくり粉みたい」「そう。しょうふといいますが、澱粉です。栄養素では炭水化物に入ります。これが糊の働きをします」。

栄養素が目に見える形になるので、栄養素の働きと結びつける興味を示す。

膨化について、膨れる理由を生徒にたずねるが難しいようだ。加熱によって変化するのは何か。「物質は固体・液体・気体に分類できますが、温度によって大きく変化するのは何？」などと問いかげながら「気体」と答を引き出す。「ではこのドウの中にはどんな気体が入っている？」「……」「空気」「水蒸気」ここで、膨化剤が分解して二酸化炭素を発生し、これが中心になって熱膨張し、ドウが膨化することを説明する。「卵白を泡立てたものは何で膨れるかな？」しばらく考えて「空気」の返答。「卵の薄い膜の球の中に空気が入っていてこれが熱膨張して膨らむ。この前、よく膨れた班とだんごになった班とがあったけど、膨れなかった班は、卵白がしっかり泡立っていなかったり、小麦粉の混ぜ方が悪くて空気の球がこわれてしまったからです」と説明。A・B・Cの違いの整理。

「ところで、私たちが食べるときは温度は下がっているけど形は膨らんだままですね。どうしてものように小さくならないのかな？」「……」「形を作るのはたんぱく質でしたね。」

卵はたんぱく質の塊のようなものです。生の卵はどろどろの液状ですが、加熱するとどうなりますか?」「固まる」「そう。熱凝固します。先のたんぱく質であるグルテンも熱で凝固して、冷えても膨らんだままの形が保てるのです」。

「では澱粉はどのように変化するだろうか。私たちが毎日食べるご飯にも澱粉がたくさん含まれています。生の米は食べないでやはり水と熱を加えて煮たあとに食べますね。実は生のときの澱粉はβ澱粉といつてとつても固く私たちの体内では消化されにくいのです。これを煮ると、やわらかくなりほぐれてくる。これがα澱粉です。澱粉はぶどう糖(砂糖の題材で既習)が多数結合したもので、直鎖状のものがアミロース、枝分れ状のをアミロペクチンといい、枝分れがあるとお互いからまりやすいので粘性をもっています。もち米は粘りますがこのアミロペクチン100%の澱粉でできています。ご飯用のうるち米はアミロースが20%入っているので粘りが少なくなります」「α化された澱粉はやわらかいので鎖が切れやすくなっている。小さく切るのは消化酵素の働きです。私たちが口から食べると消化酵素で少しずつ鎖が切られて小さくなり、小腸の膜を通過するときは一つひとつのぶどう糖に切られています。このように、私たちが食べ物を調理するということは、おいしくいたたくためという目的だけでなく、体内で消化されやすい形に変えるということもあります」。

ひとつの食品が、調理され、食べられ、身体の栄養に化していく過程を追うことで、食べ物を科学的にみる眼を養いたいと思う。

ドウの粘性の利用 パスタの手作り(5・6限)

パスタ(卵入り手打ち麺)は、切り方によって名称が変わる。ここでは細く切ってスパゲティにする。ミートソースをかける(生のトマトを煮る。トマトの生食しか知らない生徒は驚く)。付け合わせに、ベジタブルサラダ(マヨネーズはパスタの材料で卵黄が一個分余るので手作りに)、コーンポタージュ(小麦粉の糊の性質の応用、ホワイトルウを作る)西洋料理の一つの献立ともなる。

パスタ作りの感想では「卵を小麦粉の中に割ってこねるときすごくおもしろいやり方だと思った。小麦粉(生地)のかたさ、やわらかさにもいろいろあると思った」「どうして油を混ぜるのかな」「こねればこねるほどこしが出て、初めて麺を作って感動した」「ひき伸ばすのに苦労した」「生地をまな板に伸ばして丸めて切るところなんかとても苦労した。麺を細く切るのがあんなに難しいとは思わなかった」「麺を10分ぐらい置いたら縮んだ」「ゆでるとき、あんなに膨らむとは思わなかった」と、市販の乾麺を使う場合よりも、多様な体験・観察・思考をしていることがうかがえる。

示範のとき、小麦粉に卵と油を加えると、「栄養がいっぱいだ」と生徒がいう。「そうね、うどんは小麦粉に塩を加えるだけです、パスタはエネルギーもたんぱく質もたっぷり含まれています。うどんは白色だけど、スパゲティが黄色い理由は何かな？」「卵黄の色」。

小麦粉の膨化調理 パンと包子饅頭の手作り (7〜9限)

男女共学でクラス単位の授業ができるので、一時間を他教科からもらって三時限連続の展開である。パンを発酵させるのに充分時間をかけないとよく膨れない。発酵のための保温は、従来電気ゴタツを使ってきたが、途中の出し入れが多いと温度が下がり発酵が不充分となりがちであった。今年、晴天が続いたので、家用車に新聞紙を敷いて台とし、ボールにたね生地を入れ、ラップをかぶせて放置した。六月中旬の日光はちょうどよい発酵温度となり、パン生地はみごとに膨れた。生徒たちはその膨らみと、生地のならみかさに感動。絵本のパンの形を参考に思い思いの形を作った。天火に入れてからもしだいに膨らみ、色がついて、香ばしいにおいが漂ってくる。焼き上がるまで、生徒たちの喜々とした声で調理室は大にぎわいであった。

包子饅頭は、皮で具を包みこむのが難しい。形はさまざまになる。10班中3班はだんごのようになってしまった。横で

パン生地を何回もこねたりたたいたりしてあるので、包子もつられてこねてしまったのである。失敗が粉の取り扱いの違いをより鮮明にしてくれる。

のちの実習の反省で、これらの失敗を理論的に説明する。パン生地を太陽で暖める理由を「イースト菌は生き物です。私たちの体温は約36℃ですが、イースト菌も暖かくすると、加えた砂糖を栄養にして増殖し活発になり、私たちと同じように呼吸して二酸化炭素を出します。この二酸化炭素が熱膨張して膨れるのです。生き物で力が強いから破れないようにひきの強い強力粉を使います。ペーキング・パウダーは化学物質で、ある時間だけしか二酸化炭素を発生せず力が弱いのでは薄力粉を使います」。ここで、パンが約五千年前に偶然に創り出された歴史と、膨化剤が二酸化炭素を発生させるために人工的に作り出されてきたことを話す。

パン作りの感想では「生地をたたくのがとてもきつかった。でもでき上がりがふんわりだったのでうれしかった。市販のよりもとてもおいしい」「小さくて細かくして置いたのが焼けると形がわからなくなるほどにふくれていた」「熱くて、大変ふくれてふあふあしていた。バターの味や風味がとてもよかった。市販と比べて何というかこくというか粘り気が少しあって、つぶしてもすぐふくらんだ」「家でも作ってみよう」と感激しているものが多い。一方、「味はない。ちよっ

と固い。甘さが足りない」「ずっと立っていたのできつくか
った」というのも少なくない。日本の市販のパンは飯のやわ
らかさに慣れている感覚に合わせるために、水分が多くやわ
らかい。菓子パンから始まったので味が濃厚である。これら
のパンに私たちがすっかり慣らされていることを話した。ま
た、昔、パン作りが各家庭で女性の労働として行われてきた
ことをふり返り、当時の女性の体力の強さを考えたり、近年
機械化・専門化されて、女性の家事労働の負担が少なくなっ
て、家庭外の社会の仕事に従事できるようになってきたこと
も気付かせようとした(テストの設問の一つにした)。

小麦食の歴史(10・11限)

小麦の穂を生徒にわたし、一人一粒ずつ取りはずさせ、中
身までむいて観察。「これ何や?」と穂を見て質問する生徒
も少なくない。小麦が風景の中に入っているも無関心で認
識の外にあったことがよくわかる。米粒とも比較する。「実
と皮がものすごくくっついていいるからなかなかむけなかつ
た」「生粒はとても固く、外皮は中身とくっつけてはがれに
くい。まして一粒はとても小さく持つのも大変だった。中身
がとり出しても完全な状態ではなく、つぶすのにとっても力が
いった」「今は製粉機があるけど、昔の人たちは臼があった
としてもすぐ手のかかった作業だったんだなあ」、米を粉

食に、麦を粉食にしてきた理由は皮をはぐことですぐ気付く。
こんな作業をしたあとに、「人はなぜ小麦を選んだか」(『小
麦粉博物誌』文化出版局、80年)を資料にして、人間と麦の
出会い、栽培植物の開始、麦の食べ方、大麦と小麦、小麦の
粉食の普及と製粉技術の発達について触れていく。

この学習に入るにあたって、生徒に課題「小麦食の移り変
わり」を聞き書きさせた。その内容をまとめて(1)栽培した
小麦を粉にする方法 (2)栽培した小麦の粉と買った小麦粉の
比較 (3)小麦の加工法 (4)自家栽培から買うに換えた理由)
資料とした。原始的な製粉技術として石臼で挽く様式が三〇
年程前までは私たちの地域にあったこと、市販小麦粉は漂白
されていたが消費者運動の成果で無漂白に変わってきたこ
と。(4)の声の「我が家で栽培するより、その時間を他の労働
に当てて収入を得る方が経済的だから」「人手がなくなっ
てきて、小麦より収入の高い作物ができるようになってきた」
などを取り上げて、米と麦を1ha栽培した場合の収入(米価
一一九、〇五八円/60kg、平均9俵/10a、麦価一一、三二
〇円/60kg、平均4.5俵/10a、八五年度分、機械代・農薬代
などの経費を収入の50%で計算)が、月収一〇万円程度にす
ぎず、高卒初任給と同じぐらいであることを算出。農業収入
の低さを考えさせ、兼業化せざるをえなかったわが家の家計
の状況をふり返らせてみた。

小麦の食べ方はうどんやそうめん、だ(ん)ご類から、現在ではパン、クッキー・ケーキなど洋風のものに変わった。

この実態と、生産量・輸入量、自給率、消費量の年次的推移を照らし合わせる。日本産の中力粉で作られる製品の消費量より、輸入した薄力粉や強力粉で作られる製品の消費量が多い。なぜだろう。

わが国の第二次世界大戦後の小麦粉の増加は、栄養改善という主旨で小麦食品の普及が精力的に行なわれてきた結果であり、学校給食の「パン、牛乳」というパターンもその一環で始まった(資料『アメリカの小麦戦略』家の光協会、'79年)。

生徒の理解では「アメリカ人は先をみこしていてすばらしい戦略だ」と思うが、このために日本の農民が減反をしなくてはいけないかと思うと、これからパン食が増えていくにつれ、日本の農家の人は減反をふやしていかなければいけないかと思うと気の毒です。「アメリカの資本主義国である知恵に、日本はすいこまれたような形にあるのだ」と述べる。食べる行為の社会科学的認識が少しは深まったように思われる。

(熊本県立甲佐高等学校)



編集室からあなたに

12月号、1月号にぜひご投稿を

今年国際平和年、でも何とさみしいことでしょう。国際婦人年、国際児童年、国際障害者年……に比べて、まるで盛り上がりません。本号のアンテナ欄に明確に現れている危機的状況に対して、私たちは、あまりにもものん気すぎないでしょうか。折しも、8月24日、戦艦ニュージャージー、巡洋艦ロングビーチ、駆逐艦メリルの三艦が、一挙に日本の三つの港に入りました。

核兵器なしを明言しない限り、同盟国の艦船でも寄港させないと強く打ち出したニュージーランドに比し、日本政府のとった姿勢は？ また、生活のために“歓迎”の旗で迎えた港の人たちの意識は？ ここを問わずに、“自分らしさ”にこだわっても、自分の存在が根こそぎ奪われることを、強く語り合いたいです。

We12月号は「平和一今年を顧みる」

新春1月号は「女性一世界を変え得るか」

です。一年を締めくくり、新しい年を迎えるのにふさわしいテーマだと自負しています。あなたの思いは、そのいずれにも深いことでしょう。あなたのご発言を待っています。

●原稿字数 「発言」欄には2000字前後

●メ切り 12月号は9月末日

1月号は10月10日

●「発言」以外でも、「わたくしからあなたに」「Weになんでも言おうなんでも聞こう」にも、お気軽にご意見をお寄せ下さい。

'86夏季フォーラムは、冬増刊号として編集してお届けします。ご期待下さい。今年出した3冊の単行本もよろしく！

シリーズ2 性差——女と男の違いはどこにあるのか？

(3) 脳に性差はあるか

女と男の関係を考える会

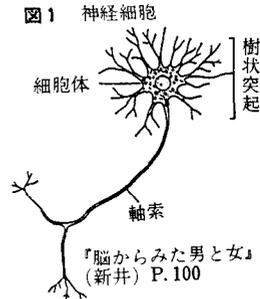
はじめに

人間の脳の性分化がおこるのは、胎児期の第20週以降だと考えられており、脳の性分化をひき起こす鍵になるのは、男性ホルモン（アンドロゲン）である。この時期までに脳がアンドロゲンにさらされることによって男性の脳ができ、この時期にアンドロゲンがないと女性の脳ができあがっていくという。

まず私たちの脳はいったいどのようなものかを見たい。

人間の脳は150億の神経細胞の森である。その軸索とよぶ枝をつぎたしていくと、月までとどいてもどってくる。クルミのようにしわがよっていて、ピンク系のグレイ。カスタード状でひと握りにまとまったふたつの組織である。

からだは本来つねに器である。この容器には、先に述べたように



の解明をはじめている。

メス型の脳とオス型の脳

家庭一般の「保育」領域の導入時の感想で、ある女子生徒は次のように述べている。

「私は男女差というのは絶対あると思う。必ずではないけれど一般的に女の人は家の中の仕事をやり、男の人は外で働くのが普通だけれど、それはそれで自分に適当な仕事を分担するだけで、別にどちらが劣っているというのではないし、向いている役割をこなすだけだから女が劣っているわけではない。だけど体力は男の方が上だし、こまごましたことは女の方が上手とか、違いは絶対だから認めるべきだ。その性的な違いの上でさらに自分の得意なことを生かして個人としてやりたい仕事などがあれば、お互いに協力しあって暮らせたらいい結婚だと思う」。

誕生前から性別によって違うように作られている。では脳もからだのように、オス型・メス型があるとしたら？ 誕生後、オス型かメス型の能力、技能、衝動、好き嫌いが発達するようにできているのだろうか？ 人間の脳の科学は少しずつその辺り

女と男の脳力差として、女はことばの発達、手の器用さ、失語症・吃音症・自閉症が少ない等、男は計算力・抽象力・空間の左右の決定等に秀れている等の統計資料もある。

しかしながら「違いは絶対だ」といわれてしまうと、「本当にそうだろうか」と考えてしまう。メス型の脳とオス型の脳というようにはつきりとした差があるのかどうかをみていきたい。

男女の脳の構造と外観は全く同じである。しかし「文化より根深そうな性差」の存在は、脳の機能上・形態上の性差の研究の中で少しずつ見つけられてきている。

脳の機能上の性差

脳の性分化の結果、はっきりして現れる差は、性周期の有無と性行動・パターン性の性差である。

ヒトの場合、性周期は月経周期に相当する。月経は子宮の内膜という部分が周期的に増殖してはそれが出血を伴ってはがれ落ちて出てくるもので、子宮のない男性にないのはあたり前と思うかもしれない。しかし、女性の月経周期を回転させている原動力となっているのは、脳下垂体の前葉から分泌されるゴナドトロピン（生殖腺刺激ホルモン）であり、このホルモンが約28日周期で分泌され、それが卵巣に働き周期的に排卵が起こる。男性でも脳下垂体前葉からゴナドトロピンが分泌されているが、ただだらと出ていて周期性は認められ

ず、精巣の働きには卵巣のような激しい変化はみられず、男性には性周期はない。

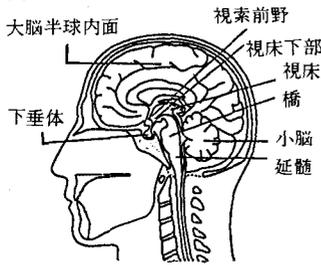
脳下垂体は自分自身ではホルモンの分泌調節を行う能力はなく、実際には脳の指令で動いている。したがって脳下垂体へゴナドトロピンを周期的に分泌するように指令を出す脳と出さない脳という点で男女差があるわけだ。

脳の性分化のプロセスは

- 1、脳のどの部位でおきるか？
- 2、アンドロゲンは脳に対してどのように作用するか？
- 3、脳はアンドロゲンによってどのように変化するか？

この三つの間に完璧に答えられるような直接的な実験証明は少ない。

図2 人間の脳半球断面図



『男の脳と女の脳』（川上） P. 83

このことに関してアメリカのゴースキーらは次のような仮説をたてた。性周期をもたらずゴナドトロピンの分泌は、周期的分泌中枢（視索前野と前部視床下部にある）と、恒常性分泌中枢（視床下部内側底部にある）によって制御されている。さらに今日では、アンドロゲンの脳内とこみ部位は、ゴースキーらのいう視索前野や前視床下部

だけでなく、大脳辺縁系の各部位でもとり込まれていることがわかってきた。これは情緒中核と呼ばれ、アンドロゲンの分泌が充分でない時、体は男型になってきているが最後に男型の脳が形成されないことがおこり得るといふ。

性行動のパターンの性差については、ラットやマウスについて種々の実験が試みられ、やはり臨界期のアンドロゲンに依存していることがわかっていふ。

ラットやマウスのような動物では雄の「マウント行動」(乗駕行動)に反応して、雌は反射的に脊柱を彎曲させる「ロードシス行動」を見せるがこれを観察することで性行動の雌雄差をみるができる。すなわち脳の性分化の臨界期にメスにテストステロンを投与すると、雄の「マウント行動」を示すことで明らかにされている。

しかしヒトの場合の行動の男女差の中には作られた行動の性差も含まれる。これは、男らしい行動、女らしい行動の学習を強制されることによって生後以後からつけ加わったもので、したがって生物学的な脳の性分化の問題と社会的な性分化に分けて考えなければならぬ。ラットやマウスの雄の「マウント行動」雌の「ロードシス行動」のように明確な性行動パターン性の差を、人間では実験的に証明されにくいのはこうした事情による。

脳の形態上の性差

ラットの脳では現在のところ光学顕微鏡で見て雌雄差が認められる個所がいくつか見つかっている。その一つは内側視索前野で、神経細胞群の塊が雄の方が大きく、雌の約五倍を示している。ゴースキーらはこの神経細胞群を、内側視索前野の他の部分と区別する目的で、「性的二型核」と命名した。ラットの実験では、メスにテストステロンを投与すると、先の「マウント行動」をみせるだけでなく、神経細胞群の数を増加させ、その結果、雌の性的二型核のサイズを大きくするという。この性的二型核が雄の性行動の調節に関与しているのではないかと考えられている。

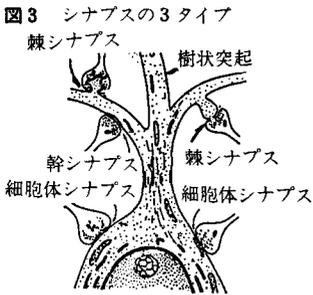


図3 シナプスの3タイプ (新井) P. 104

『脳からみた男と女』(新井) P. 104
 視床下部の弓状核を調べると、棘シナプスが雄ラットに比べて雌ラットに有意に多く、逆に細胞体シナプスは雄ラットに多く、雌ラットに少ないことを見出した。一般に棘シナプスは興奮性シナプス

とされ、細胞体シナプスは抑制性であると考えられているので、弓状核では棘シナプスの多い雌の方が入力情報によって刺激されやすく、逆に雄の方が細胞体シナプスが多いので興奮しにくいと考えられる。この部分は下垂体のゴナドトロピンの分泌調節に関係しているので、雌雄で興奮性に差があるとすれば、非常に興味深い。

またさらに、脳梁というふたつの半球の情報を仲立ちする細長い線維の束にも性差が認められている。大ざっぱにいえば、左半球は理性の脳と呼ばれ、分析的で、言語、計算能力、工夫、論理が専門。右半球は感情の脳と呼ばれ、全体的で、文学、音楽、視覚作業と空間の位置関係の知覚が専門とされている。視覚と空間情報を両半球に媒介する脳梁は、女性の方が大きい。このことから、視覚・空間認知に関する限り、男は右半球のみを使うのに対して、女は両半球を使うと仮定される。女は男より両半球のコミュニケーションに優れているという仮説は、以下のような実験結果と符合して行く。男性は一方の半球によるふたつの認知作業——運転しながら道を探す等（どちらも右半球）を同時に行うことは得意である。一方、女性は両半球の協力を要するひとつの作業——音声や表現、身のこなしなどと、言語と視覚の手がかりから個人を査定することなどにたけているというものである。

このように、脳の形態上の性差から男女の特性を証明しようとして仮説をたてている研究者もいる。

しかしここで注意しなければならないのは、雌雄差のみられる部分が、脳全体からみるとごくわずかな部分にすぎないことである。脳内では雌雄で形態上同じ部分の方がはるかに多い。だから雌雄の差があっても、それが機能の差になって表れてくるのはごく限られたものになるのは当然である。

おわりに

機能上の性差は、性周期の有無と行動パターンの性差に集約され、形態上の性差は、性的同種二型核の存在や神経回路の配線の性差にみとめられる。

脳におけるごくわずかな性差が、生まれてから社会の中で学習によってどのように修飾されるのだろうか？

出生時の性の判別は外生殖器の特徴という生物学的規準によって行われるにもかかわらず、それ以後はすべて社会的・文化的な規準によって置き換えられてしまう。したがって、出生前につくられた脳の性差からくる行動傾向の差異以外にも、社会的につくられた行動様式のちがいがたくさん加わってくることに注意しなければならない。（村上昌子）

参考文献 『男の脳と女の脳』川上正澄、紀国屋書店

『脳からみた男と女』新井康允、講談社

『セックス&ブレイン』ジョー・ダーデン・スミス他、工作舎

教育のなかの

心理学



小沢 牧子

登校拒否 (3)

梅雨あけも近いある日、「東京シユレー」一周年を祝う会が都内でひらかれた。もと小学校教師の奥地圭子さんによって、「登校拒否」の子どもたちが元気にすこし、仲間と出合えるようにという思いで始められた、小さな「学びとくらしの場」である。子どもたちのはじけるような笑顔にまじって、たくさんの父母ののびやかな姿があった。会の終りに、ひとりのお父さんがマイクを手にとられた。

「私たち親が、心理学者たちに心から言いたいひとことはただひとつ、登校拒否の子の親は問題のある親であるというきめつけをやめてほしいということです。ここにいますべての

親たちが、専門家たちのその眼ざしと言葉にどれだけ苦しみ傷つき、自分を責めつづけたことか。学校に都合のわるい子どもの問題を親の人格や生き方に還元することは間違っている。専門家は考え直してほしい……」。正確な記憶ではないが、その言葉はかつてそのような専門家のひとりであった私の胸に刺さった。

問題の親、問題の子とは何か

「登校拒否」状態に陥った子どもの親は、「心の病い」をもつ子の親として、相談機関を訪れる成りゆきになる場合がほとんどである。学校や教育委員会から管轄区の教育相談機関でカウンセリングを受けることもあれば、そこからより大規模な相談機関や精神科医へまわされる場合もある。「過保護」「拒否感情」「母子密着」「弱い父親像」「家族間の緊張関係」等々の解釈的なまなざしが親たちにふりかかると、「不適応の子ども」を育てた親、至らざる親というまなざしは、根底に差別性をはらむ。専門家の笑顔はやさしく、声音は受容的であり、差別性を専門家当人は全く自覚していなくとも、カウンセリングを受ける親の側は、「問題の親」とみなされていることそのこと自体にまつわる差別性を肌で受けとめる。そして子どももまた同様である。差別性というものは、される側によってしか、最初は気づかれない。

「問題行動」とは何なのだろう。教育心理学の授業の小レポ

トで、大学生たちは書く。「小学校五年生のとき、担任の先生からなぜ友だちの輪の中に入っていけないのかと注意され、とても困った記憶がある。問題児概念でいえば、孤立児ということになるのだろうが、他の子どもが遊んでいるのを見ているほうが楽しい子、ひとりであるのが好きな子、といろいろある。先生は好意だったのかもしれないが、無理やり輪の中へ入って遊ぶように配慮され、迷惑以外の何ものでもなかった。子どもは発達課題という枠の中へ押しこめられる。学校へ毎日行かねばならぬということもそうだ。私はこの社会が舞台のセットのように思えてならない。あてがわれた役割と違ったことをすると、問題行動といわれるのだ」。

「今、私は『特殊学級』の子どもの遊び相手のアルバイトをしているが、担任の先生が『今日は指示がよく通り、いい子でした』などと私に言うときいつも疑問に思う。それは教師にとつてのいい子にすぎず、その子にとつて今日がいい日だったかどうかという眼がぬけおちているからだ」。

今を生きることを許されない子どもたち

子どもはまことに柔軟な生きものだ。大人の側からの相当負担のかかる要求にも、なんとか応えようとする。そしてやっつけのける。しかし大人がそのことに安住してあまりに過酷で無礼な行為を子どもに対して重ねると、弱い立場にある子どももついに黙って従うわけにはゆかなくなり、拒否反応を

おこす。登校拒否は、学校が人の住める場所ではなくなってきたということへの、子どもからの警告である。

東京シユーレにいる伸子ちゃんはこう書いている。「私は今、毎日がとても楽しい。シユーレに通い出してから、朝起きるのが気持ち良く思えてきた。前は『起きてたら死んでほしい』、なんて考えたけど、今は生きてるって本当にいいなと思える。…今の私は、あせらずゆっくりしたい、ただそれだけ。ずつとあせって、一人で悩んだりして来たから。先の事ばかり考えて、今が見えなくなるのはいやだから、今は楽しく今だけ見つめて、がんばりたい。そんな気持ち」。

今をこそ生きる子どもたちが、先の事ばかりのためにあせられる学校の現状を、伸子ちゃんの言葉は伝えている。また、長年登校拒否で親子ともに苦しんできた篠原史さんは、その頃を思いおこして「教室の中における自分自身というのが完全に否定され、牢屋に閉じこめられているという閉鎖感を感じてたんじゃないか」（臨床心理学研究24巻1号）と語っている。

親ではなく、学校こそが問題であるという視点で親たちがどう生きてゆくか、そのことを次回に考え続けてみたい。

教室の窓	(16) センセーをヒョーカする
	植垣一彦

一学期ももうすぐで終わりというある日、「先生をつうしんぼしちやおう！」てな共同謀議が持ち上がった。

20円ずつ出し合つてクラスで購読している毎日小学生新聞に、そんな反キョーイクの欄があつて、それに触発されてのことらしい。

「センセーをヒョーカするとは何ごとだ！」とは言わなかつたけれど、本當言うと、困つちやつた。ヤツパ、どんなヒョーカが下されるか、内心不安なもの。

学級会議長の森さんと佐分利くん、それに、書記の根岸さんが妙にウキウキ気分て黒板の前に。さっそくワイワ

イ始まつた。総勢44名の裁定、冷や汗かきながら、つつしんでお受け致しますよう。

〔先生のひょうか・その①〕

「いっしょに遊ぶか」・よく12人、ふつう27人、努力が必要15人

誘われてもおつくうで体よく断つたり、逃げ出したり。あるいは、元氣はつらつた教育実習生を、職員室の窓からお茶を片手に眺めていたり。そんな近頃の自分をよく知つているので、厳しいヒョーカが下つて当然と思つて

いたら、意外に、甘いお点をもらつちやつたみたい。

「じょうだんが通じるか」・よく25人、ふつう14人、努力が必要5人
これは、おおむね、うん、妥当な線ではなかるうか。納得。

「授業はおもしろいか」・よく44人、ふつう0人、努力が必要0人

先程まで勢いよく「ホワイ！」と手を挙げていた「努力が必要」派の一群までも、「よく」の方に吸収されちやつて、こそばゆい感じがしないまでもないけれど、でも、「おもしろい」と感じ取つてもらつて、とてもうれしい。ますます、自前の「おもしろまじめ」路線でがんばらなくつちや。と思わせる「教育的配慮」じゃ、まさかあるまい、な。

「みんなの失敗をみとめるか」・よく30人、ふつう14人、努力が必要0人

黒板の上の壁には、「まちがいが勉強のはじまり」という学級の合言葉が、赤のラシヤ紙に大書して掲げてあ

る。失敗を恐れず、まちがいを笑わず、認め合いながら自分やクラスを高めてゆこう、というわけである。ごく当たり前のこの理念は、子ども達にとつても、私にとつても、確実に緊張をほぐしてくれる。

「フアイトがあるか」・よく 30人、ふつう 9人、努力が必要 5人

正直言つて、私の「フアイト」にはムラがある。だから、「よく 30人」はこれまた、割り引かねば。どうにも乗れない「教材」や「單元」があつて、そんな所は、ほどよくすませたりもする。「フアイト」の湧こうはずもない。連中はどうやら、この辺を見落としたヒョーカをしているとしか思えない。

〔先生のひょうか・その②〕

「すくべ度」 2 すすまじい

自分ではそんなに凄じいとも思わないのだけれど。それとも、凄じい印象を与えた部分だけを限定的に、かつ主

観的に切り取つてきてヒョーカしてるのかも知れない。何か恨みでもあるのかな。まあイイや。

「運動しんけい度」 2 すすまじい

これはおそらく、一番最初の体育の時間に、体育館でハンドスプリングを披露し、拍手喝采を浴びたのが効を奏したのだろう。これ、私の「出の時の顔」のおはこなんだけど、実はあの時、着地の瞬間目の前に光がビビビッと走り、星がしばらくチカチカ舞つていて、大変だったのだ。つまり実力以上のものを見せたわけで、いつまでやるか、あとは下降線。

「おこり度」 2 ふうう

怒る時は、そりゃあ、コブシを震わせて怒る。でも、平生ヘラヘラ。だから足して2で割つて「ふうう」？

「ゆかい度」 2 すすまじい

子ども達の前では、確かに無防備。だって、利害関係もしがらみもないものだ。でもねえ、職員室じゃあ、それも

困難。つまり、相手にも左右されるのよ。信心が足りないのかなあ。

「かっこよさ度」 2 ぜんぜん

「外見よりも中身」つて、あれだけ言つてるのに、先生つてボクのこと本当にはわかつてくれてない！ あつ、間違えちゃつた、子ども達つてオレのことわかつてない！

「みんなへのサービス度」 2 すすまじい

なるほど、「すすまじい」か。でも、少しばかりこれは警戒を要す。折角の「サービス」なんだぞ、文句言わずに受ける！ てな具合に、教師つてどこまでものぼり詰めちゃう習癖を、いわば制度的に保証されている存在なのだから。くれぐれも自戒。

待てヨ。点数つけて、抗弁や釈明を許さぬ「通信簿」をつけて……これ、「サービス」の押し売りじゃないかしらん？



仲野 暢子

和平ちゃんはおへそだ

和平ちゃんとの付き合いは二年目になる。入学式の日にはさすがに泣く場面もなかったけれど、二日目からは「和平くんが泣いてマッス」。廊下から、洗面所から知らせがくる。初めは「スワツ、いじめっ!」と特急便で直行した。その泣き声の大きき! おまけに所構わずぶっ倒れてバタバタと「お腹がイタイヨウ」「足をケットバサレて立てない」。そしてたいていは五分位でケロッとして、授業中鼻歌を歌ったりしているけど、時に腰のあたりに靴跡がついていたりする。いじめの一種には違いない。その都度調べてみると、「すぐ泣くから、面白いから……」行きずり無造作にちよっと手や足を出している。「人をオモチャにするとは何事だ!」私は一人ずつ取っ捕まえて責めた。件数は減ったけど、なくな

らない。そのうち「和平はいい気になって人にハナクソついたり、女子に投げキッスしたり……」と他の子からの苦情が来る。給食中大声がするから、相手を叱りに行くと、自分でシュウマイのグリーンピースを鼻の穴にいれたり……。そして気を引くためにやった演技をハヤシ立てられると、自分でも取捨つかなくなるようだ。同じ班の子にしてみれば「一緒になんか食っちゃられねエヨ」という気にもなるだろう。班長だつて子どもんだから、あまり負担は……。

おまけにこの子はアタマイイのだ。知能検査をすれば、だんぜんトップだし、数学なんか百点。そして「アイツのアタマジヤムリかな」などとニクマレ口を利いたりするのに、体育の時間にはすぐ泣くし消えるし。とにかく暴力や危険を防ぐ手だてを取って置いて、家庭と連絡をとった。「前からあんなんです。毎日嫌がらずに登校しますから、お手数でしゅうけど、気にしないでください」と言われて、為すすべもなかった一年だった。

今年の組分けで男性担任みんなに逃げられて、自信ないままなんとか……と受け取った。本人が「下級生が入って来る」と楽しみにしていたし、何日かは泣き声も御注進もなかったの、ヒョットして……? と期待したとたんにまた再開。でも少し変わった。なにしろかが生まれて初めて取っ組み合いの喧嘩をしたのだから! 相手は気にし屋で、すこ

ぶる気のいいナツパ君。上手にあしらひながら、時々チョンとお尻を蹴つとばしたりするので「ギヤアア、イタイヨウ」と和平は倒れる。でもカウントで、立ったからエライ!

移動教室のキャンブプファイヤーの出し物が一つの節目だった。「和平ちゃんがいじめられて、パーマンを呼ぶと、男女十人のパーマンが現れ……」という筋で、かれも「なんてったってアイドル」ということで納得。本番では愛敬振りまいて、それこそウインクに投げキッスという調子でウケた。その頃から給食の時のトラブルが少し減ってくる。かれは孤独が嫌いだから、突っつかれながらも、一緒にいたい。何回か班替えしたり、自分でも居場所を開拓させた。兄貴分が次々代わり、お互いに苦労した。

ハイライトは運動会の学級対抗団体競技「大縄跳び」だった。四十五人一度には無理なので男女に分けたが、とにかく全員揃って跳んだ回数を競うわけだから、狭い運動場を放課後分け合い、屋上で朝練に夢中になる。「センセーイ、今日は四十回越したア」「オツやりましたネ! 和平も入ってる?」「アイツふてくされて帰っちゃまいんの」。見てるとかれはすぐ疲れて足が上がらなくなる。それで引っ掛かると、だれも何も言わないうちからその場に寝転んでヒイヒイ、バタバタやっている。かれの気持ちもわかるけど……。

ある日、いつも優しい兄貴分のせいちゃんが血相変えて怒

った。「おいつ、やる気あんのか? おまえなア、へたなのは仕方ねエけどよオ、なんで真剣に挑戦しねえんだよオ」。

和平は声も出ない程驚いて、その日は黙って跳んだ。爪先も膝のバネも使っていないので、ドタンドタンと物すごい音がる。何度も一人で練習させると、帰りに「オレみんなにメイワク掛けないように、家で縄跳びの練習やる」。みんながワーンと歓声を上げたのはいうまでもない。「今日は和平入れて二十回いったの」「アイツ朝練にも遅れないで来たし……もうひと息だ」。かれを入れなければ六十回でも跳べる。それじゃ意味ない。家へも連絡して手伝わしてもらおう頼む。

当日の成績は七クラス中六位。でも、和平ちゃんを入れて四十三回も跳べた。男子も女子もそのことが言いたい感動だった。「なにかかれを中心にクラス全体が成長していく感じがする。もしかしておへソみたいな存在かも……」と班ノートにあった。本人も体を動かしてみる気になった。

「ぼくは水泳教室へ初めて行った。水に顔が浸けられるようになったので、二十五米泳げてしまった」。夏休みの直前の班ノートにこう書いてきた。「よおし、ワヘイ、水泳大会の二十五米やつてみるか?」運動委員が呼ぶと「うーんと、そのオ……やる。オレもタノマレたからには……」この大型新人は夏休み中週三回S Mクラブへ通い、トククンに励んでいる。



Weに なんでも 言おう なんでも 聞こう

◆七月号、美しい表紙です。

巻頭言、矢崎藍さんの「オ氣ノ毒ニ、デモ、ヨゴザンシタ……」には、微笑が浮かんでしまいました。アンケートは重いことがらを含んでいました。はじめの方の表を、もう少しグラフ化してよりわかりやすくできる部分があるかもしれない、と思ったりしながら拝見しました。

春の公開ゼミの武田さんはじめ四人の方々のお書きになったのは、ゼミのふんいきがうかがえてよかったです。

村田さんの「おしきせ、おそろいはきらい」中学・磯部さんの「やってみなくてはわからない」、高校・立山さんの「味覚と栄養を考える」、みんな興味深く拝見しました。新しい家庭科をかかげる、ということの説明を人にしようとするとき、わたしはWeの方々が思

っていることのうち、どれだけを人に言っているだろうと思いますが、We七月号は、この紙面で、その答えを表明しています。でも、それは断片的だから、営々とつづげなくてはいけないのです。

研究ノート「性」の性差も、わたしもいつも考えることです。「性差のモデルが示されることによって、私たちが生き易くなっている面がある」というところを、人が頭に入れておいて、それが個々にどうあらわれた場合、女の人、男の人にとって、どう作用してくるのか、を考える。そのことを考えました。

小沢さんの「登校拒否」、「学校は絶対である、という神話性がくずれてきた」ととらえ、そこから、生の多面性の可能性を考える。そうするなら、ただちに、いま言われている禁止の規制づくめの学校の無理さに教育者は気がつくでしようと思います。そこから先が、むずかしいです。

教室の窓のチャルメラはいい。「♪パラリラロ……」がいい。下田小学校ですから、わたしは、やっぱり、このへん冬にチャルメラ来たっけ、などと思いきい読んでいます。

「ノースモーキング世代作り」もいいです。期待いたします。禁煙おばさん、とご自分で

おっしゃっているけど「……その間にもどんな成長して、頼もしい同志に育ってくれるのが、親愛なるわが生徒諸君」とおっしゃっているのですから、ただのおばさんではなく、すてきな先生です。

堤さんの年金法の話は、わたしも気づきませんでした。だれも気づかなかったのがほんとうでしょう。法律とは、そんなふうに関連してそんな結果を出しているのかと、びっくりします。そういうことを知らせてくださっています。

教科書検定の話も具体的です。知りたいことです。ひとつひとつ読みました。

武田さんの「読書つれづれ草」、若い人の心を書いて、美しい文です。

で、わたしの詩は、詩というものが、こういった本の中に二ページはさまることの無理さと、それでもなさにについて、また考えます。

詩の意味について、現代に詩が成立するかどうかにについて、詩は売れないということの正当性について、言葉の力のどの程度のあるなしについて、わたしはそのことをずうっと考えています。

(横浜・羽生慎子)

◆村田尚子さんの、みんな各々作りたいものを作る。子どもたちがどんどん作っていく。

ウーン。私の中の教えたがり、管理したがる気持ちをもつてきらないと、そういうのって、(教師にとつて) 耐えられない授業だと思う。

(名古屋・羽田恵子)

◆七月号の森本真樹子さんの文は、まさに今の状況をついていると思います。性の教育は何か秘めごとの域から脱しえない部分があり、上すべりのような内容になりがちです。私自身・結婚していないため、言葉に出し辛いところがあります。どうしたらいいか。でも、授業では、赤裸々に言ってしまったています。これでいいのでしょうか？

(名古屋・田中洋美)

◆「いま、中学校で」の禁煙教育、毎回(といっても、まだ二回ですが) 楽しみにしているたのに、お休みになってしまつて、ほんとにガツカリ。秋の結審までといわず、どうぞ続けて下さい。文部省も指導手引を出しましたし、各国の禁煙・嫌煙運動のニュースは、新聞で報道されています。禁煙・嫌煙は社会の一つの流れになってきています。それは世界の常識です。日本ではまだ非常識ですが。

家庭科の男女必修も同じでした(なんてすてきな過去形よ!! 小さな波は大きなうねりになった!) 10月号、11月号期待してます。

「いま中学校で」は、Weならではの禁煙教育のお話だったのですから、むしろ秋の結審まで続けて下さいと、お願いしたいです!

(東京・内山裕子)

◆「季節のお弁当」、Weに料理記事は合わないのでは、と思つていたのですが、内容が他の料理雑誌とは違つていて、これなら私もやれるなあと実際にやりました。

肉弁当、しそ弁当など、高い材料も香辛料もそれほど使つていないので、それに時間もかからないし、子供が夏休みの間は、学童へお弁当を持つていくので、おおいに参考にあります。その頁を切りとつて、厚紙に貼つて活用します。

(三鷹・藤原良子)

◆夏増刊号は圧巻。時には三歳の子供にも歴史があるなあと感じる事があつたので、皆様の人生を読ませていただき、胸にずっしり来しました。

アンケートつてむずかしそうですね。一つ感じたことは、日本では、学校に入つたら、その後は「いくつ?」ときかれるより「何年生?」ときかれますでしょ。中・高校生に性を考えさせようとしたら、大人の側は「彼らは、自分は、いくつ?」と考えるとところから出発すべきでないでしょうか。たつたそれだ

けで、大人の方も裸になつて、かまえることなく、対に話せる立場に立てるような気がします。

例えば、十五歳の女の子が二十五歳の青年について好意を持ち、セックスのことを考える。これは普通なのに、女の子が「生徒」であったり、青年が教師であつたりすると「問題」になつてしまふのですよね。

また、六〇歳の校長さんも、思春期の生徒も、性に關しては「現役」だつてこと、棚に上げてはいけないではありませんか?

半田さんが「性教育」は、彼らの頭上を素通りしているのではないか」というのは、その通りですね、と思ひました。原因は、こんなところにあるのではないのでしょうか。

(ニューヨーク・大西麻里子)

◆Weの会についての太西さんの直言。おもしろく拝見しました。あんな調子で、カンカンガクガク話し合つたら、活気のある会ができるかな、と思ひました。(東京・川名はつ子)

◆八・九月号の発言「先生は学区に住めないか」。久しぶりに、動機も闘い方も母親らしくすがすがしい内容の文章です。目に見えない何か大きなものを、一番見ているのは子ども達ではないでしょうか。(東京・高橋雅子)

地下室



武田 秀夫

七月の初め、期末試験をおえてちよつとほつとしたときに、中学二年生の女の子たちが「先生、なにカワイイお話」というのでそれではと、ポーの「黒猫」をコピーして読みました。

ぼくはね、子どもころ池袋に住んでいたことがあつてね、夏休みともなれば立教大学のプールに毎日のように泳ぎにいっていたのだが、そのプールの向い側に鬱蒼たる木立にかこまれた洋館があつて、それが江戸川乱歩の家だとある日友達が教えてくれたんだよ。「怪人二十面相」などを愛読していたから乱歩の名前はよく知っていたんだけど、それだけでなく、たしか「屋根裏の散歩者」という作品だったと思うが、屋根裏を伝つて夜な夜な他人の生活をのぞきこむといった、少年にとつてはひどく病的な印象のする大人むきの乱歩もそのころすでに読んでいたらしく、ああ、あれが江戸川乱歩の家かと、なおさらその洋館が幽霊でも出そうな不気味な感じにみえたのをよく覚えてる。

そのころは池袋といつたつて焼跡ばかりでね、その焼跡に夏草が

生い茂りバツタが飛ぶ日盛りのそんな道を、これからはいるプールの水の最初の冷たさを思つてもう心臓のあたりをきゅつとさせ胸をどきどきさせながら弟や友達とたどつた、そんな子どもころの自分が目にはうかぶようだ。そのころのプールの水って、いまよりずつと冷たくつて、いかにも水という感じがしたように思うんだが、考えてみれば不思議だねえ、同じ水のはずなのに。

とにかくそういう夏の強い日射しを全部吸いこんでいつそう黒々としずまった木立の中のは少し荒廃した感じの洋館の、そんな暑い夏の空気の中だからこそいつそうひやつと見た目に思わせる雲囲気を、子どもころのぼくはずいぶん鋭敏に感じとつていたんだなあ、そんなことを妙にこのごろのぼくは思い出すことが多いんだが、その江戸川乱歩というペンネームが、ああ、知っている人もいるようだね、これから読む「黒猫」の作者、エドガー・アラン・ポーになんかものなんだ。

そんな昔話をちよつとして、私は偕成社文庫版谷崎精二訳「黒猫」の最初のプリントを、一枚子どもたちに配りました。

「いまからのべる、狂暴でしかも単純な物語が、信じてもらえると、わたしは期待しないし願ひもしない。自分の五官でさえ信じない事件を、世人に信じてもらおうと思うのは、狂気のさたである。だがわたしは気がくるつていのではないし、夢を見ているのでもない。わたしは明日死ぬ身だ。きょうのうちに心の重荷をおろしておきたいのだ。」

おさないときからやさしいなさけぶかい性質でしられていた「わたし」は、おとなになつてからもやさしい妻といろいろな動物を飼

う。中でもブルートー（閻魔）と名づけた黒猫をことのほかかわいがっていたのだが、やがて飲酒という悪魔にみいられて、ウサギやサルや犬を容赦なくいじめるようになる。それでもブルートーだけはいじめないやさしさをまだもっていたのに、「わたし」の病気はしだいに重くなって――。

「いったいこの人はなにをしないでかしたんだろうね、あす死ぬ身だなんて。死ぬ前に、心の重荷をおろしたいがために、『狂暴でしかも単純な物語』をこれからしようというわけだが、いったいどんな話なんだろうね」と気をもたせながら七人ほどの子どもたちに二枚目のプリントを配る。いっぺんに全部はくばらない。名づけて「紙芝居方式」。

中学校の国語の教員をはじめてしばらくたったころ、教科書をくどくどと授業するのにたえられなくて、私は、ヘッセの「少年時代」や壺井栄の「あたたかい右の手」といった作品をガリ版で刷り、よい所で切り離して少しずつ子どもたちにくばりながらすすめる授業をはじめました。物語がすすむにつれ、子どもたちの目の色が変わってきました。「先生、はやく配ってよ」「慈雨ちゃん、どうなってますの」と先を読みたがるのを、まだまだだめだよ、ぼくは紙芝居屋のおじさんだからね、ちゃんとみんなが水飴を買うまで次の配らないんだとじらしつつ授業をしたのですが、その日、ふと、ひさしぶりにその手をつかってみようと思っただけでした。

子どものころ、敗戦後まもなくの池袋のあたりでは、毎日自転車をひいて露地の入口にやってくる紙芝居が私たちの大きな楽しみの一つでした。貧乏だった私などは紙芝居屋が売る水飴や味のついた昆布やらを買えなくて、少し遠まきに仲間たちと始まるのを待ち

ます。じろろとこちらを見てなかなか始めようとしなない紙芝居屋の目をさけて、なんとなく仲間どうしとりつろつた会話をしながらうしろめたさをまぎらしたあの切なさ。なかには「お金つかわないう子は見ちゃだめだよ」とか、「お菓子買った子だけ前においで」などと残酷なことを言う親爺もいたが、とにかくそうしたセレモニーがおわって紙芝居が始まってしまえばこっちのもの。そろそろと近づいて、いつかその世界にひきこまれてしまう。

ああ、あの黄金バットの高笑い。紙芝居屋をはじめはダルな調子で語り出しながら、食い入るようにみている子どもたちの姿にいつのまにか感応してしまふのか、やがて気持ちよさそうに高笑いをやりはじめ。宙にひびきわたる黄金バットの高笑いと地下室の暗闇にひびく怪人二十面相の忍び笑いほど子どもの私をぞくぞくさせたものはない。

――配られた二枚目のプリントの四分の一をしめる黒猫の絵の、斜めにこちらをみつめるその目に、子どもたちは、はっと息をとめます。中に一人、「カワユイ！」と叫んだ女の子もいましたが、もちろん彼女は自分でそのことばを刈り取る運命にあります。

「ある夜、いきつけの酒場からひどく酔って帰宅すると、ブルートーがわたしのまえをさけていったような気がした。つかまえると、わたしのはげしさにびっくりしたブルートーは、歯でわたしの手をすこしかんだ。たちまち悪魔のようないきどおりを感じて、わたしはわれをわすれた。」

チョッキのポケットからナイフをとりだし、猫ののどくびをとらえ、目の穴から目玉を一つ、「わたし」は平然とえぐりとる。

(つづく)



吉田和子

ムラの共同浴場で、産み月の近づいた友人に会った。まだ少女の面影を残す年若い彼女は、昨年に続いて二度目の出産を迎えようとしている。年子でさぞかし大変だろうと、励ましの声をかけた。「二・三年はてんてこ舞いやろけど、頑張らなあかん」と。隣で身体を流していたおばあさんが話に割り込んで、「若いうちに、ぎょうさん産んどきや、子は宝やで」と言う。なるほどそうだ二人で耳を傾けた。「わても、六人子を産んで、四人死んで、二人残ってるけど、死んだ子も達者な子も、どの子もいらん子ないで、しっかり育てたりや」。ウンとうなずいた彼女の目は、ふくらんだお腹の上に注がれている。

かつて、このムラの親達は、子を育てる為に苦心惨憺した。飢えた子の腹を満たす為に、なりふりかまわず働いた。昼夜ぶつとおしで働いても、満足な暮らしはたたなかつた。そんな中で

も、隣近所の子が腹すかしていると、乏しい食卓を分け与えた。我が子だけではなく、ムラの子は大切にされた。子らを生きのびさせる為に、知恵はたらかせ、五合の米に、五合のおからを混ぜ合わせ、一升の主食に作りかえる工夫もあみだした。しかし、いとおしみ育てた子らも、ひとたび伝染病がムラを襲うと、たちまちのうちに犠牲になった。部落差別がもたらす劣悪な環境が、容赦なく「宝」を奪っていった。コレラ・チブス・天然痘。伝染病流行の度に、軒付き合わせ、ひしめきあつて暮らす人々を、悲嘆のどん底につき落としした。火葬場に小さな棺が積み上げられ、棺桶の用意さえ出来ない親たちは、一棹しかない簞笥の引き出しに、子のなきがらを納めたと語り伝えている。

「子は宝やで」と言い、「いらん子ないで」と言うおばあさんの声には、いのちのかけがえなさを繰り返し確かめ、撫でさすような思いがこめられている。新しい命を産みだす人に、「しっかり育てたりや」と語りかける声が、私にも重く響いてくる。競争激しい社会の価値観にまどわされ、子を叱りとはしている私。目端のきく子、のんびりした子、どの子も次代を担う宝なのだど気づかせられる。汗を流してさっぱりした身体に、いのちのぬくもりが爽やかに残った。

(日本キリスト教団部落解放センター活動委員)

〈6〉 女教師の養成

——抱負と憐れみと——



明治五年「学割」が發布されて、はじめて女子にも公教育の門が開かれたことは既に述べたが、「女に学問は不用」という長年伝承されて来た一般人の思考は一朝一夕には変わらなず、また通学よりは子守などの家事手伝が期待されたため、女児の就学率は極めて低く、明治半ばに至るまで、男児の就学率の半分以下にすぎなかった。

女児の就学促進のため、教育内容の女子向配慮とともに、女教師養成の必要が主張されたのは当然であった。明治六年、当時の駐米公使森有礼の推挙により来日して文部省学監となったマレー (David Murray) は、同年十二月提出した教育申報の中で、児童教育における女子の適性を強調し、女教師養成の必要を説いたが、彼の母国アメリカでは、十九世紀前半から女教師養成のため公立師範学校が広範に設立されて、その成果が認められていたからである。マレーの申報を受けて、直ちに

文部少輔田中不二麿は翌七年一月早々、女子師範学校設立の建議書を太政大臣へ提出し、それは同月中に許可されて、三月には女子師範学校設立の布達が発せられた。

こうして当局の素早い対応により、明治八年十一月、官立東京女子師範学校が開校した。かねてから女学振興に強い関心を有された皇后は、開校式に行啓して「女子教育の根柢を培養せん為め……庶幾くは自今此校の旺盛に赴き遂に女教の美果をして全国に蕃結するを觀ん事を」の御言葉を発せられたが、まことに高い抱負の下の開校であった。また公立女子師範も同年金沢に設立された石川県女子師範を皮切りに、翌九年には岡山及び富山と、次々に各府県に設立された。

しかし実態は当局の抱負や期待に必ずしも応えるとはかぎらなかつた。もとより女子師範卒業生の中からは世間から尊敬された多くの女教師たちが輩出したが、他方、中途退学者も多く、前記の東京女子師範第一期生七十四名中でも卒業した者は僅か十五名に過ぎず、また地方女子師範の場合は入学者も少なく、卒業生も結婚等で教師にならぬ者が多く、ために廃校になるものさえあった。女性の職業的自立意識など考えられなかつた当時は、女教師になるなどは、家の貧困を助けるためとか、不器量で嫁入り口がないからなど、世間一般からは憐れまれる場合が多く、中には「女のくせに教師になりやがって」と石を投げられた女教師すらいたのであった。

詩

歌

羽生 槿子

わたしは病気で寝ている
隣の部屋では娘が仕事しながら
山口百恵さんの音楽をかけている
百恵さんはうたっている
ときにドスのきいた声でじれったがり
歌声を風にのせ
わたしは眠りと覚醒のあいだをさまよっている
わたしの夢には 泡立つ海と
波のような雲が交互にあらわれている
海は限りなく空に近く
空は海に近い
歌は 二人の乗ったゴンドラが波も立てずにすべってゆく
そんな夢を見ました という
百恵さんの愛の歌
わたしは空と海のあいだでゆれている
目をあげれば きつと空か海があるはず
力をふりしぼって目をあけると部屋の天井だ

わたしはまた眠りにはまりこむ

茂る木々だ 森だろうか山だろうか

木々のあいだをまっすぐに一本の白い道

歌は 急な坂道かけのぼったら

いまも海が見えるでしょうか という

海だろうか 空だろうか

歌は 波のように抱かれるのでしょうか という

わたしの海

娘の部屋からきこえる音楽はいつのまにか

ジャズっぽい打楽器にビートをきかせた英語の歌だ

と わたしの前に リズムにのりアニメっぽく

緑の草原が虹型によきによき生まれ

水色の空が生まれている やっぱり海と空なんだ

家族のいる家でわたしは安心して病氣している

その夜のわたしの夢は 故郷のだんだんばたけの山

長い長い夢だった

わたしは山々をかけめぐり 池をわたり

茂みに秘密の場所をつくり 汗みどろだった

そして次の夜

わたしは人の愛の夢を見た

さつまいもごはん

うゝつ、私の好きな「秋」到来であります。私は無類の暑がりでありまして、夏は苦手で、秋はとにかくいいですねえ、と、のんきにいても、中学生二人の子持ちちゆえ、秋が来ようとは何がこようと、毎日毎日べんとうづくりなのであります。

さてこの季節、今の子にあまりなじみのない**さつまいもごはん**、つまりイモコロごはんをおべんとうにつめたいのです。ふだんの食事にもイモコロごはんはおいしいものですが、現代の子や若い人や男性はちと苦手、という人も多し。ところがこれ、とりの唐揚げとばつぐんの相性があることご存知ですか？ これは偉大な発見でありました。

ただし、二人分位のおべんとうを作るならさつまいもをはじめからふつうに炊きこめばいいのですが、一人分だと炊き上つてからごはんをまぜこむ法になるかな。

●作り方

炊きこむ法は、さつまいもをきれいに洗って皮つきのまま小さめの一口大に切り、水にさらし、米をまぜ、塩ごく少しと酒も少し加えてふ

つうに炊くだけ。一人分の場合は、切ったさつまいもに水ひたひた加え、塩味をつけて煮ます。煮えたら必ずふたを取り、びやーっと水分をとばします。ゆで汁がいつぱい残っていたら捨ててから。形はくずれてもぐつと味よくなります。これをごはんとはまぜますが、両方とも温かくないときさりますから気をつけて。

さて、**とりの唐揚げ**はだれでも出来るものですから説明はいらなと思うものの、この際おべんとう用のやり方をば。おべんとうには骨なしのもの肉を使います。ぜつたいにやっつけてほしいことは、黄色い脂肪を包丁でとり除くこと。熱々でもこの黄色いヤツはいやなのに、まして冷めた唐揚げのこの感触は実にキモチワルイ。

下味をつけ、片栗粉をまぶしたら、揚げ油は少なめで、少しとり肉が出ている位がよく、はしでくるくる回して最後は火を強く。こうするとカラリと揚がり、さめてもうまし。あと、緑の野菜のおひたしと、キャベツの塩もみレモン酢あえ程度でいいでしょう。

こんなおいしいおべんとう！ だれか私のために作ってくれないかしらん。



急増する

男性版じゃぱゆきさん

酒井和子

赤かぶ屋の向かいのタバコ屋のおじさんに、東南アジアの青年がたどたどしい日本語で話しかけている。「おじさん、隣の駐車場に置いてある自転車、ボクがもらって修理して乗ってもいいですか?」「あれはダメだよ」「でも、捨ててあるみたいだから」「うーん、でも日本の法律ではダメなんだよ、わるいね」

最近、赤かぶ屋の周辺にも外国人が増えてきた。顔をみただけでは日本人かどうか区別がつかないが、喫茶店や公衆電話での会話を聞くといろいろな国の言葉がとびかっけていて、まるでアジア人街だね、と近所の人達が噂している。「うちの子どもの保育園の同じクラスに、まだ日本語を話せないお母さんが三人いるの。母会のおさそいをしたんだけど、なかなか言葉が通じなくて」

「マンションに住んでいる台湾の女性が、仕事がなく困っているっていうんで、封筒の宛名書きの仕事を回してあげたのよ。2DKの部屋に十人位で住んでるみたいよ」

「そういうのは、うちの会社のパートにも、アジアの若い子がいる」とか「社員は五時に帰るけ

ど、その後工場まで働いているのは、東南アジアの人達だね」という声もあった。

私の住んでいる豊島区では、外国人登録者数は五年前には三九〇〇人だった。ところが今年七月には七五〇〇人を越している。昨年以降毎月百人ずつ増え続け、今年に入ってから毎月二百人も急増しているのだ。

もちろん大半は、永住資格のある在日朝鮮人、中国人だが、急増しているのはフィリピン、マレーシア、バングラディシュ、パキスタンの若い青年である。中東へ出稼ぎに行っていたアジアの若い男の子達が、石油不況と円高で日本へと出稼ぎ先を変えているのだ。

彼らがどんな生活をしているのか、地域住人としての権利は、となると行政の対応は全く遅れている。指紋押捺制度のように、外国人は管理するという閉鎖的排外的考えでは、すでに地域社会の中にあふれているアジア人労働者に対応できない。男性版じゃぱゆきさんはこれから増え続けるだろうが、アジアの隣人の生活を知らずに私達ももっと積極的になるべきだと感じている。

経済の目

生活サイドからみた経済

貿易摩擦⑥ 世界企業番付を見て考える

福應 遺香

日米貿易摩擦は、日本企業が低賃金、長時間労働で生産コストを下げ、国際競争力の強い商品をダンピングして貿易黒字を増やすので、米国商品が売れず米国内の失業者が増えるためだという。

それでもアメリカの企業は儲けている

表1の世界企業番付によると、トップは米国のゼネラルモーターズ。売上高は日本のトップ企業トヨタの3.7倍もあり、日本の対米輸出総額600億ドルをはるかに越えている。世界企業ベストテン中八つが米国企業で占められ、日本は15位のトヨタ以下五企業が50位までに入っているにすぎない。日本企業の自動車販売台数が横這いか減産なのに米国のビッグ3は80年代の五年間に35〜90%増産している。売上高では日本の自動車の七企業(国内生産台数の98%)が東になっても740億ドルなのに、米国のビッグ3(92%)は1700億ドルと日本七企業の2.3倍売上高をあげている。

日本の貿易黒字は本当か

また、世界ビッグ企業の売上高には、親会

表I 米国を含む世界の大企業

(85年の売上高、単位百万ドル、カッコ内は前年順位) = 共同

順位	会社名	国籍	業種	売上高
① (3)	{ゼネラル・モーターズ (GM)}	米	自動車	96,371
2 (1)	エクソン	米	石油	86,673
3 (2)	{ロイヤル・ダッチ・シェル・グループ}	{オランダ・英国}	石油	81,743
4 (4)	モービル	米	石油	55,960
5 (6)	{プリティッシュ・ベドリアム (BP)}	英	石油	53,100
⑥ (5)	フォード自動車	米	自動車	52,774
7 (8)	IBM	米	事務機	50,056
8 (7)	テキサコ	米	石油	46,297
9 (13)	シェパロン	米	石油	41,741
10 (10)	{米国電話電信会社 (ATT)}	米	電子・電機	34,909
11 (9)	デュポン	米	化学	29,483
12 (11)	{ゼネラル・エレクトリック (GE)}	米	電子・電機	28,285
13 (12)	{スタンダード石油 (インジアナ)}	米	石油	27,215
14 (17)	IRI	イタリア	金属	26,758
15 (16)	トヨタ自動車	日本	自動車	26,040
16 (14)	ENI	イタリア	石油	24,460
17 (15)	{アトランチック・リッチフィールド}	米	石油	22,357
18 (18)	ユニリーバ	{英国・オランダ}	食品	21,627
⑬ (22)	クライスラー	米	自動車	21,255
20 (21)	松下電器産業	日本	電子・電機	20,749
(以下日本企業のみ)				
21 (24)	日立製作所			20,525
27 (28)	日産自動車			18,226
43 (43)	三菱重工業			14,111

国系企業の売上高の29%にすぎない。いま米

にしては考えることができない。

の日本系企業の売上高は128億ドルで、在日米

産を主とする米国の多国籍企業の存在を抜き

るセブンイレブンなどである。他方、米国内

国家間の貿易収支を見るだけでなく、現地生

クドナルド、高校生を24時まで使って営業す

「文藝春秋」四月号)。日米貿易バランスは、

ソリンのエッソー、モービル、外食産業のマ

の売上高を加えると696億ドルとほぼ日米均衡

社国内と輸出の売上高に、海外にある子会

国から日本への輸出額250億ドルに、在日米

社の売上高が加わっている。日本の国内で儲

系企業の売上高を加えると695億ドル。同様に

けている米国系企業三千社のうち大手300社だ

日本の対米輸出額588億ドルと在日米系企業

社で売上高499億ドル(84年)。日本IBM、ガ

の売上高を加えると696億ドルとほぼ日米均衡

い
ろ
ん
な
十
代
人

「タバコ事件」

今年の夏もあの「甲子園大会」をかかさず見てしまったわけ。とりわけ「苧菜高校」は例のタバコ事件以来目にカドを立てて観てたのだ。例のタバコ事件とゆーのは、苧菜高校の野球部員が深夜公園で女の子とタバコを吸っていたのをエンマ、サマにめっかったというお話。タバコ・女の子・夜の公園と三つ題がととのえば学校関係者の目は金星のように光るもの。なんでかと言えば個人の尊厳をカンラク・格下げするのにもってこいだから。私が一番こわいのはタバコの火の不始末。「内緒ですっててカアちゃんにメツカリそうなんで大あわてで消したつもり」とか、「人にバレそうだったので捨てた」なんてこと。大

♣ 鈴木みち子

体き、コソコソ吸うタバコなんてちいともおいしくないのに。夏休みの間はよく「家の子のタバコをやめさせて!」とママからSOSのおよび出しがある。人にたのまなくたって本当にいやなら自分でやめさせりゃいいものをわざわざ金使って人だのみにするのさ。そんなの知らないよ。と失礼することにしてるけど。タバコやめさせるときやガムをかんでればいい。でも親も教師もガムも嫌い。不良みたいと言うよ。ガムをかむのはノーマンに有効なのに、あの人たち何も知らねーな! だけど、タバコ一本のために丸焼けになるより灰皿一つ買ってやる方が安上りと思うんだけど。どーだるね? 中学生の親が子のタバコで青くなるのは健康でも火事でもなくて、ただただ内申のことだけみたいだよ。やーね。

結婚Ⅱ〈主婦〉

ではないはず

この国のCMでは、歌手であれ、俳優であれ、女性結婚したとたん〈主婦〉として登場させ(られ)る習慣があるらしい。こういう傾向が以前からあったことなのか、つい最近顕著になったことなのかは知らないが、どうも納得がいかない。

昨年秋、エプロン姿の松田聖子が登場して、食事をつくりながら「いつてらっしゃい」「おかえりなさい」と言う大阪ガスのCMを見て、イヤなものを見せられた気がしたものが、松田聖子のあと大竹しのぶに引き継がれて同じようなCMが流されている。

そしてキワメツケは、この春から放映されているライオンの

C
M
の
中
の
女
と
男

ピンキーという合成洗剤のCMのラグネス・チャンである。このCMが、彼女が結婚して〈主婦になった〉ということに乗じて作られたものであることは一目瞭然で、そこには女の結婚Ⅱ主婦Ⅱ炊事・洗濯というあからさまな役割分業押しつけ思想が表白されている。

それまで女優や歌手としてのイメージを振りまいていた人達が、結婚したとたんに、洗剤、それも合成洗剤のCMに登場する(あるいは、させられる)とは、何とも不愉快な話ではないか。気がつけば、藤田弓子(P & G・モノゲンユニ)も、竹下景子(花王・ルナマイルド)も同じく合成洗剤のCMに登場して〈主婦〉ぶりを競っている。

企業の卑しさとともに、タレントの責任も厳しく問われなければならぬ。

♥ 吉田清彦



◆心の中で、つたない祝電を打ちました。心の中なので、通じたかどうか？

「カテイカダ ンジ ヨトモヒツシユウニナルニュース オメデ トウゴ ザ イマス」

八・九月号の「波」をまっさきに読んで、心から感動。「よかったですね！」と叫びたい思いです。遅かったけど、日本もやっと女の底力を示す時が来た！ 半田さんを中心とする「家庭科の男女共修をすすめる会」の皆さんも、きつと「やった!! ついに女子のみ必修の家庭科がなくなる。新しい(文字通り)家庭科が、実施(実践)可能となる」と祝杯をあげたい程、感激しておられることでしょう。十年以上の運動の成果ですね。とりわけ苦しい闘いをのりこえてこられた半田さんの喜びは、想像以上のものだろうと推察して、私も感激の波にひたらせてもらっています。

「中・高校の家庭科が男女必修」というニュースは、歴史上の大ニュースだと思っています。このニュースを、故尾藤操先生に聞いてもらえなかったことが心残りですが、きつと天国で喜んでくださっていることと信じま

す。

89頁の「子どもたちが人間らしく生きていく上での必須の力をつけていけるような家庭科の中身をこそ作ろう。大勢の仲間と共に」という部分を、とても力強く読ませていただきました。私も、その仲間のひとりに入れてほしい。そのためにも、岐阜の読者で話す機会をつくらねばと、新たな意欲がわいてきました。

(岐阜・掛布禮子)

◆八・九月号の「時は到来ーいよいよ」感動しながら読みました。NHKのニュースを聞いた時、私の脳裏をよぎったのは、Weの創刊号の「いでたん いざ」という言葉でした。そして、とうとう、ついに……、おめでとうございます というお祝いを、心でつぶやきました。

養護学校の家庭科研究会を発足した時も、ふと、この「いでたん いざ」が思い出され、気持ちをはきしめたのです。

(高知・舟橋久子)

◆女子のみ必修の家庭科に、終止符を打たれましたことを、心よりお喜び申しあげます。

長い間、ほんとにご苦勞様でございました。今日、この喜びに逢えますこと、*長生きしてよかったですとありがたくてなりません。

「時は到来ーいよいよ」「女子のみ必修の家庭科が、ガラガラと崩れ落ちる音を聞いた」のお言葉からも、お喜びのお声が伝わってくるようで、涙の出る思いでございました。

朝日新聞の「いまこそ家庭科」も切り抜いておりましたが、最後の座談会に半田さんがお出になって、うれしうございました。でもこれからもたいへんでいらっしやいますよ。現職の先生方と共に、先頭に立つて下さいますように。

私の二女が東京女高師に在学中(昭和22-26年)に、学制の改革がありました。その切替えて、家政科が大学に、はじめて学部として発足しました。その最初の開拓者としてご苦勞なされた先生方のご苦勞を直接に知り、そのお教えを受けましたことは、二女にとりまして、生涯での幸せでございました。いま半田さん方の近くにいらっしゃるお若い方々も、きつと二女のように、感謝を生涯持ちつづけ

られる御事と存じます。

家庭科を重視する私共にとりまして、あの時が第一のあけぼの、今日が第二のあけぼのに思われてなりません。(長野・岩崎多鶴)

* 岩崎さんは、いま84歳の方です！編集部

◆この度、半田さんをはじめ、皆様方のお力添えで、家庭科男女共修が現実になりました事を、心よりよこんでおります。八・九月号のWeの「波」にもありましたように、バトンは家庭科教師に渡されようとしています。今後は家庭科教師の力量次第ということ、子供たちが人間として生きていく上に必須の力

をつける家庭科の中身をこそ作ろう、と呼びかけておられる半田さんのお言葉に共感するものです。どうぞ、これからも人間教育としての家庭科のあり方について、指針をお示し下さいますように、お願い申し上げます(徳島・坂井延代) います。

◆八・九月号の「波」を読んで、新聞発表をみた時の胸の高鳴りとはまた別の感動がこみ上げてきて、涙ぐんでしまいました。

(大阪・村上昌子)

◆児玉すみ子さんの連載は、くり返しバックナンバーをも読み直してみる中から、生徒とのもう一つの(ほんとうの)かわり方や自

分自身が見えてくる。……今の生徒と教師の

一方通行で窒息しそうな関係をひらくには、児玉さんのカウンセリングの応用に書かれてある視点が必要です。今の枯れ野のような学校に、みずみずしいのちを与えてくれる、道が開けてくる、そんな気がするのです。

家庭科男女共修。Weを広げながら、森さんの新刊を応援団にして!!(新潟・町田直子)

◆私は現在、小金井北高校の三年F組に在籍中です。児玉先生のクラスです。先生が本をだすときいて、とつともうれしかったです。私達の班が修学旅行で血天井を見た時と、

原の人達の優しさにふれた時の感想を先生に話した言葉がのっていたので、もう修学旅行の時のあの感激がよみがえってきました。

私は児玉先生のことについても尊敬しているので、また本をかいてくださったらなあ、と思います。

最後に……この本は私の嫁入道具にします。(東京・元吉美保子)

◆七年前に、私達(あごらメンバー)が、札幌中の産婦人科に電話をし、足を運び、「出産への夫の同伴・協力」の意義を語り、「これを願う女性には許可してほしい」と話したことがありました。どの医師も「はねあがった

恥知らずのわたたちの素人考え」だと決めつけるような態度で一笑し、拒絶するのが当然、といった風でした。あの時の憤りと屈辱感をまだ覚えています。でも、今ならきつとそんな態度はとられないことでしょう。大新聞でも実例紹介の形で、前向きに取り上げるようになっていくのですから。

家庭科の男女共修も、あと数年たつたら、「一笑」なんてことは少なくとも、文部省でも石頭の校長さんでも、表向きにはできなくなる、意義は認めざるを得なくなる。

わたたちの細々とした、憤りと屈辱感のまざりあつた闘いの寄り集まりが、やっばりジワジワ社会を変えている。ジワジワ困窮も越えながら社会を動かしている。そう思って、これからの「細々」も続けていきたいと思っています。(川崎・山口里子)

◆今年の四月から、子供の通っている保育園の名簿が変わりました。これまでは、ほぼ全国的な「慣行」である「男が先で女が後」方式だったのが、子供の担任の保母のMさんのご苦労で、女が先頭で男がしんがりになったのです。これは二・三月号の鈴木頼恭氏の文に感動し、Mさんにそのコピーを手渡したことがきっかけでした。(小金井・岩崎美穂)

泉

情報の頁

◆集会◆ 家庭科の男女共修をすすめる会

—語り合おう—

- ・ 教課審の中間まとめを受けて、文部省の考
えと「会」の今後の運動を話し合う
- ・ 講師 牧野カツコ
- ・ 日時 10月25日(土) pm 1時半～4時半
- ・ 所 婦選会館(国電新宿駅下車)
- ・ 連絡先 ウイ書房 (☎03-326-1380)

◆学会◆ 日本臨床心理学会

- ・ 日時 10月18日(土) pm 1時～5時、19日(日) am
10時～pm 5時
- ・ 内容 <シンポジウム> 精神医療改革はどこへ
行くか <同2> 心理臨床家の資格・専門
性・現場での問題をめぐって <映画> 「フ
ラックボード」

・ 所 東京都中部総合精神衛生センター(京
王線八幡山駅下車)

・ 問合せ先 国立精神衛生研究所内 学会事
務局 (☎0473-72-0141～8)

◆絵はがき◆ 織田が浜—保存運動に—役

・ 愛媛県今治市の織田が浜は、瀬戸内海に面
した美しい白浜。その浜が市の港湾計画で
埋め立てられようとして、'83年以来反対運
動が続けられている。自然の砂浜は、一度
埋め立ててしまえば、もう元にはもどらな
い。織田が浜育ちの羽生槇子さんと長野ヒ
デ子さんは、「育ててくれた浜のため、私
たちにもできることを」と織田が浜をたく
さんの人に知ってもらうため、羽生さんが
詩を長野さんが絵を描いた絵はがきを作っ
た。売上げ金は「守る会」に全額カンパする
。一組(6枚入り) 400円(送料無料)

・ 申し込み先 想像発行所 〒223横浜市港北
区下田町6-14-33 羽生方 ☎045-61-
5224 郵便振替口座・横浜6-111130

◆反原発リーフレット◆

それでも原子力発電を選びますか?

・ ソ連チェルノブイリ原発事故を最後の教訓

とするためにも、今、できるだけ多くの人
にもっと原発について知ってもらう必要が
ある。今回の事故、原発の危険性などにっ
いて分かりやすく説明したのがこのリーフ
レット。ほうっておいても原発はとまらな
い。できることから始めよう

・ 頒価 1部20円、100部以上1部15円(送料
実費)

・ 申し込み先 反核、パシフィックセンター東
京 〒113文京区向丘1-3-7 自主講座内
☎03-815-1648

◆講座◆ 母性解読連続講座

・ 「母性」っていったい何? 「母性」が強調
される背景は? それを解明すべくしまっ
た母性解読連続講座

・ 第7回・9月30日(火) pm 6時半～9時

・ <母性と技術> 女からだはどのように扱われて
いる?—第三世界から 綿貫礼子
所・新宿区立婦人情報センター(都営地下
鉄曙橋下車)

・ 第8回・10月14日(火) 同

・ 科学技術は女を母性から解放するか?

・ 長沖さと子(所・未定)

・ 連絡先 '82 優生保護法改悪阻止連絡会

〒160 新宿区荒木町23 中沢ビル3F 「ジョキ」内 ☎03-353-4474

◆公開連続セミナー◆ 人間学とはなにか
—新しい人間像のために— 「自然」な生き方を求めて)

・講師 小原秀雄

・日程 第一講座—人間学入門 10月19日

11月9日、23日、第二講座—自己家畜化論

87年1月18日、25日、2月1日、15日

第三講座—人間学方法論、人間学とは 3

月8日、22日、4月5日 計10回

各回pm2時~4時半

・所 労音会館505号室(国電水道橋駅下車)

・参加費 二万円(一回のみ二五〇〇円)

・申し込み 左記の連絡先へハガキで

・連絡先 人間研究会事務局 〒160新宿区百人町1-3-17 佐竹ビル内 担当・佐竹

◆原稿募集◆ 「思索する心への共感賞」

テーマ「差別」

・「賞」の創設は、主宰・柳田由紀子さんが青山学院の不当解雇に対する10年の闘いで勝ち得た和解金250万円を基金としている。

「賞」創設趣意書で「この心的荒廃のさま

は、われわれが〈言葉〉への信頼を失い、〈運動〉に情熱を失い、しかし確実に〈時〉を移りゆくなかで、思索する心を放棄しつつあることにも起因するのではないか。…この『賞』は、いわば小さな小さな思索の広場を創り出す試み」と語る

・枚数 400字詰原稿用紙20枚以上(未発もの)

・締切り '86年11月30日

・送り先 〒202東京都保谷市柳沢2-5-3

・柳田方 「共感賞」選考委員会

・発表 '87年3月中旬 葉書にて通知、入賞

作及び佳作は小冊子にまとめ希望者に頒布

・賞金 10万円

・選考委員 中島通子、秋田瑞枝、星野弥生、杉本仁、柳田正樹

・原稿末尾に氏名・生年月日・職業・住所・

電話番号を明記の上、往復葉書を同封。応募原稿は原則として返却しない

◆本◆ 『これからの家庭生活技術—子どもの実態と家庭科をめぐって』

・「生活技術の機械化や社会化が進むなかで子どもの生活自立能力の乏しさが指摘されるいま、子どもの実態を知り21世紀に生きる子どもたちに与えたい生活技術は何かを

考える必要があります」と、日本家庭科教育学会東北地区会は84年に実施した子どもの家庭生活認識に関する調査に続き昨年3月に実施したのをまとめたもの。

〈目次〉第一章私たちの行った家庭生活技術調査、第二章家族をめぐる生活技術、第三章食生活の技術、第四章衣生活の技術、第五章住生活の技術、第六章実技調査からみた生活技術、第七章座談会・実践力を育てる家庭生活技術の教育

・A5判・155頁 定価800円・送料200円

・申し込み先 福島大学教育学部家庭科教育研究室 〒960-12福島市松川町浅川字直道2

◆お近くの方いらっしゃいませんか◆

・9月25日(木)am10時~12時、「田無Weの会」

所—田無市中央公民館、連絡先—姫野(☎0424-67-9234)

・9月28日(日)am10時~pm3時、「家庭科教育実践セミナー」・所—高等学校教職員センター(札幌市・☎011-231-0816)

・10月8日(水)、13日(月)pm6時15分~8時15分

「これからの『家庭科』を考える」・所—

神奈川県立勤労婦人会館(☎044-511-0451)
(いずれも講師は半田たつ子)

十字路



■北海道 父母は教科書に関心なし? (北海道新聞7/17)

札幌市では、来年度が、採択替えの年に当たると、中学校用教科書の見本展示会を開いているが、反応はパッとせず、特に親の関心は薄く、見学者がほとんどいないという。小学校用教科書に比べ、関心は例年低く、市教委は首をひねるばかり。(廣瀬直子)

■青森 高校家庭科に望む(東奥日報6/19)

投稿欄「明鏡」から21歳・S子さんの声。「……思い返してみれば、私のように高校家庭科に興味を持たない生徒はたくさんいました。こうした高校家庭科授業を改め、近い将来には男子も履修するようになるようです。私を受けたような授業内容では、男子までもひきつけるということはとても無理……もつと魅力ある内容にしてほしいものです。家庭科教師は技術を持ち、生涯教育にも結びつく個性ある教師を配置することを期待したいのです」(須藤長子)

■秋田「いじめ」は鎮静化? (毎日7/19)

秋田市で開かれた「いじめについて考える

集会」(婦人団体・PTA・市教委主催。百五十人参加)で、椎名靖典教育センター指導

主事は、県内の電話相談の件数が昨年より大きく下回っている点にふれ、「相談件数だけから推察すれば、いじめは鎮静化の傾向をたどっていることになるが、いじめが現象として減ってきていても、必ずしもいじめ発生の病根がなくなったことを意味するわけではない。いじめの解決はいじめの解消で終わらない。いじめが起きたことを真剣に受け止め、子供たちにとって何が欠落していたかを見極めることが大切」と語った。(佐々木レツ)

■岩手「婦人雑誌」様変わり(岩手日報7/25)

盛岡市大通の書店では、三十余種の女性誌が毎月店頭に並ぶ。その中で一番売れ行きがいいのは「ノンノ」そして「アンアン」「モア」「ウイズ」と続き、最近伸びが目立つのは「オレンジページ」だという。「ノンノ」を読んだ人たちが結婚して、主婦としてのキャリアを積んでも、おそらく従来の婦人誌は読まないでしょう。そういう人たちが生活情

報誌的な「オレンジページ」の読者につながっているのかも」と分析。(福岡悦子)

■宮城 施設より地域活動を重視(河北新報6/22)

高齢化、核家族化の進行に対応し、現在の施設中心の福祉から地域ぐるみの福祉重視に転換していく、厚生省の「福祉ボランティアのまちづくり事業」(ボランティア事業)の指定を受けた仙台市社会福祉協議会では、十年後を目指し、新しい社会福祉に本年度から本格的に取り組み、連絡協議会の設置、センターの開設に加え、地区ごとの福祉委員会の設置、地域ボランティアの登録促進、活動の一層の充実に努める方針。(加藤弘子)

■千葉 夏休みも万全体制(朝日7/23)

市川市教委は、22日までに、市立小、中、養護学校の全教諭に対し、夏休み中の当番勤務(日番)を拒否しないことを求める文書を送った。「最近、非行や事故が相次いでおり、夏休み中に何が起きてても、すぐ指導できる態勢づくりが必要。母子・父子家庭、両親のいない家庭の子が公立小中で二千六百三十一人もいる他、共働き家庭が三三・八%もある」夏休みは子どもを家庭にかえす。教師は自宅研修ではすまされないとしている。

(木田直子)

■東京 企業研修で「家庭」討論(朝日7/28)

企業の研修などを手がける日本生産性本部が、サラリーマンの精神面の健康について、個人の問題としてだけでなく、組織の活性化、社員の能力開発の観点からも重要だとし、七年前から開いているメンタル・ヘルス大会に、今回はじめて「家庭のメンタル・ヘルス」が分科会で取り上げられた。転勤や単身赴任、子供の登校拒否、いじめなど、家族にかかわる心の問題に企業も関心を持たざるをえない時代のようだ。(福井晴江)

□男子社員にも育児タイム(毎日7/1)

スーパー大手の西友は、男女を問わず育児のための勤務時間を短縮できる「ベビーケアタイムシステム」を一日からスタート。男女の別なく育児時間を明文化したのは初めて。短縮できる時間は一日二時間を限度として三十分刻み、始業時間、終業時間の変更、昼食時の休憩時間の延長のいずれか。(三橋典子)

□原爆慰霊式へ市民派遣(朝日6/16)

国際平和年にあたる今年の夏、三鷹、保谷両市は記念事業の一つとして、八月六日に広島市で行なわれる慰霊式への市民派遣を決め

た。両市とも非核都市宣言をしているが、この種の市民派遣は初めて。(姫野順子)

■神奈川 身近な「戦争」実感(朝日7/19)

川崎市労連は結成三十五周年を記念して、横浜ノースドックや横須賀海軍施設など海側の軍事施設を見る県内基地めぐりを行なった。市立川崎高生や女子大生ら九十三人が参加、ミッドウェーや並ぶ軍艦を目の当たりにして口々に「日本が平和だなんてとんでもない。日常生活と密着して戦争が点在していることがわかった」と驚いていた。(山口里子)

■福井 ストレスっ子のカルテ(福井7/17)

食べたくない少女、息が苦しい、胃かいよりの園児……と、取材レポートで子供たちの叫びに耳を傾ける。「家庭で、学校で、ストレスの矢が飛び交い子供の心が傷ついている。ストレスを大人のように処理できない子供は、不安、緊張を体の障害に転嫁して危機を切り抜けようとする。新しい病気、心身症は子供の体もむしばみつつある」と(山崎京子)

■新潟 家内労働者は高齢化(新潟日報5/20)

県内の家内労働従事者の高齢化が進み、一般労働者の時短推進のあおりで労働時間も延びていることが労基局の調査で分かった。平

均年齢は四六・五歳、平均就業時間は一日、八・五時間、就業日数は月二二・五日となっている。(山口久子)

■愛知 助け合いのネットワーク(毎日6/26)

名古屋地域婦人団体連絡協議会では七月から男女を問わず登録した会員が助け合う家事援助組織「ファミリー・サービスクラブ」を始める。原則として短期・短時間労働で、留守番、掃除、食事の支度、病院への付き添等、登録すれば困ったときは、いつでも頼め、頼まれる方は実収入につながる、いわば有償ボランティアの一形式。報酬は、職種にもよるが、一時間五百円見当の見込みという。(岡本のりこ)

■大阪 専業主婦に特別枠(赤旗7/16)

大阪市立大学は、来年度から経済学部第二部(夜間)に主婦を含む社会人特別枠を設ける。特別枠は同部の定員六十人のうち十人。出願資格は高校卒業後五年以上の実務経験者としているが「家事専従も含む」と明記している。社会人向けの特別入学制度を実施している大学が最近増えているが、専業主婦にまで対象を広げたのは同大学が初めて。(由良サダコ)

アノテナ

◆「社会科」を大幅改変 教課審◆

教育課程審議会は7月21日総会を開き、最後の懸案事項となっていた社会科について、課題別検討委員会の報告を受ける形で改定の基本方向を決めた。主な点は①小学1、2年生の社会科は理科ともども廃止し、新教科「生活科」に統合する②小学3年生以後の社会科の教育内容を「日本人としての自覚のかん養」などを重点に抜本的に再編成する③高校で、唯一の必修科目である「現代社会」を選択とする——など。

「歴史教育」を独立させよ、という主張もある「教科枠」の問題については、秋に発足する高校分科会で検討する。

岸本重陳・横浜国大教授は、文部省は「現代社会」を考える力を養う科目といいながら、教科書作成の過程ではその姿勢がない。歴史教育の独立は「これが正しい国定歴史だ」という心情体系が、教義として押しつけられること。改定の姿勢、方向は、「社会科解体」に近いと。(朝日、7・22)

◆体育に「武道」復活 教課審◆

教課審は、中学・高校の男子の必修領域である「格技」を「武道」とすることで合意した。「武道」は戦争中の必修科目、戦後廃止されたが、その復活である。「武道」に空手を選択種目として加えたり、授業時間を増やす方向も検討されている。

道徳については、副読本の選定・助成制度をつくり、「準教科」化を進める方向もあり、いよいよ教育課程の「戦後総決算」の色合いが濃い。(朝日、7・22)

◆小学1・2年の「生活科」◆

文部省の「小学校低学年の教育に関する調査研究協力者会議」は、小学校1・2年の「社会科」と「理科」に代わる新しい総合教科として「生活科」(仮称)の創設を

発表した。すなわち今後の低学年教育は、①読み、書き、計算の能力の育成の重視②基本的生活習慣の育成や、道徳的な心情を陶冶する指導の一層の充実③児童の心身の発達状況に適合する総合的指導への配慮—の3点を特に重視すべきという。

この前提に立って「生活科」は社会認識や自然認識の芽を育て、自己認識の基礎を培い、生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立の基礎を養うとした。

しかし、社会、理科の教育学会、教員団体は、新教科の性格はあいまいで「第二道德科」になりかねない科学的思考力の積み上げを妨げ混乱させると強く批判している。(朝日、7・30)

◆教科書検定 自民の批判に沿う形で◆

来年度の中学・高校の教科書に対する文部省の検定作業が終わり、7月10日全国一斉に教科書展示会が始まった。併せて文部省は検定経過と内容の一部を公表した。社会科教科書の検定については、防衛・自衛隊、天皇・神話、権利・義務、核、北方領土、家庭・老人問題などをめぐり一段と踏み込んだ指示が出され、「政府・与党の政策・見解を検定を通じて書かせる教育行政の総集編」との結果になっている。また、中国、韓国などからの批判を受ける形で異例の修正が行われた「日本を守る国民会議」作成の高校日本史教科書では、「検定規則に定めのない修正要求でも大臣権限で可能」と見解を表明した。(朝日、7・10)

◆自民304議席◆

自民党は7月6日行われた衆・参同日選挙において、衆院300、保守系無所属からの追加公認も含めると304議席を得て過去最高記録となり、参院でも安定多数を確保し、選挙区では50議席とこちらも過去最高。社会、民社両党は惨敗、とくに社会は初め

て90議席を割り込んで85議席に低落、公明党は伸び悩んだ（この数字は、さらに新自由クの復党によりプラスされる）。

（朝日、7・7）

第三次中曽根内閣の藤尾文相は、教育改革に取り組む姿勢を「占領下でスタートした制度の下で、戦後40年間の教育がゆがめられている。本来のものに据え直さなければならぬ」と説明、首相は「大賛成だ、よろしく願います」と答えた。藤尾氏は、自民党政調会長当時、教育勅語精神の復活を提唱するなど、戦後教育のあり方に否定的な考えの持ち主として知られた人。

（朝日、7・26）

◆ 性教育指導 初の手引書 ◆

文部省は8月8日、初めて先生向けにまとめた「性に関する指導」手引書の内容を発表した。それは、「健全な異性観を育てるのが先決」と道徳面に力を入れ、男女交際のあり方にまでさかのぼって説いている。「自信を失いがちな」先生には「科学的な知識を生徒に与えるとともに、生命尊重、男女平等の精神に基づく正しい異性観を持ち、望ましい行動をとれるように」と。

手引書は、性道徳の確立を前面に出した点で、戦後、文部省が繰り返し出した「純潔教育」の通達などの考え方の延長線にあるが、「性の問題に焦点をそぼった指導資料としては初めて。戸惑っている先生に、性の指導が特別なことではないことを知ってもらいたい」（文部省中学校課）と説明している。約100ページ。全国の中学、高校に配られるほか、市販（定価170円）もされる。

（朝日・読売、8・9～10）

◆ 「指紋押捺」改善急ぐ ◆

外国人登録法にもとづく指紋押捺制度の改正に、法務省は検討を急ぎ出した。現在は「回転式」から「平面式」に変えた押捺を5年毎に行っているが、入国時に1回だけと限定する案。実現すれば、すでに押捺した人は今後なくてよい。しかし、最初に拒否した人をどうするかという検討課題もある。登録証明書を運転免許形式にカード化する案、登録期間を10年にする案も検討されている。これで在日外国人の負担が軽くなるが、制度の根本的解決にはなら

ない。（朝日、8・17）

◆ “恍惚の人”対策本部設置 ◆

厚生省は痴保性老人への対策として、8月中にも「痴呆性老人対策推進本部」を設けることを決めた。当面実態調査や予防研究、専門職員の養成などに取り組み、老人科学の研究を一本化した「長寿科学研究機関」の設立準備を進める。来年度は都道府県に「シルバー110番」を設け老人の悩みに対応できる体制を作る。（朝日、8・13）

◆ 2021年には超高齢社会 ◆

厚生省の人口問題研究所は8月22日、「日本の将来人口新推計」を発表した。これによると、2013年には総人口のピークを迎え、13600万人に達する。総人口に占める65歳以上の割合は、2021年がピークで国民の「ほぼ4人に1人」はお年寄りという超高齢社会に突入する。（読売、8・23）

◆ ビル解禁へ基準作り ◆

厚生省の「経口避妊薬の臨床試験実施に関する研究班」は今後の医学的評価の対象として低用量ピルを取り上げ、臨床試験ガイドラインを作成し、年内に報告書を提出する。これまでの検討結果によると、欧米の疫学調査などでは経口避妊薬と血栓症などの循環器系疾患との関連を示す統計学的有意差は認められないという。臨床試験を経て実用化は三年後になりそうだ。

（読売、7・18）

◆ 「NLP」反対派が圧勝 三宅島 ◆

米空母艦載機の夜間離着陸訓練(NLP)飛行場の建設問題をめぐり、7月28日、東京・三宅島で行われた賛成、中間派村議2人のリコール投票は、即日開票の結果、リコール賛成票が74—78%を占め、建設反対派の圧勝に終わった。三宅村議会の構成は、反対派8人、中間派3人、賛成派ゼロ、欠員3人となり、50日以内に補欠選挙が行われる。リコール投票は平日にもかかわらず80.77%の投票率を記録し、反対派のリーダーでもある寺沢晴男村長は「国や東京都はこの結果を尊重して、一刻も早くNLP問題にケリをつけてほしい」と語った。

（読売、7・29）

〈表紙のことば—加藤由美子〉

潔く夏を手放せずにウロウロしていた目に、今朝とびこんで来たのはまぎれもない秋の日射し。一瞬、また一瞬生まれは消える紅葉とのつづれ織り。また秋を損しちやつたぞッ。取りもどさねばと私は窓から身を乗り出します。

★Weバックナンバーのご案内★

- (vol.1) (vol.2) (品切れ)
 (vol.3) 4月号 PTAって何
 5月号 いまこそ、家庭科を問う
 6月号 地域に生きる
 7月号 少年・少女たち
 8・9月号 “遊ぶ”ということ
 10月号 支え合いつつ ひとり立つ
 11月号 “病む”ということ
 12月号 つきあいを考える
 84年増 自分らしさをこそ
 1月号 学び・教えるとは
 2・3月号 “育てる”ということ
 (vol.4) 4月号 性をどう語る
 5月号 結婚の風景
 6月号 家族、その人間関係
 7月号 離婚と子どもたち
 8・9月号 法律と私たち
 85年夏増 働き続けるために
 10月号 いま、熱く女の時代
 11月号 みのりの秋に
 12月号 人間と土を生かす
 85年冬増 自分らしさをこそⅡ
 1月号 くらしの文化を探る
 2・3月号 水はいのちの泉
 (vol.5) 4月号 幼い日—大人は忘れてしまった
 5月号 子ども—大人の勝手な思い込み
 6月号 “いじめ”—その根っこには何が？
 7月号 性—小・中・高校生は何を思う？
 85年夏増 こどもたちへ—大人になる旅
 8・9月号 親—いま、学校に何ができる？

クになりそう。

(青木)

どうぞよろしく。(中野)

下さい。

(馬場)

皆さん、ありがとう。(半田)

◆富士吉田での夏季フォーラムから帰って、ホッと一息。富士山の見晴らしもすばらしかったし、さわやかな空気がおいしかった。昨年のフォーラムでの中嶋里美さんの提案から、今年の参加者名簿には「関心を持ってのこと、語りたいこと」がのって、個人を知ることが役に立ちました。短い三日間、とても話しかれなかつた思いは、手紙でつなぐと、Weのネットワークになりそう。

◆夏季フォーラム直前、ピッチヒッターの子供責任者になりました。ひたすら無事だけを願って終了時は大満足だったのですが、その後、責任者として至らなかつたことなど思い返しています。◆大室君子さんの繊細な『野の花をたずねて』の絵はがきは好評でした。が、今度淡い五色のものに生まれかわりました。五枚一組三百円。送料は一組六十円、十組以上は無料です。

◆最初に♥印を読んで下さい。そしてお願い。あなたのお仲間もう一人を購読者としてお誘いしてほしいのです。永畑さんの「家庭科がようやく男女共修になった経過を最初の教材としてほしい」に共感します。教

研や身近な集りの時「男女で学ぶ新しい家庭科」(森幸枝著)を皆さんに紹介していただきたい。5冊以上1割引、10冊以上2割引。はがきや電話でお申し込み下さいます。フォーラム盛会、皆さん、ありがとう。(半田)

新しい家庭科—

Vol. 5 No. 7 1986年9月20日発行
 ¥530(年間購読料・増刊号含 ¥6700)
 編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
 ☎03(326)1380 振替 東京6-59867
 印刷所/(有)若佐印刷所 〒112 文京区春日1-6-7

旭川 京栄書店
 札幌 幌松 北東京堂書店
 苫小牧 矢野書店
 伊達 熊谷書店
 函館 新生堂
 青森 神田書店
 盛岡 成田本店
 花巻 山堂、みみずく書房
 水戸 誠山房
 仙台 松田書店
 一本の木の店
 プーの家、八重洲書店、萩書房、高山書店、千忠書店
 古川 高山書店
 秋田 ホビット館
 横手 加賀屋書店
 酒田 金木商事
 山形 八文字屋
 高陽堂書店
 ほんべい
 尾花 沢川書店
 鶴岡 阿部久書店
 福島 岩瀬書店、西沢書店
 郡山 松文堂
 会津若松 ニシザワ
 保原 木村書店
 藤前 川島朝日堂
 中之部 アノブス社、逆書館、煥乎堂
 宇都宮 島村書店
 水戸 杉山書店
 土浦 ツルやB.C
 浦和 白石書店
 川口 岩淵書店、須原屋
 新井書店
 越谷 ブックスサトウ
 東松山 日野屋書店
 狭山 比企文化社
 蓮田 山屋
 大宮 楓書房
 マスタ書店
 阿里書房
 飯能 ベンギン書房
 めいわどう
 安藤芳文堂
 やマトウ書店
 みやかわ南口店
 鴻文堂
 橋本 前原かつば、西武
 B.C. はつらつ書房
 松戸 元山書店
 津田沼 大和屋書店
 鎌倉 岡田書店
 佐原 多田屋
 市川 大杉書店、千里堂
 浦安 原勝書店
 館山 中島書店
 東葛飾郡 田中書店
 大原 井上書店
 東京 <千代田> ビビ、日成堂、書肆アケセス、三省堂本店、書泉グランテ、東京堂、八重洲ブックセン

ター<豊島>池袋書店、紀文堂書店<杉並>木風舎、新愛書店、プラサード書店、たつみ書房、西萩書店、結<新宿>紀伊國屋書店、模索舎、風書房、伊野屋書店、図南書店<渋谷>すべーす、むがさく<高輪>宏精堂、中村書店、稲田書店、大和書店<世田谷>やまべ書店、江崎書店、桜堂<北>愛京堂<大田>三州堂<荒川>昌栄堂<板橋>裕弘堂、アスカ書店<江東>吉田書籍部、ブックロード<品川>シグマ図書、雄文堂<吉祥寺>ウニタ書房<三鷹>第九書房、たべもの村<武蔵野>いからし書店<調布>神代書店<小金井>かごや書店、緑町大洋堂<府中>国府書店会、一二三書房<国分寺>吉野書店<国立>増田書店、富士見台店<立川>オリオン書房、泰明堂<小平>和中書店、明文堂書店<清瀬>マルオカ書店、飯田書店<町田>久美堂<八王子>小沢書店
 横浜 文教堂、有隣堂、栄松堂、ともだち書房、有文堂、みどり書房
 川崎 北野書店、早川書店、大塚書店
 相模原 中村書房
 鎌倉 たらば書房
 大船書房
 相模大野 相模書房
 藤沢 東松堂
 厚木 内田屋書房
 瀬谷 藤美堂
 綾瀬 榎本書店
 茅ヶ崎 文泉堂
 小田原 伊勢治書房
 平塚 平井書店
 海老名 サクラ書房
 甲府 サンコー書店
 静岡 太洋堂
 清水 吉見書店、森上書店
 磐田 あつみ書店
 浜北 谷島屋書店
 浜津 遠州堂、稲勝書店
 津 丸善書店
 清水 ランケイ社
 田原 戸田書店
 下宮 村上書店
 一宮 文正堂書店
 資栄堂書店
 名古屋 ウニタ書房、ポランの広場、日比野泰文堂、谷口正文館書店、

白樺書房西店、白揚書店、竹中書店、中日書房、きたやま書店、丸山書店、岡崎書房、ナガオ正文堂、豊川堂、ちくさ正文館
 江崎 南 青雲堂
 豊橋 文教堂書店、耕文堂
 岡崎 鈴彦書店
 尾崎 カマクラ文庫
 瀬戸 活人堂
 張旭 三浦書房、春広堂
 愛知 日進書房
 刈谷 酒井日進堂
 岐阜 光文堂書店
 新津 栗山書店、万松堂
 長津 英進堂
 上越 寛張書館
 新潟 春陽館
 越前 稲豊書店
 富山 清明堂書店
 友信堂
 高岡 清文堂、イソップ屋
 岡谷 笠原書店
 本郷 新光堂書店
 長野 平安堂
 上田 英文堂
 飯田 平安堂
 濃 町 靴屋書店
 金沢 かつのみやセー
 ルスセンター、北国書林
 福井 井まわり書店、じっぷじっぷ、品川書店、勝木書店
 敦賀 海光堂
 大 理 海老山書店
 三 別所書店
 大 阪 紀伊國屋書店、ユーゴー書店、樋口書籍、米原十六堂、藤川書店、学の友、西坂書店、呼文堂、もり、富士原文信堂、飯田集英館、川口文堂堂、坂口書店、北村書店
 東 大阪 ヒバリヤ、栗林書房
 泉 かつらぎ
 豊 昌文堂、豊文堂
 高 岡 コーベックス
 吹田 西武
 池田 アーネ江坂本店
 堺 ワールド、西村書店
 清城堂、三教堂
 枚方 立川書店
 岸和田 齊藤書店
 京都 松香堂書店、オデッサ書房、中島書院、山城書店、洛陽書店
 宇治 大久保京都書院
 井田書店
 長岡 恵文社神足店
 亀岡 亀岡書房
 舞鶴 舞鶴堂、北浦愛文堂

和歌山 宇治書店、紀勢堂書店、有馬書店
 神戶 流泉書房、ヒカリ書店、日進堂、文進堂書店、アイヨ書店、幾久書店
 西宮 イカロス書房
 塚新西武B.C
 尼崎 宣文堂書房
 姫路 姫路九善
 浅野八代書店
 明石 学友書房
 岡 池田成章堂
 米 今井M.C本店
 鳥取 富士書店
 出雲 武田書店
 津和野 金山文具店
 松江 大学前園山書店、ブックス文化の友
 広島 やまびこ書店、いづみ書店、紀伊國屋書店
 竹原 草間書店
 尾道 花本書店、啓文社
 福山 岡田書店
 観音寺 タカハシ書店
 高松 松岡書店
 徳島 みやたけ書店
 雄徳堂徳野書店
 ブックスエミール
 土佐山田 依光書店
 北九州 北九州書店、白石書店、黒崎ひとりわB.C
 福岡 金文堂、積文館、金進堂、丸山書店
 二日市 丸山スコレ店
 直方 みやはら書店
 牟田 金善堂
 筑後 吉田書店
 大 川 山口書店
 粕屋 尾崎堂書店
 唐津 まつら書店
 佐賀 金華堂
 長崎 好文堂、童話館
 佐世保 金明堂
 大村 文光堂
 熊本 教育文化用品KK、三章文庫
 延岡 池田書店
 大分 開書堂、今村書店
 志布志 スズキ書店
 鹿児島 加世田書店
 大学生協
 帯広畜産大学、東北大学、岩手大学、福島大学、新潟大学、群馬大学、宇都宮大学、茨城大学、埼玉大学、芝浦工科大学、日本女子大学、東京大学、東京家政大学、成蹊大学、横浜国立大学、山梨大学、愛知教育大学、信州大学、金沢大学、大阪市立大学、立命館大学、宮崎大学、高知大学、香川大学、鳴門教育大学、琉球大学

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本読は書店購入ができます。お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由でご指定のうえ、ご注文下さい。